

心行の言魂

序文

日常生活にとつて、もつとも大事なことは五官にもとづく六根に心がふりまわされないことです。五官とは、眼、耳、鼻、舌、身の五つの機能を指します。五つの機能は、肉体保全のためには、なくてはならないものです。問題は、この五官に私たちの意が働き、六根という煩惱が生じて、ねたみや怒り、足ることを知らぬ欲望が心を支配しますと、自分の心が、まず不安定となり、安心した生活ができなくなります。早い話が、人を見たら泥棒と思えとか、人は人、自分は自分ということになり、知らぬ間に苦悩の輪廻の渦中におちこむことになります。これではどうみても損です。損得の計算からいっても損のはずです。

正法の道は、損得からいっても得の道なのです。なんとなれば安心した道が正法であるからです。煩惱という自分を苦しめる悪の緊縛から離れるので、こんな素暗らしく、明るく、楽しいことはいからです。

煩惱とは、五官を通して働く自己本位の想念と行爲です。あれが欲しい、これはいやだ、という自己中心の肉体的執着、この執着心が強いほど、人の心は不安定になります。ちなみに、生まれたばかりの赤児を想起してください。赤児は自然のままに生きています。ひもじくなれば泣きもし

ますが、満たされればスヤスヤと眠り、あれこれ、恣意を働かせることはありません。嬰兒の顔は平和そのものです。かわいいです。だから、嬰兒を見ていると、たいいていの人は心が和みます。大事に扱います。嬰兒は、自己限定の煩惱がないので、安らぎに満ちているからです。

正法とは、そうした素直な心をいうのであり、自己限定の執着を離れた心を指します。で、それには五官にもとづく、さまざまの欲望から離れること、足ることを知った生活でなくてはなりません。自分の都合のみで心を騒がせては、彼岸である心の安らぎには、いつになつても到達できません。足ることの生活は、まず、正法という中道の生活、調和の生活、慈悲の生活、愛の生活であります。まず、己自身の調和の生活から始まり、次いで、人と人との調和にあります。

「心行」は、宇宙の生成から草をおこした、いわば「人間の原典」であり、安らぎの道を示したものです。會員諸氏は、「心行」の意義をよく吟味され、生活のうえに、これを生かしてください。そうして、真の、あなた自身に立ちかえってください。

一九七五年九月吉日

高橋 信次

目次

序文	4
心行(全文)	10
心行の解説	178
心行概説	185
祈願文(全文)	189
祈願文の解説	206
神理の言魂	

心 しん

行 ぎょう

(全文 ぜんぶん)

心行は 宇宙の神理 人間の心を 言葉によつて

表現したものである それ故 心行は拝むものでも

暗記するものでもなく これを理解し 行なうものである

正法は 実践のなかにこそ 生命が宿ることを知れ

われ今見聞し 正法に帰依することを得たり

広大なる宇宙体は 万生万物の根元にして 万生万物相互の作用により

転生輪廻の法に従う

大宇宙大自然界に意識あり 意識は大宇宙体を支配し 万生万物をして調和の姿を示さん

万生万物は 広大無辺な大慈悲なり

大宇宙体は意識の当体にして 意識の中心は心なり 心は 慈悲と愛の塊りにして 当体意識は不

二なることを悟るべし

この大意識こそ 大宇宙大神霊・仏なるべし 神仏なるがゆえに 当体は大神体なり

この現象界における太陽系は 大宇宙体の小さな諸器官の一つにすぎず

地球は小さな細胞体なることを知るべし

当体の細胞なるがゆえに 細胞に意識あり かくの如く 万物すべて生命にしてエネルギーの塊り

なることを悟るべし

大宇宙体は 大神体なるがゆえに この現象界の地球も神体なり 神体なるがゆえに 大神殿なる

べし

大神殿は万生魂の修行所なり

諸々の諸靈 皆ここに集まれり

諸靈の輪廻は三世の流転 この現象界で己の魂を磨き 神意に添った仏国土・ユートピアを建設せ

んがためなり

さらに 宇宙体万生が 神意にかなう調和のとれた世界を建設せんがため 己の魂を修行せること

を悟るべし

過去世 現世 来世の三世は 生命流転の過程にして 永久に不変なることを知るべし 過去世は

己が修行せし 前世 すなわち 過ぎ去りし実在界と現象界の世界なり 現世は生命・物質不二の

現象界 この世界のことなり 熱・光・環境一切をふくめて エネルギーの塊りにして われら生

命意識の修行所なり 神仏より与えられし 慈悲と愛の環境なることを感謝すべし

来世は次元の異なる世界にして 現象界の肉体を去りし諸霊の世界なり

意識の調和度により 段階あり

この段階は 神仏の心と己の心の調和度による光の量区域なり

神仏と表裏一体の諸霊は 光明に満ち 実在の世界にあつて 諸々の諸霊を善導する光の天使なり

光の天使 すなわち諸如来 諸菩薩のことなり この現象界は 神仏より一切の権限を光の天使に

委ねしところなり 光の天使は 慈悲と愛の塊りにして あの世 この世の諸霊を導かん

さらに 諸天善神あり 諸々の諸霊を一切の魔より守り 正しき衆生を擁護せん 肉体を有する現

世の天使は諸々の衆生に正法神理を説き 調和の光明へ導かん この現象界におけるわれらは 過

去世において 己が望み両親より与えられし肉体という舟に乗り 人生航路の海原へ己の意識・

魂を磨ぎ 神意の仏国土を造らんがため 生まれ出たることを悟るべし

肉体の支配者は 己の意識なり

己の意識の中心は心なり 心は実在の世界に通じ 己の守護・指導霊が常に善導せることを忘れる

べからず 善導せるがために 己の心は 己自身に忠実なることを知るべし

しかるに諸々の衆生は 己の肉体に意識・心が支配され 己が前世の約束を忘れ 自己保存 自我

我欲に明け暮れて 己の心の魔に支配され 神意に反しこの現象界を過ぎ行かん 又 生老病死の

苦しみを受け 己の本性も忘れ去るものなり

その原因は煩惱なり

煩惱は 眼・耳・鼻・舌・身・意の六根が根元なり

六根の調和は 常に中道を根本として 己の正しい心に問うことなり

己の正しい心に問うことは 反省にして 反省の心は 己の魂が浄化されることを悟るべし

己自身は孤独に非ず 意識のなかに己に関連せし守護・指導霊の存在を知るべし

守護・指導霊に感謝し さらに反省は 己の守護・指導霊の導きを受けることを知るべし 六根あ

るがゆえに 己が悟れば 菩提と化すことを悟るべし

神仏の大慈悲に感謝し 万生相互の調和の心が 神意なることを悟るべし

肉体先祖に報恩供養の心を忘れず 両親に対しては 孝養を尽すべし

心身を調和し 常に健全な生活をし 平和な環境を造るべし

肉体保存のエネルギー源は 万生をふくめ 動物・植物・鉱物なり

このエネルギー源に感謝の心を忘れず 日々の生活のなかにおいて 己の魂を修行すべし

己の心 意識のエネルギー源は 調和のとれた日々の生活のなかに 神仏より与えられることを悟るべし

己の肉体が苦しめば 心悩亂し わが身樂なれば 情欲に愛着す

苦樂はともに 正道成就の根本にあらず 苦樂の兩極を捨て 中道に入り 自己保存 自我我欲の煩惱を捨てるべし

一切の諸現象に対し 正しく見 正しく思い 正しく語り 正しく仕事をなし 正しく生き 正しく道に精進し 正しく念じ 正しく定に入るべし

かくの如き 正法の生活のなかにこそ 神仏の光明を得 迷いの岸より悟りの彼岸に到達するものなり

このときに 神仏の心と己の心が調和され 心に安らぎを生ぜん 心は光明の世界に入り 三昧の境涯に到達せん

(この諸説は末法万年の神理なることを悟り 日々の生活の師とすべし)

心行の解説

心行の大意

人は、どこからきて、どこへゆくのか。人間がこの世に生まれるということは、どんな意味があるのか。死とは何か。宇宙はどうしてできたか。魂があるとするならその意義を知りたい。心とは何か、神とはいかなるものか。こうした諸問題、つまり、宇宙と人間、人間の存在意義、心の実相を明らかにしたのが「心行」であります。

それ故「心行」そのものは、通説し、暗記するものではなく、その意味を理解し、日々の生活に、神の子の自分を現わすべく、行じてゆくことでなければなんにもなりません。人間の目的は、己自身の調和、地上の調和にあるからであり「心行」の目的も、そこにあるからであります。

以下、順を追って「心行」の内容を説明してゆきましょう。

まず、最初に「心行」という名称について簡単にふれますと、「心行」とは心の教え、ということであります。心行の内容は、人間と宇宙の関係を明らかにすると同時に、森羅万象の根源は「心」にある、神仏のエネルギーが万生万物を育み、支えていますので、万物の成り立ち、人間の在り方つまり「心」と「行ない」を示したもので、これを「心行」としたわけです。

また「心行」とは、別な言葉でいえば「信行」でもあります。「心行」の最後の部分に、八正道こそ人間悟道に通じるとしてありますが、八正道は、日々の生活に行じてこそ意義があり、悟りを得る最短距離でもありません。したがって、「心行」は、ただ理解しただけではなんにもなりません。これを理解すると同時に、行なうことにあります。つまり信じて行なう、ということなのです。

「心行」とは、それ故に「信行」でもあるわけです。さて、それでは、本論に移りましょう。

我今見聞し、正法に帰依することを得たり

広大な宇宙体は 万生万物の根源にして 万生万物相互の作用により 転生輪廻の法に従う

冒頭の「我今見聞し、正法に帰依することを得たり」というのは、人生経験を重ねてゆきますと、私たちはあらゆる諸現象にたいして疑問が生じてまいります。とりわけ仏教でいう生老病死です。しかし、その生老病死も、原因のない結果はありません。そこで、原因 結果とは何か、原因と結果がある以上は、そこには何らかの法則が働いているはずなのです。その法則とは何か、その法則の在り方を知った時には、私たちは安心した人間らしい生き方が可能であろう。正しい法則に乗った生活、つまり、正法に沿った生き方こそ、人間らしい生き方であることに帰着します。心行の内容

は、宇宙の法則、心の在り方を解明したものですから、これを理解することによって、私は正法にもとづく生き方を守ります、神仏の子である人間に立ち還る、ということをし、いわば、冒頭で、宣言しているのです。

私たち、常識の社会では心行の結論ともいうこの一節は、心行の最後の章にこななければおかしいのですが、人間そのものをつきつめてゆきますと、人間は、神の子、仏の子となつてしまします。そうしますと、人間は、どこからきて、どこへゆくのか、という疑問が氷解し、意思と行動が一つになつてきます。つまり宇宙は自分であり、自分自身の体の一部でありますから、過去も、未来も包含した現実には、生かされ、生きている生命の喜びを味わうことができまいます。自分の意思は、神仏の意思であり、自分の行動は、神仏の行動につながつてきます。

それ故、冒頭の宣言は、神の子人間としての自覚から出た言葉であります。従ひまして、この一節は「心行」の全部を語つており、悟りの境地を端的にいい現わしたといつてもいいのです。

「心行」の本論は、それ故に「広大なる宇宙体は……」といふところからはじまるわけであります。さて、私たちの住んでいる地球、そして宇宙は、あらゆる生命物質を生み出しているところの源であります。地球や宇宙がないとすれば、私たちの存在はありません。天台大師（天台智顛）はこのことを「地水火風空」といつております。地とは地球。水とは水。火は太陽。風は空気。空とは

宇宙です。この五つの元素と、これら五つの元素を元素たらしめているエネルギーによって、人間をはじめとする生命物質が成り立ち、維持されているというのです。同時に、五つの生命素は、それぞれ目的と機能を持ちながら、その使命を果たしています。これらの生命素は相互に作用し合いながら、転生輪廻の法に従っています。この関係を身近な問題についてふれてみましょう。

私たちは、空気を吸って生きていますが、その空気から吸収された酸素(O₂)は、体内の諸器官を通じて体外に吐き出された時は、二酸化炭素(CO₂)にかわります。つまり、空気中の酸素は人間の体に吸われて、吐き出される時は炭酸ガスとして出ますが、空気に戻ると二酸化炭素という化合物に変化します。自動車の排気ガスにしても同様で、その排気ガスはやがて二酸化炭素となります。空気中にもどった二酸化炭素は、こんどは植物が吸収します。その植物は太陽による熱・光の合成により澱粉や蛋白質、脂肪をつくり出します。私たち人間の血や肉は、こうした植物を食べ、このようなエネルギーを吸収することによって形作られ、維持されています。

また植物は、二酸化炭素を吸収し、酸素を空气中に吐き出し、人間の必要な空気の浄化作用に一役買っています。オゾンも出しています。

このように、空気、人間、植物の関係をみても、相互に作用し、ともに生存に必要な働きをしているということです。また、空気中の酸素は、人間の体に入って、外に出た時は二酸化炭素となり、

植物がそれを吸収して、空气中に戻る時は、再び、もとの酸素に戻るという具合に、酸素自体の転生輪廻がみられます。

植物自体も美しい花を咲かせますが、やがてその種を残して、この世から消えてゆきます。しかし、春が来れば、その種は太陽の光を浴び、二酸化炭素を吸収して、緑の葉をのびし、花を咲かせます。このように、転生輪廻というものは、空気にしろ、植物にしろ、万物ごとく整然と行なわれ、しかも、永遠に循環し、滅することがないのであります。

そこでこうした転生輪廻というものは、いったい、なにを基準に、なにを標準にくりかえされているのか。空気にしろ、植物にしろ、水にしても、何千年、何万年経つても、減りもしなければ、増えもしない。一定の質量が保存されています。とすると、大自然の仕組みの中には宇宙を支配しているところの一貫した法則というものがなければならぬ。ただいい加減に、そのような仕組みになつてゐると思えない。大自然の仕組みの中には必然的な流れというものがあつてゐる。その法則とはいつたいなんであるのか、そのことにふれてゐるのが次の一節です。

大宇宙大自然界に意識あり 意識は大宇宙体を支配し
万生万物をして調和の姿を示さん

大宇宙、大自然界には、それを支配しているところの意識というものがありません。

普通、意識とは、物事を認知する力、あるいはそれを支配しているものと解しますが、大宇宙にも、すべての物の根本である仕事をなし得る能力を支配している意識の存在を否定することは出来ません。そうしてその意識の意思によって動かすエネルギーが働いております。意思を持つたエネルギーです。そうして、そのエネルギーは万生万物が調和するように、一定の法則をもつて働いているのです。このことは、私たちの肉体が、この地上に適應できるように生かされている事実。更に、肉体細胞の整然とした核分裂が行なわれていることをみても、理解できると思えます。

目を宇宙に向け、太陽系一つ眺めてみても、太陽を中心として、水星、金星、地球、火星、木星、土星、天王星、海王星、冥王星という九つの星と、これにまつわる三万数千個の衛星が、秩序を保ちながら自転・公転しています。

私たちは通常暦を使つて、年令、時間、月、日を定めています。こうした年月日、時間というものには周知のように、太陽と地球、地球と月の自転公転から割り出したものです。驚くべきことは、時の計算(時間)は、百年に千分の一秒しか狂わないことです。

人間のつくつた宇宙船は、やつと月にまで到着することができましたが、太陽系のこうした神秘からみると、いかにも小さいという感じがぬぐえませんが。

人智に及ばない宇宙の運行をみるときに、私たちは、そこに、私たちの想像も及ばない宇宙の意識、エネルギーの存在を認めざるを得ないと思います。

しかも、太陽を中心に、九つの惑星、三万数千個の衛星が、秩序整然と運行し、調和しています。火星が地球の軌道に入ってきたり、地球が土星の近くに飛んでいくようなことはありません。これらの星々は、宇宙の意識、意思にもとづいて調和しているからです。

万生万物は 広大無辺な大慈悲なり

私たちの肉体は、空気や植物などのエネルギーを吸収することによって肉體保存が可能であり、地球自体の自転・公転によって、地球上での安定した生活ができます。この事実だけをとってみても、私たちは感謝の心を持たなければなりません。

太陽の熱エネルギーについていいますと、一秒間に放射される熱エネルギーは、 9.3×10^{26} キロカロリーという莫大なものです。これは石炭を一秒間に二百万トン燃焼させた熱エネルギーに匹敵します。私たちは家庭や職場でガスや電気を使い、これにたいして代価を払っています。その料金をガス会社や電気会社に払わなければ、会社は無慈悲にも燃料補給をやめてしまいます。

太陽はどうでしょうか。仮に、代価を払うとしたら、私たちの経済生活はなりたちません。幸い

にして、太陽は、人間に、代価を払えとはいいません。ただ黙つて、人間をはじめとして、あらゆる生物にたいして熱・光のエネルギーを放射してくれます。誰彼の差別をつけません。金があるうとなかろうと、地位が高かろうと低かろうと、平等に、そのエネルギーを放射しています。そうして、植物も鉱物も、人間もそれによつて生かされています。

曇天の日が続ぎ、陽の目をみることの少ない時に、私たちは気分まで滅入つてしまうことがよくあります。また、寒い真冬に、庭の陽溜りでくつろぐ時に、太陽の存在というよりも、体をあたためてくれるその熱エネルギーに感謝を覚えます。太陽は、人間がこの世に生をうける前から、存在していましたが、人間は、こうした太陽の差別ない慈悲と愛を、身近に感じすぎて、当り前のように受けとり、すごしています。しかし、曇天の日が続いたり、寒い真冬に太陽を見るときに、私たちはあらためて太陽の存在を認識する必要があると思ひます。

太陽のない世界を一度でも想像したことがあるでしょうか。我々人間はもちろんのこと、地上の生物は生きてはいけません。陽の当らない地下の生物も、海底深く遊泳する魚類にしても、生きることは不可能です。なぜかといいますが、地球の生物は、太陽の熱と地球の自熱によつて生命を保っています。太陽がその光を消しますと、地球もまた、その生命活動を停止します。地球自体の熱源は、電磁波重力というものを媒体にして太陽熱を、吸収保持することによつて維持されてい

るのです。

地球の内部は、火山をみても分かる通り、溶岩となつて燃えています。それはまさに小太陽のよ
うに燃えているのです。小太陽は親太陽の影響を、たえずうけていることを知つてもらいたいと思
います。

これについて人間の肉体の例が分かりやすいと思えます。心臓から出された新しい血液は、各血
管を通つて肺臓、肝臓、あるいは胃腸の働きを助けています。しかし、心臓がその機能をとめたな
らばどうでしょうか。各諸器官も、同様にしてその機能をとめてしまいます。血液の万遍ない働き
によつて肉体の各諸器官は活発に活動し、生活することができなのです。

太陽の熱・光のエネルギーというものは、このように、地球自体の活動は勿論のこと、地球に住
む生物にたいしても生命を与えています。

私たちは、この広大な大慈悲に感謝しなければなりません。太陽は人間がこの世に生をうける前
からあつて、このために、それは当然のことのようにうけとつてしまふのが人間の常でありますが、
地球をとりまく諸々の環境、そして、太陽の存在をあらためて見直したときに、そこに、神仏の大
きな慈悲と許らいのあることに気づきます。

太陽を拝め、先祖に感謝せよ、という説教は、これまで多くの宗教家たちが説いてきました。し

かし、太陽が太陽として、太陽たらしめているものは何か、という段になると、大抵はアイマイ模
糊となるようであります。

すなわち、宇宙の実相 生命の不変、心の存在ということになりますと、分からなくなつてしま
うのであります。

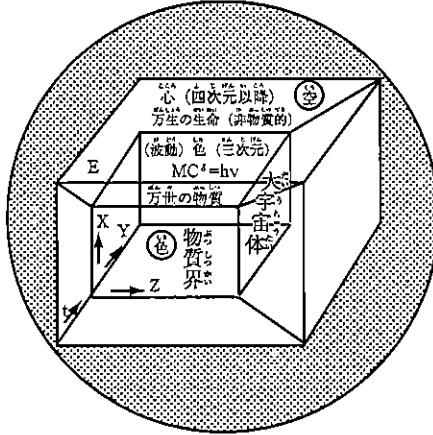
大宇宙体は意識の当体にして 意識の中心は心なり

すなわち、太陽をふくめた宇宙全体は、ある偉大な意識そのものの中にあつて動いている。動か
されている。そうして、その意識そのものは、宇宙の心が中心をなしているのであります。

大宇宙というものは、ただ漫然と、偶然に出来上がったものではありません。時間の例ではあり
ませんが、百年に千分の一秒しか狂わないほどの正確さで動いています。別な言葉でいえば、大
宇宙の構成というものは、最初から計画され、その計画にもとづいて動いているのです。計画から
外れたものは何一つありません。そうして、その計画は意識の中心である心によつて、必然の過程
の下に動いているのです。このことを自律作用ともいいます。

偶然とか、チャンスというものは、本当はありません。偶然とか、チャンスという言葉は、人間
は一寸先が闇で分かりませんから、そういう表現を使つてにすぎないのであります。

さて、その自律作用の中心をなしているのが心です。



上図は高次元から三次元の物質世界までを表わしたもののだが、これは同時に物質とエネルギーは共存し、また両者は一つのものであることを説明している。一つのエネルギーが二つに分かれ、神の意思の下に運動をつづけているので大宇宙は常に調和が保たれているわけである。

エネルギーというものには、すべて中心があり、核というものがありません。物質は原子からなりたち、原子は原子核というものから出来ています。そうしてその核の中には、プロトンと、ニュートロンが存在し、核を構成しています。陽子と中性子です。その核を中心に、いわゆる陰外電子が、一定の軌道を通じて円運動を続けています。核と陰外電子の関係は、完全に調和されています。

太陽のまわりを地球や火星が円運動を行なっているのと同じです。

自然は、常に調和されています。また調和されるように出来てきます。それは神仏の意思にもとづいて動いていますから、不調和を起さず余地がないのであります。

さきほどの自律作用です。神の意思による自律作用です。

私たちの肉体細胞も同じです。

細胞自体も、核というものの中に、それぞれ五つから成るエレメントにより構成され調和を保つております。そうして、細胞自体の生活を続けています。核が、もしも死滅するとすれば、細胞自体も亡んでしまいます。

このように、大宇宙大自然界は、原子の世界も、私たちの肉体細胞も、核を中心に調和されていきます。

同様のことは、肉体を支配しているところの意識についてもいえます。その意識の核、つまり心というものが中心を成して、意識そのものを機能化しているのです。

心は慈悲と愛の塊りにして 当体意識は不二なることを悟るべし

慈悲とは、一言でいえば、なまけ、いつくしむ、思いやりということ。人の苦勞を見て、なんとか助けてやりたい、苦勞をとり除いてやりたい、樂にしてやりたいという心です。これは自己を滅却し、自己が拡大された姿です。広い心の高い境地です。

インドにおける釈迦はこの慈悲の心を人々に説きました。人間は誰しも慈悲の心を持つており、

この心があるからこそ、人間は人間としての資格と権能(悟り)が与えられているのだということです。

なさげ、いつくしむ、という心は、それ故に、自己を滅却したあの太陽のように、善人にも、悪人にも平等に、熱・光のエネルギーを無限に供給してやまない行為に通じます。

慈悲の心は、即ち、太陽の行為であります。

次に愛とは、慈悲と同様に、神仏の光です。慈悲を宇宙の心とすれば、愛は調和を目的とした地上の光です。

愛の根本は、慈悲にあります。その働きは、他を生かす、助け合う、そうして許してもあるのです。

人間はいうなれば罪の子です。罪の子が罪をいつまでも背負っていては救われません。罪にたいする贖いが必要です。すなわち、人はさんげし、心を入れかえることによって、神は、その罪を許してくれるのです。反省の行為です。

愛の働きは、それ故に許しであり、神の光です。

人々の罪を許し、人々をして、生きる喜び、たがいに手を取りあい、助けあって、調和へと、高めてゆく地上の光です。

こう見てきますと、慈悲を神仏の縦の光とすれば、愛は横の光、であるといえます。

縦と横の光が結び合った時、人は神を発見し、仏性である己を悟ることができるのであります。物質世界もこれと同様に、核を中心に、陰外電子がそのまわりを回り、物質そのものの生命活動をつづけています。

これは、この地球も、大宇宙も、神の体であり、心を中心として出来上がっているからにほかなりません。この大宇宙は、慈悲と愛によつて調和され、維持されているということです。

仏教の言葉に色心不二というのがあります。色とは物質、心は精神で、この二つは別々のものではなく、一つだということです。この意味は、物質は、核と陰外電子という生命体から成り立ち、その生命体そのものは、エネルギーの供給によつて維持されていますので、無限のエネルギーを供給する宇宙の意識、心、精神とは、不離一体である、一つである、ということです。無限のエネルギーの供給は、それはそのまま慈悲の姿であり、愛の行為であります。

また、空即是色という般若心経の重要な一節があります。この意味は、空とはあの世、実在界を意味し、色とはこの世を指しているのです。色のこの世は、あの世である空の世界があつてはじめて成立し、この世は、この世だけの独立によつて成り立っているのではないのであります。ということ、この現象界は、あの世である実在界から映し出された世界であり、本来、別々なものではないのであります。空は即ち是れ色なのです。

色心不二といひ、色即是空、空即是色に ついても、ともに、心、精神、慈悲と愛について語つて
いるのであります。

この大意識こそ 大宇宙大神靈 仏なるべし
神仏なるが故に 当体は 大神体なり

大宇宙を調和ならしめてゐるものは何か。それは、宇宙の大意識であり、エネルギーの支配者で
あります。

太陽の存在、その周囲を秩序整然と運行してゐる惑星群の調和。地球は地球の軌道を、火星は火
星の軌道から離れることは決してありません。太陽系それ自身は一秒間に十九キロメートルの速さ
でヘラクレス座の方向に運動を続け、いつときといえども、ある一定の空間に定着することはない
のであります。

しかし、それにもかかわらず、太陽と九つの惑星の位置は寸分のちがひもなく、一定の距離を保
ちつつ、自転・公転しています。地球が火星の軌道内に、火星が地球の軌道内に来るといふことは
ありません。

地球は太陽のまわりを三百六十五日と四分の一日で一週し、そうして、かわりない周期をつづけ、

地球自体の転生を輪廻しています。転生輪廻の姿は、生あるものの運動であり、この運動が停止するとき、生命の存在を失うときであります。

この大宇宙、太陽、地球、人間、すべてが、転生を輪廻し、生命の活動をなし続けています。人間が呼吸し、空気を吸ったり、はいたりすることによつて生命が維持されているのも、決して休むことのない生命活動、転生輪廻の法があるからであります。

転生輪廻というものは、この世、あの世の移りかわりだけでなく、現実の人間、四季の移りかわり、太陽系それ自体の運動の中にも、厳然と存在しています。

こうした秩序ある法則が、大宇宙の姿から素粒子に至るまで、一貫してつらぬかれている事実。しかも、そうした運動が、寸分の誤差も、休みもなく続けられているという事実。そこには、大宇宙を支配するエネルギー、大神靈、仏の存在から目をそらすわけにはゆかないのであります。

しかも、そうした一貫した法、エネルギーの充滿した宇宙それ自体こそは、神の体であり、仏の胸中にあるといえるのであります。

この現象界における太陽系は 大宇宙体の 小さな諸器官の一つにすぎず 地球は
小さな細胞体なることを知るべし 当体の細胞なるがゆえに 細胞に意識あり かくの如く 万

物すべて生命にして エネルギーの塊りなることを悟るべし

我々の住む太陽系は、大宇宙からみると顕微鏡でも分らないような極微の一点にしかすぎません。私たちの住む地球を含めた太陽系に属する銀河系には、約一千億個の恒星、五億個の惑星が存在します。地球は、この五億個の一個にすぎません。

銀河系を島宇宙として、そうして、こうした星々をひきつれた島宇宙、星雲群は、これまた約一千億個のぼり、いわゆる大宇宙を構成しています。したがって、大宇宙から見た地球というものが、いかに小さく、小さな細胞体にすぎないかということが分かります。

人体の細胞は約六〇兆あります。それぞれ、生命を持っています。それは原子の構造と同じであります。ところで、人間は、人体である細胞と、それを動かしているところの、エネルギー、意識、心を持つており、それは大宇宙の構成と、まったく同様につくられています。

ただし、大宇宙が、法則のままに動いているのにたいして、人間は、その大宇宙を、地上を、よりよく調和させるために、神仏と同様、その意思と自由とが与えられて、ものを創り出す創造性をも付与されています。

そのために、神仏の心となつて地上での生活を送るならば、地上の調和はもちろんのこと、意思

と創造と自由の展開は、無限のひろがりをもち、人間としての喜び、そうして、仏教でいう法悦の境地を享受することができるのであります。

けれども、その反対の場合はどうかといえば、地球に昼と夜があるように、暗黒の世界が待ちうけ、災害、事故、あるいは天変地異といった人知に及ばぬ天災に見舞われることになります。これはどうしてかといいますと、人間の在るところ、その環境一切は、人間の意思にまかされているからです。

悪の意味が働けば、悪の結果が、善の行為に対しては善がかえつて来ます。

大宇宙は法則によつて働いており、地上の人間界も、このワク外には決しておかれてはいないの
であります。

したがつて、人間の意思とその自由性は、大宇宙の法を、たくみに運用し、よりよき調和を具現してゆくようにつくられています。

このために、調和を離れた悪の意思と行為があれば、自分自身の体の不調和をきたし、その不調和が集団的となれば、人間の住む環境は、人間の意思にまかされていますから物質世界にも不調和をきたし、災害を呼びこむことになるのであります。

人間の想念には、ものを生み、創り出す能力があるからです。神は、その偉大な意思と能力で天

と地を創造したように、神の子である人間にも、その意思と創造と行動の自由性が付与されているからであります。

間違えてはいけません。私たち人間は、大自然のおきてである転生輪廻という循環の法を、正しく生かすことによつてのみ、喜びと自由という心の解放があるのであります。想念にも循環の法が厳として存在し、悪には悪、善には善がかえつてくることを決して忘れてはなりません。

大宇宙からみた地球は小さな細胞にしかすぎません。しかもその細胞自体も、小宇宙を形成し、そこに生命という意識が働いているのであります。

一グラムの物質をエネルギーに変えると、一馬力（七四六ワット）のモーターを約三千八百年間回すことが出来ます。太陽エネルギーで地球をつくるとすれば、三十三万三千個できます。

このように、細胞、物質にも生命が宿っており、私たちは人間は、そうしたエネルギーという生命の大海のなかで呼吸していることを知らなくてはなりません。

同時に、人間自体もそうしたエネルギーによつて生かされていることを認識していただきたいと思ひます。

大宇宙体は 大神体なるがゆえに この現象界の地球も神体なり 神体なるがゆえに

大神殿なるべし

今から二千五百余年前、釈迦牟尼仏はインドのクシナガラというところで、その生涯を終えました。イエス・キリストは二千年ほど前に、イスラエルに生まれ、愛を説きました。釈迦の時代、イエスの生存当時に、はたして現代の仏陀や教会というものが存在していたでしょうか。

これを歴史的にみると、その後の人たちが、釈迦やイエス・キリストの精神、心をくみとろうとしてつくったのが、はじまりのようです。

しかし、現代のように、物質科学が発達し、極微の世界、極大の宇宙に、人間の科学する心が向けられてきますと、こうした教会や仏陀は、いかにもおざなりの、観光や結婚式場に使われるしか用をなさないというのが現状のようであります。

ただいい得ることは、こうした教会や仏陀は、人間であるかぎり、心のふるさととしての効用は、たしかにあるようであります。結婚式という人生の出発を、こうした場所ですようとするのも、その現われかもしれません。

また、うまく物事が運んでいる時は、さほど感じませんが、商売不振、後輩に先を越される、家

庭不和、病氣、イライラなどに見舞われますと、お寺や教会にいつて、精神的安息を求めたくありません。いなれば、なにかにすがりたい、助けを求めたくなるようです。人によつては、座禅でも組んで、という気持ちにもなつてきます。そうして、出来得るならば、悟りを開いて、物事のケジメや仕組みを、この目で、この体で知りたいたいと願う人も出てきました。

釈迦は、妻子を捨て、王子の座を投げ出し出家しましたが、この時代は、戦争と貧民、支配者と被支配者、武力と国家、邪宗の横行など、およそ、人倫の道は地に落ち、支配者以外は動物以下の扱いをうけた時代で、今日とは、その背景がまるでちがつていました。

悟りを開いた後において、釈迦は、在家仏教を大いに徳施し、いたずらに、現実逃避のための出家をいませました。

人間の目的は、現実社会の調和にあります。生活の中に、悟りがあります。釈迦は、その道を、多くの人々に教えるために、あえて、出家しました。人類救済のためだったので。

イエスにしてもそうです。大工の家に生まれ、はじめは大工をしながら愛を説きました。しかしやがて、悪魔から人々を救うために、伝道一筋に、その生涯を投げ出し、聖書にみられるような、数多くの奇跡を残し、世を去つたのです。

こうみてきますと、仏閣とか教会の存在意義というものは、今日では、あまり通用を感じません。

通用があるとするなら、それは多くの場合、現実からの逃避の場としかいいようがありません。なぜなら、釈迦もイエスも、こうした殿堂や伽藍をつくらなかつたばかりか、人間の心、物事のケジメ、仕組みを知るには、太陽が東から西に没する、四季の変化、水の性質、人間社会の様々な経験のなかから、十分くみとることができるとしているからにはほかありません。

いたずらに、殿堂に莫大な金をかけ、威厳を誇らなくとも、人間それ自身の心の尊厳をこそ知るべきでありましょう。またそうした金があるなら、困った人にわかち与えるべきでしょう。

自然は、常に正しく運行し、宇宙も、極微の世界も、一つとして、神仏の経緯から外れたものはありません。それはもともと大宇宙体は大神体であり、地球は大神殿にはかならないからです。

日蓮の書いた南無妙法蓮華経という曼陀羅をもつて、これを神仏とする人がいますが、これもとんでもない間違いです。

なぜなら、曼陀羅そのものは単なるペーパーにしかすぎません。

鯛の頭も信心からといいますが、信心信仰とはそんなものではありません。なにかにすがると象を求め、これらは人間の弱さ、人間の心が、その“としか見えぬ”宇宙全体をつらぬく永遠の生命、光と陰とを超越した魂の悠久性を忘れるためにおこるものであります。

この大地は神の神殿であり、我が心も、神仏を宿す大神殿であるからであります。

大神殿は 万生 魂の修行所なり

諸々の諸靈 皆ここに集まれり

ここで少しばかり、動物と植物の関係について触れてみましょう。

動物の種類は、昆虫を含めて、その数は何千何万にのぼり、多種多様です。未発見の動物(昆虫を含め)は地球の片隅にまだまだ沢山存在しています。

彼らは、その与えられた環境にたいして、精一ぱい生きています。バクテリアは土中や空中の養分を食べて生きており、そのバクテリアを食べている虫があります。その虫を食べている昆虫、またその昆虫を食べるより大きな動物……。

大きい動物は小さい動物を、強いものは弱いものを食べながら生きているのが彼らの世界です。動物の世界を外からながめると、そこには、血も涙もない弱肉強食の世界があらわにうつり、ものあわれ、生物の宿命を感じます。自然にたいして、いきどおりさえおぼえるでしよう。

ところが、こうした動物たちの生態そのものは、実は、自然の摂理にしたがつて生かされており、そこには矛盾も撞着もないのであります。

百獣の王といわれるライオンは文字通り、向かうところ敵なし、つまりライオンを倒す相手がい

ないので王といわれています。

倒す相手がいなければ地上はライオンで埋まるはずであります。ところが、ライオンの数は一向にふえません。アメリカライオンについてアメリカのある学者が、長年にわたつて調査した結果でも驚くべき事実として、一部に紹介されています。

つまり彼らライオン達の数は、食べ物(他の動物)に比例して、けつして殖えないということですから。これを逆にいえば、ライオンに食べられる動物たちの数も一向に減らないという事実をも裏書きしているのであります。

仮に、ライオンに食べられる動物たちが百頭いたとします。すると、これを食べるライオンの数は、ライオンの生存を助ける数しか生かされてはいないということなのです。

アメリカの学者は、アメリカライオンについて、自然の驚威である事実だけを述べ、それ以上のことは何一つ説明していませんが、こうした姿というものは、実は、自然が彼らを監視し、彼らをコントロールしているからに外なりません。

すなわち、ライオンの数がふえない理由は、ライオンの子が成長するまでに他の動物に食べられたり、死んだりして、その増殖率は、草食動物の比ではないのです。

こうみてきますと、何者にも襲われない成長したライオンはまさに王者であり、優雅であり、特

権階級のレッテルを貼つてもいいように思われますが、自然は、けつして不公平に扱つてはいません。彼らには飢えという苦しみが与えられています。彼らは獲物をとるのに大変な苦勞をします。時には何十日も飢えとの戦いを強いられます。そうして、ヘトヘトになって、やっと獲物にありつくというのが彼らの宿命です。彼らの一生は、飢えとの戦いにあるといつてもいいでしょう。これはなにもライオンにかぎらず、肉食動物のなかば宿命でもあります。

もつともケニヤのライオンは獲物に困ることがないほど、草食動物に恵まれています。しかしやたらと草食動物を食い荒らすことはないのです。年老いた動物か、病気で弱っているものしか狙いません。いわば自然淘汰の動物しか相手にしません。

動物によつては共食いによつて、飢えからのがれようとなります。また共食いによつて、彼らの全体の生存を維持しています。

このように、彼らはけつして特権階級でもなければ、優雅でもありません。一方、草食動物はどうかといえますと、この方は草木はふんだんに与えられていますから飢えに困るということはありません。したがつて、放つておきますと、彼らの種族はどんどん殖えていきます。

これを放つておくと、こんどは草木が枯れてしまいます。草木が枯れば、彼らの生存は覚束なくなつてきます。そこで、草食動物と草木との調整役を果たしているのが、ライオンをはじめとし

た肉食動物といつてもいいのであります。

草木は、群生する草食動物の排泄物がその肥料となり、草木自体の生存を可能にしております。ひ近な例としては、花と蜜蜂や蝶の關係であります。蜜蜂や蝶は、花にある蜜を求め、花は、蜜蜂や蝶の花粉を得て、花をより美しく咲かせます。

このように、動物と草木の關係というものは、たがいに相補いながら、自然の環境を保持しているのであります。けつして、それぞれが独立して、好き勝手な行動をとっているではありません。いうなれば彼らは、全体の生存を可能にするためにそれぞれの立場で生かされ、自分の身を提供しているのであります。それは、弱肉強食というような凄惨なものではありません。表面的には強者が弱者を食べるといふ形をみせてはいませんが、その凶の奥の背景というものは、全体を生かすといふ全体への調和であり、各種族が身を投げ出すことによつて各種族が保存されるということを知ることがあります。

ここで、私たちがもつとも注意しなければならないことは、彼らは絶対に、無益な殺生はしていません。ということですが、誰にも襲われることを知らないライオンでも、一度獲物を得、満腹になれば、けつして、それ以上の獲物を獲ることはないということです。目の前を獲物を通つても、これを襲うことはしません。

これが彼らに与えられた自然の摂理です。

もしも彼らが、面白半分、弱者をやたらと殺すようなことをすれば、やがては彼ら自身の生存を危くするからです。彼らは、必要なものしかとりません。飢えがいやされれば、彼らはそこで満足します。足ることを知っています。知っているというよりも、天が与えた彼らの本能です。

自然が彼らをコントロールしているとはこのことです。動物や植物のこの世の使命というのは、石油や石炭にもみられるように、この地上界の進歩と調和のいしずえになるためのものであり、人間が、この地上に降り、この世の仏国土を形成するための先駆者でもあつたわけです。

彼らはそうすることによって、彼ら自身の魂の進化がうながされ、やがて彼らは、誰からも犯されない魂に成長してゆくのです。一寸の虫にも五分の魂が敵として存在し、彼らは、その与えられた環境のなかで、精一ぱい生き、成長し続けているのです。

私どもは、この自然界の姿というものを正しく見なければなりません。表面に現われた姿だけをとらえて、これを社会に、人生観に当てはめてはなりません。そこには不調和しかありません。昔はよくイナゴや蟻の異常発生をみ、耕作物や人間に大被害を与えたようです。

こうした異常な状態というものは必ずといってよいほど、人間社会の不調和が原因です。境界をひいて領地争いに明け暮れる。血で血を洗うような無益な戦いに、その尊い生命を捨てる。

こんなとき、こうした昆虫の大発生をみて、作物を食い荒らし、人間同士のみにくい争いに終止符をうとうとします。食べ物がなくなれば戦いたくとも戦えません。荒廃した耕地に人々は精を出さなければならぬからです。

人間と大自然は一体です。しかも人間はその自然をより良く調和させ、生きていくものです。動・植物は生かされているもの。人間は生かされていると同時に生きていくものであるとすれば、人間同士で自然を損う争いをすれば、生かされているものの、動・植物の生態にも異常が起こるのは当然ではありませんか。

私たちは、動植物界の生態、実相というものを正しく認識し、私たち自身の魂の向上をめざさなければなりません。

諸靈の輪廻は三世の流転　この現象界で己の魂を磨き　神意に添った仏国土　ユートピアを建設せんがためなり　更に宇宙体万生が　神意にかなう　調和のとれた世界を建設せんがため　己の魂を修行せることを悟るべし　過去世　現世　来世の三世は生命流転の過程にして　永久に不變なることを知るべし

人間をはじめとして、動・植・鉱の生命は過去、現在、未来にわたって、輪廻しています。

輪廻とは、この世に生をうければ、やがてあの世に帰る。そしてあの世に帰った霊（生命）は、再び、この世に生まれ変わる。こうしたくりかえしを続けているということなのです。

転生輪廻については、すでに述べたので略しますが、こうした輪廻の過程を通して二つの目的――、その一つは、己自身の魂の調和、もう一つは、地上の樂園（仏国土、ユートピア）をつくるためであります。

今から二億年前のこの地上は、恐竜などの動物がいて、荒れていました。そこで地上に降り立った人類（約六千万人）は、荒廃している地上を、人間の住む理想郷にするため、ユートピア建設に乗り出したのです。

やがて地上は、その目的が達せられ、世界各地に、現代以上の文明が栄えました。

科学は、専ら、磁気、磁力を利用し、人間は、自由に空を飛び、地中にも、都市をつくりました。言葉は、現代のように、さまざまなものはなく、統一され、生活様式は、自由のなかに、キチンと統制が保たれ、それぞれの分野で、それぞれの能力を、思いのままに伸ばしていました。争いも、そねみもなく、人々は、その生活を楽しみました。

この時代になると、恐竜は地上から姿を消し、小動物が住むようになりました。人間の友である犬や猫、あるいは魚類、貝類、両生類もいました。むろん、爬虫類であるヘビもいました。

人間に危害を加える動物は、このヘビを除いてはほとんどいませんでした。ヘビは獠猛であり、当時のヘビは、大きいのになりますと、直径十五センチから二十センチ、長さは数十メートルにも及ぶものもいました。ヘビの歴史は、約五億年になります。人類より古く、恐竜よりも古いのです。その生命力と狡猾さは、他の動物とは比較になりません。暗いジメジメした所を好み、音もなく近より、獲物を襲います。人類は、このヘビには随分悩まされました。

神はヘビを創り、人類に警告を与えていたのです。

人間が偽我におぼれ業想念にとらわれ、五官六根にふりまわされると、やがて己自身がヘビのようになると……。

当時の人類は、あの世を知り、この世の目的を知っていましたから、ヘビの存在理由を熟知しており、たがいに、いましめ合い、仏国土の建設に、いそしんだのであります。

けれども、子孫が子孫を生み、地上の生活になれた人類は、あの世を忘れるようになり、自己保存の想念のとりこになっていったのです。

こうなりますと、平和な地上は、争いの巷と化してゆきます。

戦争と略奪、支配者と被支配者が生まれ、腕力の強いものが号令をかけるようになりました。地上はこうして荒れてゆきました。磁気、磁力を利用した科学は、天災という災害で破壊され、

これを生み出す人間本来の素養も失うことになり、人間は、空を飛ぶことも、地中に都市をつくることも出来なくなりました。

疫病、飢饉、災害が相次いで起こり、地上はこの世の地獄と化していったのです。

ノアの方舟現象は、その後の人類にたいして、何回となく繰り返され、人々は土中に海中に消えていったのです。

今日、東洋と西洋に分かれ、さまざまな言葉が生まれ、文化に断層が生じたのも、ムー大陸（太平洋）の陥没、アトランティス大陸（大西洋）がその姿を失ったために起きたもので、この両大陸があつた当時は、アジアとアメリカ大陸は陸続きであり、文明、文化に大きな格差が生ずることはありませんでした。

両大陸が海底の藻屑となつたのも、もとはとていへば、人びとの飽くなき欲望と、ヘビの癡猛さ、狡猾さに人の心が支配されたため、光の天使（神仏の使者）を死刑にしたことが大きな原因になつておられます。

この世は、調和されるように出来ており、人間の肉体も精神も、神の姿（調和）と同じようにつくられていますから、その反対の行為があれば、それに比例する責を負わなければならないのです。時かぬ種は生えぬ、時いた種は刈り取る、これが神の摂理だからです。

さらに重要なことは、神仏の使者にたいして危害を加えた場合は、その何倍かの償いをうけるといふことです。

人を呪えば、六二つ——。

人間の想い、念力というものは、全世界に波紋となつてひろがり、それに類する人びとを傷つけると同時に、その念波はやがて自分に返つてきます。

地球が丸いように、念波も円を描きながら、発信者に返つてくるのです。これは法則であります。自分に返つてきたときは、人々の苦しみの想いをつけていますから、一の念波は、数倍の念波に変わつていきます。

このため、六二つとは、身が二つあつても、なお足りないといふことです。呪いには、怒りやそねみもあります。呪いの念波は、まことに恐ろしいものです。

いわんや、神仏の使者を傷つけ、殺した場合は、地球という大神殿そのものを汚し、破壊するのですから、破壊行為に加担した者は、すべて、天罰をうけることになります。

天罰とは、天に向かつてツバするのと同様に、自らが求め、自らが得た結果であります。

現代は、物質文明の世であります。人はあの世を忘れ、一寸先が闇であります。五里霧中で、目的も分からぬマラソン競争に精を出しているのが現代人です。この世に誕生すると同時に、あの世

の記憶を忘れるようになってしまったのです。

即ち、二億年前の人類は、この世の仏国土だけが、その目的であったのですが、現代人は、その前に、まず、己自身の修行が目的となったのです。

あの世の記憶を忘れ、五里霧中の環境の中で、己自身の魂をみがくことが先決となったのです。己の魂を磨くためには、あの世の実相なり、地上の目的を知っている、修行の意義がなけば失われてしまいます。むごいようですが、それほど人類は、仏教というカルマ（業—自己保存、執着の想い）キリスト教という原罪を背負ってしまいました。

そうして、そのカルマを浄化し、しかる後に、仏国土の建設に向かうのです。二億年前の地上の楽園をつくるために。

一人一人が生命の流転を知り、人間が小宇宙であり、動・植・鉱物をして、地上の調和に役立つようにするには、まず各人が、神仏の子であることを悟り、理解することが先決であります。

ここでちよつと、進化論について触れておきましょう。

ソ連のある学者は、人間はアミーバから出来たもので、もともと最初から、人間の形をした人間が、この地上に存在していたのではないと、いい切っています。

そうかと思うと、人間の祖先は猿である。北京原人、南方諸島で発掘された古代人をみると、人

問の進化の過程が想像されるときえいつています。

アミーバ説についていいますと、ではアミーバそのものはどうしてつくられたかという疑問があります。アミーバをつくるにはアミーバの元がなければなりません。また、水素やヘリウムなど、百種余りの元素についても同じです。では何故に、元素は存在するののかという点になると、今日の科学では説明できません。説明できないのに、できるといい切つては、もはや科学する心は存在しません。

今日の自然科学は、一つの壁にぶつかっています。その壁とは物質のモトである原子、素粒子についての状態は説明できても、その状態を生み出しているところのエネルギーそのものが分からなからずです。

心ある科学者は、そのエネルギーについて、それは神仏の力であるといっています。

その通りで、エネルギーこそ、神仏そのものなのです。原子を動かしているものは、光子です。光子を光子たらしめているものは、霊子というものです。

今日の科学・機械では、光子は発見できても霊子を発見することはできません。霊子の発見は、なお百年以上を要しましょう。

しかしあえて申しましょう。霊子こそ、神仏であり、エネルギーそのものであります。

こういうと、なんだお前は——、お前こそ科学者の風上にもおけぬといわれる方があるかも知れません。しかし、私は、今日の科学・機械をもって説明できなくとも、現象的に、それを実証していけば、十分納得されるものと確信しております。

私自身は、靈子の存在について、ハッキリと認識しています。この認識を今日の地上の科学・機械で客観的に証明してゆきたいわけですが、残念ながら、全人類が理解し得る高度の科学・機械は、なお百年余り経たなければ開発が不可能でしょう。

そこで私は現実的に形の上に現わして、靈子の存在とその証明を行なうていきたいと考えております。次に、北京原人や古代人について、考えてみましょう。

もしも、人間が猿の進化物とするなら、進化途上の類人猿がいても不思議ではありません。しかし類人猿は、現在おりません。北京原人や、南方諸島の古代人の頭蓋骨の大部分は人間とは異なる類人猿であります。猿です。

人間の頭蓋骨、骨格は、今も昔もそうは変わりません。百万年前も、今も大差ありません。大差ないという証明は、現在、この地上に生きている人類そのものが、証明済みでしょう。また、もし進化論で片づけられるなら、現実に、猿から人間にかわる過程の人間がいても、少しもおかしくないと思えます。

多くの学者は、文明文化の進化の過程をとらえて、人類にも進化の過程があると見ているようです。考えようによつては、そう見えてもいたしかたありません。

では、今から四千年前のインカの文明、エジプトの文化をどう説明するかです。

インカの場合、ネコ科の動物のモチーフとした像や、力強い土器、金、銀、銅などの装身具、雄大な石造神殿、大規模なかんがい工事や、ひな壇畑の造成、これらの技術、経済の発展は地方的とはいえず、現代でも十分通用し得るものです。現代でも、そのナゾが解けぬという千三百メートルにわたるサクサワマンの防壁。接着剤を使わずに、巨大な石を組み合わせた石積みは、今日なお、びくともしません。石と石の接着部分は、あの薄いカミソリの刃さえも入らないほど密着し、何千年を経た今日でも、ピクともしないといふのですから、当時の技術が、いかに進歩していたかが分かります。エジプト文化にしても、そうです。とりわけ絵画については、日常生活のあらゆる情景が生きて描かれ、数千年のへだたりを忘れさせる新鮮な魅力に満ちあふれています。

当時のエジプト人は、精神的に、現代人よりすぐれていました。まず、人間には来世があり、そして、再び、現世に舞い戻ってくることを知っていました。このため、あの広大なピラミッドは、人間が死して、現世に舞い戻ったときに、エジプト文化を、より栄えさせるために必要な、財宝、資料を保存させるために、つくつたものです。

今から四千年以上も経つ、ギゼーのクフ王のピラミッドは、底辺の一辺が二百三十三メートル、高さ百四十五・六メートルもあります。石灰石の重さは平均二・五トン。個数にして二百三十万個に及びます。二・五トンもある切り石を百メートルを越す高さに運びあげた方法は、今でも不明であるといわれるぐらい、当時の技術は、進歩していました。

クフ王のピラミッドは一説では二十年といわれていますが、実は三十五年を要しています。石灰石は、主として、地中海沿岸、それもヨーロッパ大陸側から舟で運んだものもかなりあります。

それほど、当時の海洋技術も発達してましたし、建築、土木、絵画、彫刻にしても、インカ文化とならんで進んでいました。

こうみてきますと、人類の歴史は、古い、新しいだけでは律しきれないものがあるわけです。いわんや、現代人の生活をみて、過去の人類は猿とか、アミーバだったという進化論は、当を得ていないし、科学者のとるべき態度でないことだけはハッキリすると思います。

「過去世、現世、来世の三世は生命流転の過程にして、永久に不変なることを知るべし。」
心行はこういつています。この説明は次の項でなお詳しく述べる予定ですが、人間をはじめ、動物にしる、植物にしる、生命を持ったものは、すべて三世の流転、すなわち、転生を輪廻してゆく

ものです。

太陽の周囲を地球が円運動を描くのも、人間がこの世を終えればあの世の生活が待っているのも、ともに生命の流れ、運動というものが一刻の停止もなく活動しているからにほかなりません。停止は死を意味しますが、死は生命体には与えられておりません。宇宙が永遠の活動をやめないように、人間の生命エネルギーもやむことを知らないのです。これは動物、植物にしても同じことです。ただ人間とちがうことは、彼らは選択の自由、創造の自由が与えられていないだけに、人間ほど苦樂を感じません。それだけに進歩も遅くなります。

過去世は己が修行せし前世 即ち過ぎ去りし実在界と現象界の世界なり 現世は 生命・物質不二の現象界 この世界のことなり 熱・光・環境一切を含めて エネルギーの塊りにして 我ら生命意識の修行所なり 神仏より与えられし慈悲と愛の環境なることを感謝すべし

過去世とは文字通り、かつて地球上で生活した各人の前世であり、また、今世に生をうける前に、生活してきた実在界、あの世をいうのであります。

実在界というところは、ものが実際にある世界、実在する世界です。

現象界、つまりこの世は、ものが現実にあるように見えるが、ある時期が経つと、大気に還元し

たり、土に化したりして、変化してしまいます。人間は死にますと、三合の灰になります。このように、この現象界は、変化きわまりないところです。

ところが実在界は、永遠不滅です。何百年、何千年経つても、ものは変化せずに、存在します。それ故に、実在界というのです。

ここでことわっておきますが、ものが変化せずに存在するという意味は、揚子江の河が何千年という間、その流れが変わらないように、富士山が何百年も同じ姿で腰をすえているように、変化しないということです。

変化しないということは、実在界と現象界の時間の単位が大変にちがうということでもありません。かつて地上に生存した恐竜は、あの世、実在界で今でも生きています。地上に今もって発明発見されない科学の分野についても、あの世では発明発見され、地上の科学など問題にはなりません。したがって、この世にないもの、この世にかつてあったもの、それらはすべて、あの世には存在しています。

この点が、実在界と現象界の大きなちがいです。

人間は、この実在界と、現象界を、いつたりきたりして生活しています。

どうして、両者の間をいつたり、きたりして生活しているか、といえますと、一つは魂の進化で

あり、もう一つは、神の意思を具現することにあります。

この二つの目的を果たすために、現象界に出てきて実在界で学んだことのおきらいをします。いかなれば、この世は試験場です。試験に合格すれば、あの世に帰ったとき、帰る前の位置よりも上段階にゆけます。もしも不合格に終われば、この世に出てくる位置にもどり、もう一度現象界でやり直しをします。

こうした繰り返しを続けることによって、人間の魂は向上してゆくのです。

人間は神仏の子ですから、魂の向上の過程は至上命令です。のがれるわけにはゆきません。

その証拠に、人間は誰しも、己の幸福を追求してやみません。フーテン族といわれる怠け者でも、怠けることによつて、自分の幸福を発見しようとしています。もし彼らに惰眠は罪悪であり、人間としての神性を汚すということが分かれば、怠ける事の幸福よりも、働くことに、生き甲斐と意欲を燃やすことでしょう。

ドロボウにも三分の理というように、人間には、その行為の善悪は別として、己の幸福を追求してやまない衝動があります。

また、こうした衝動があるからこそ、人間には夢が生じ、行為が生まれてくるのです。

では、その衝動とは、いつたい、なにか……。

これこそ人間の魂の歴史が培った意識、意識に内在する各人の、神性にほかなりません。……そうして、そうした神性、仏性というものは、五官や六根から離れば、宇宙大に、ひろがるだろうし、反対の場合は、悪に転落し、もう一度、出直さなければならぬことになります。

こういうことですから、私たちは、まず、人間としての、目的を知つてそれに向かつて努力することが大切なのであります。

現世は 生命・物質不二の現象界 二の世界のことなり……

実在界は、いわば心の世界、現象界は心と物質の世界。心の世界とは、各人の光子量によつてつくれた世界であり、光子量が異なれば、より上段階へと望んでもそこへは行けないという世界です。たとえば、地獄の想念を持った魂の者が花園に囲まれた天国にいきたいと願つても、そこへは行けません。天国行きのパスポートを得るには、そのパスポートを与えられるだけの光子量を貯えなければならぬのです。

実在界とは、それほどきびしい世界ですが、この世界は、実は各人が心に描いた世界であり、地上界にいた時に心に描いたことがないのでそこへ行きたいとしても行けるわけではないでしょう。

ところが現象界はどうかといえ、光子量に比例した環境を、それぞれの家庭なり、一社会にお

いて、実在界と同じように作っています。己が望めば、そうした家庭なり社会を見聞することができます。

金さえ出せば、浅草山谷の住人でも帝国ホテルに泊まることができるように、精神的安らぎを求めたいと思えば、光の天使の話も聞くことができます。

いふなればこの地上界は、天国も地獄もいっしょくたになつて同居しています。それだけに、天国も地獄も思ひのままです。ビブテキも、寿しも、天ぶ羅もお好み次第であり、欲するものを口にすることができません。

現世というところは、そのように、己の見聞を広め、魂の向上をはかる上において、またとない場所なのです。

あの世では、こういふわけにはゆきません。また実際に、魂があつた世に他界するとその人が現世でもっとも強く思ひ行なつた世界にゆきますから、あれもこれも、よりどりみどりとといったようなわけにはいきません。

もちろん、魂が上段階に進めば、とらわれが少ないですから、欲するものは、必要とあればいくらでも手にすることが出来ますが、下段階ではそうはいきません。この地上において、あれもこれも欲しいが金がないから買えないというのと多少似ています。

ともかく、この地上界は、天と地の間の世界とみていいのです。

善もあれば悪もあるという人間の魂修行にとって、あらゆるものが備えられ、欲するものは大抵叶えられるというのが現象界です。

普通は分不相応に高い望みをいだいたり、反対にタナボタを夢みるために、ままならぬ浮世と比べく人が多いのでありますが、実在界と比べれば地上界ほど魂修行に条件のそろったところはないのであります。

地上界は、それ故に神仏より与えられし慈悲と愛の環境であり、肉体人間として修行できる幸せを感謝しなければなりません。

この地上界では、Aという人にはより魂を向上するための修行の場であり、Bという人には、前世でやり残した修行の場となり、それぞれ修行します。

ところが、大抵の場合は、同じ場所で円運動を描く者が多いのです。すなわちBのような人達です。Aのような円運動は向上発展を意味する人びとです。その数は極めて少ないのであります。

魂の向上とは、心のやすらぎであり、客観的には、とらわれの少ない精神状態であります。心の安らぎが深まれば深まるほど、この地上は調和されてくるのであります。

来世は次元の異なる世界にして 現象界の肉体を去りし諸霊の世界なり 意識の調和度により
段階あり この段階は 神仏の心と己の心の調和度による光の量の区域なり 神仏と表裏一体の
諸霊は 光明に満ち 実在の世界にあつて 諸々の諸霊を善導する光の天使なり 光の天使
なわち諸如来諸菩薩のことなり

人間の肉体は、原子細胞からできています。同時に光子体というものがあり、更に、その光子体
を維持する霊子体から成り立っています。すなわち、原子体(肉体)、光子体(意識の殻)、霊子体(意
識の中心である心)の三体から、人間の体は構成されています。現世では原子細胞肉体と、光子体
とは一体になっています。立体的には、人間の五体は、原子と光子が重なり合つて出来ていますが、
霊子は、次元の異なる世界で、霊子線という糸を通して、人間の五体に生命を与えています。

さて、次元の異なる世界は、肉体という衣を脱ぎ去つたあの世を指していますから、原子細胞は
なく、光子と霊子だけの世界ということになります。

あの世は別名を意識界といひます。意識界は、光子界でもありますから、人間は肉体的死を遂げ
ますと、光子体という一種のガス体(この世からみると……)で、あの世で生活します。

また、人間の意識は、地上では表面意識が一〇、潜在意識が九〇、合計一〇〇%で構成され、意

識の働きは多くて通常一〇％しか出ていませんから、心を知ること、反省することが、ひじょうにむずかしいということもあります。

ところが、あの世は、その意識の量が九〇％表面に出てきます。残りの一〇％が潜在し、潜在意識は、地上生活より、グンと少なくなりますから、天国での生活は、文字通り、喜びに満ちたものとなります。反省の度合いが早く、悪い想念に自分の意識を汚すことがないからです。

しかし、地獄に落ちますと、意識界は、光子という波動の細かい世界で成り立っていますから、悪い想念は、すぐさま、己にハネ返ってきて、反省するいとまも与えられず、何百年もおなじところに、あえぐこととなります。

地上での生活で、Aという人が自我我欲のみで一生を終えたとします。

すると、この人はまちがいなく、地獄に落ちます。

これはどうしてかといいますと、人間の生命意識というものは、この世も、あの世も、連続したつながりを持っており、したがって、Aという人が、地上での生活で、自我我欲のみにふければ、その意識を持ったままあの世で生活することになるからです。

では、なぜ自我我欲は地獄なのでしょう。人間の生命意識は、宇宙の生命意識と相通しており、人間と宇宙は、個々バラバラには存在していないからです。人間と宇宙は、一つであり、宇宙を離

れて人間はなく、人間は宇宙の意識に通じてのみ、人間それ自身を生かし得ることができからであります。

自我我欲は、こうした、全なる宇宙の意識から離れると同時に、自ら孤立を求め、己自身の自由な心を、自分で限定するところにあります。

宇宙は光子からできています。人間の意識も光子です。人間の意識が肉体を離れると、光子体という体となり、その光子体は、肉体の原子細胞が死ぬと、大気や、大地に還元されてゆくのと同時に、宇宙に充滿する光子群の中に同化してゆくのです。

ところが、自我我欲の意識(想念)は、本来あるべき全なる意識を曇らせることとなります。それは丁度、満月に雲がかかると同じです。本来月そのものは、美しく、太陽の陽を浴びて、地上を照らしています。人間の意識、光子体もそれと同じで、常に満月の光芒を放っています。しかし自我我欲という地上の想念が強いと、その満月の美しさ、さわやかな光を、地上に送ることができず、業想念という雲にさえぎられることとなります。地上は、月の光がとどかなくなり、暗闇となります。

また、人間の意識を電球と考えて下さい。その電球が新しいうちは、六十ワットの光子量があるものなら六十ワットの光を放っています。やがて時が経ち、使われてきますと電球の周囲にススが附着します。するとそのススの積り方によって六十ワットの光は五十になり、四十五に落ちてきま

す。電球の回りを、ときおり掃除しませんと、常に六十ワットの光を外に放射することができなくなりません。

人間の意識もこれと同様に、地上の生活になれてきますと、五官による六根の影響をうけ、意識にススがたまつてきます。もしある人がそのススをつけたままあの世に帰つたとしますと、この世とあの世は連続していますから、外に放つ光子量に比例した世界で生活することになります。あの世は各人の心の調和度、すなわち、外に放つ光子量に比例して構成されているからです。四十五ワットは四十五ワットの世界でしか生活することができません。

この世に出てくるときに、仮にその人が六十ワットの光を持ってきたとしても、五十年、六十年の人生の間に四十五ワットであの世に帰つたとすれば、四十五ワットの世界に落ちてゆきます。そうして、再びこの世に出るまであの世で修行し、修正し、前の位置に戻り、もう一度この世で修行し直しをします。

修行のし直しをしてその生涯を六十ワットですごすことができれば、その人はこの世での試験にパスしたことになりますから、あの世では六十五ワットの光子量の世界に住むようになります。

意識（電球）にススがたまらないようにするには、ではどうするかといえは常に反省（心の掃除が必要）を行ない、その誤りを行為の上を示してゆく以外にありません。

人間は死して、意識は、あの世に帰ります。物理的に、その意識は、どこにゆくかといいますが、地球をとりまく大気層にかえつてゆきます。

即ち、地球をとりまく大気の成層は、地上から対流圏、成層圏、中間圏、熱圏(電離圏)あるいは、外気圏ともいう)等からできています。

意識の層(物質界と次元の異なった世界……)つまり、幽界、霊界、神界、菩薩界、如来界、宇宙界もこうした大気層の中にあるとみて下さい。

地上から上にゆくにしたがって、霊界、神界、菩薩界、如来界となり、したがって地上の上空は、さしずめ幽界となるのであります。

人間の意識は、光子というガス体からできており、そのガス体が軽ければ、上にあがり、重ければ、下に沈みます。

軽い、重いは、さきほどの自我の念が強いか、弱いかによつて、ガス体の純度がちがってくるのです。

地獄の想念は、地上に執着を持ちます。このため、地上の近くにいます。ガス体が重いから上にあがれないのです。

光の天使は、地上に執着がありません。このため、地上よりグンと離れた天上界で生活すること

になります。

天上界は地上全体を見通すことが出来ますから、その是非判断も正確になります。反対に天使以外の諸靈、つまり地上に近くいる者ほど地上の姿も部分的になりますから、人びとを導く器量に欠けてきます。

光の天使が諸靈を導くことができるのも、このように地上より高い世界にあつて、地球全体を、そしてあの世の世界も一望の下に臨むことができますから間違いないというものはほとんどないのです。そしてそれは、上にゆくほど正確無比になつてきます。

この現象界は 神仏より 一切の権限を光の天使に委ねしところなり 光の天使は 慈悲と愛の塊にして あの世界 この世の諸靈を導かん さらに諸天神あり 諸々の諸靈を一切の魔より守り 正しき衆生を擁護せん 肉体を有する現世の天使は諸々の衆生に正法神理を説き 調和の光明へ導かん

光の天使とは、仏教的には、諸如来、諸菩薩のことで、諸如来、諸菩薩は、神仏より命をうけ、この世とあの世で、苦界にあえぐ人々を善導しております。

上々段階・光の大指導靈には釈迦、イエス・キリスト、モーゼがおります。

釈迦は心と法を伝えました。イエスは、愛を教え、病める人々を救い、モーゼは数多くの奇蹟を世に遺しました。

眞の正法とは、それ故に、文証（心・法）、理証（科学）、現証（靈道現象、奇蹟、物質化現象など）の三つが揃って、はじめていえる言葉です。三つの証明のうち、一つが欠けても、正法とはいえません。

釈迦も、イエスも、モーゼも、この三つのことをそれぞれの時代に合わせて行なってきました。すなわち、実証してきました。正法とは、こうした意味で、まず宇宙をつらぬく神仏の心であり、エネルギーであり、そうして、その神仏の心、エネルギーをモトにして循環（転生輪廻）の法を形づくり、循環の法は、それがそのまま、神仏の慈悲と愛となつて、大宇宙を形成し、支配しているものです。

——正法は永遠不滅です。

今も昔も、その神理は、大自然のなかに、人間の心の中に、息づいています。多くの衆生は、その正法の存在を忘れてしまつてゐるといつてもいいでしょう。

これまで、神だ、仏だ、命だといつて、靈視のきくような人々の前に姿を現したものは、大抵は、動物靈、あるいは悪魔、地獄靈が大部分であります。

このような悪霊の場合は、如来や菩薩の姿をみせても、長くはつづかず、すぐさま姿を消すか、形を変えてしまいます。

もともと実在のそれではなく、変化させてみせているので長つづきがしないからです。たいていはこうした姿を見ると、ありがたい、もつたいたいという気持になつて拝んでしまうので変化していても分からないわけです。

しかし、見る人が、ハテ、これは本物かどうか、偽物ではないかと思つと、実在でないものはその形を崩し、消えてしまいます。

もう一つ大事なことは、実在の如来、菩薩なら黄金色に輝いております。後光がハッキリとみえ、美しく輝やき、見る者が納得するまでその形を崩すことがありません。

ところが変化したものは後光が青光りしていたり、全然見えなかつたりします。したがつてこうした点を判断の基準とすれば、絶対に間違いを犯すことがないわけです。

黄金色に輝き、姿をみせる如来、菩薩は、すでに今日の仏像、仏画にみられるような姿をしておりません。

動物霊、悪魔は神仏に祭り上げられることを望みますが、諸如来、諸菩薩はそういうことはありません。

如来、菩薩は神仏の使いであつても、神仏そのものではありません。

また神仏は、姿、形を、絶対に、人間には見せません。

なぜなら、神仏は宇宙であり、大自然であり、あの世とこの世の生命意識を生かしている大意識、大生命体であるからです。

神仏との直接の交信ができるのは、ほんのわずかの天使しかこの世にも、あの世にも存在しないということも、この際、知つておいてもいいと思います。

神仏は、一切の権限を、光の天使に与えており、地上を指導し、人間が修行しやすい環境をつくるべく努力をなされています。

ここ二千年の間に、光の天使といわれる靈位の高い人々が、入れ替わり、立ち替わり現われ、やもすれば動物本能にふり回される人間の行動にたいして精神的なブレーキとなり、その時代時代の方向を正し、人々を導いてきています。

また、こうした現象界での働きのほかに、現象界で苦勞する天使を助けるべく、あの世・実在における諸如来、諸菩薩の協力ということも忘れてはなりません。

第三次世界大戦は、人類を滅亡させます。

原子爆弾という、自己を守ろうとする人間の我欲から生まれた破壊兵器が、もしも、この地上で

数多く使われるとすれば、地上の生物は死滅するに至るでしょう。

このために、実在界では、地上の人間の一挙手一投足にたいして、常に関心を払い、戦争を未然に防ぐべく努力がなされています。

狂人に刃物で、そのようなキザシが少しでも見えるようならば、それ相応の措置が考えられています。

また、個人個人の生活にしてもそうです。ある人は右の道を、ある人は左の道を歩くことが、今世での修行であるとすれば、光の天使は、その人をして、その道を歩けるように、それに相応した環境をつくっています。

能力があつても、金の持てない人。どうみても、ものの判断力が中以下の人間とみえる人が大尽暮らしをするのも、実在界でコントロールしていることがあるのです。

もちろん、人によつては、その行動範囲を広く持つ者もいます。現世の生活にたいして、その自由意思を、ある程度、自由に行使できるという場合です。

大半の人々は、こうした自由が与えられ、その自由のなかで修行します。

何れにしても、このようにして、光の天使は、地上の環境が整うように、調和されるように、長年にわたつて、努力しています。

それは、慈悲と愛という、救いの立場に立つて、善導しているのであります。

一方、諸靈を守護し、正しき人々に味方する諸天善神がいます。

不動明王、摩利支天、大黒天、弁財天など。

これらの善神は、実在界、現象界の生命意識（人々の魂）を悪魔や動物靈、地獄靈から守るために、働いています。そうして、この地上世界の諸条件が、調和されるべく努力しています。それです。それから、時として、その能力は、如来や菩薩をも守護する力があります。

不動明王、摩利支天、大黒天というのは、それぞれの役柄であり、名称で、したがってこうした役目を持って、調和のとれた人々を守っています。

これが不調和ですと、その人を守ることはできません。水と油では同化しないように、意識が通じ合わないからです。

諸天善神に守られるようになれば、環境も自然に整い、魔を呼ぶことはありません。

飛行機事故で死ぬところを、物を忘れたり、急に熱が出て旅行をする氣力を失う、というようなこと。こうしたことは、普通は偶然のように考えますが、各人の守護靈や諸天善神が、旅行をやめさせるために、守っていることを知ってもらいたいものです。

諸天善神とは、一口に言って法の番人、正法を護持する役目を持った天界の天使たちです。

正法を説く者は、如来、菩薩であります。日本において、正法を説いてきた人たちをあげますと、伝教大師をはじめ、これは余り歴史上の記録にはでてきませんが、空教とか、他宗を排撃した誤りをのぞけば法華経を伝えた日蓮、他方信仰は誤りであると知りつつ、文盲の大衆に仏の道を説いた親鸞などがいます。このほか多くの光の天使たちがおりますが、こうみてくると光の天使の人間像が、大体お分かりになると思います。

この現象界におけるわれらは 過去世において 己が望み 両親より与えられし肉体という舟に乗り 人生航路の海原へ 己の意識 魂を磨き 神意の仏国土を造らんがため 生まれいでた ことを悟るべし 肉体の支配者は 己の意識なり 己の意識の中心は心なり 心は実在の世界に通じ 己の守護・指導霊が 常に善導せることを忘れるべからず 善導せるがために 己の心は 己自身に忠実なることを知るべし

人間がこの地上に生をうける時は、両親を指名し、自ら選んで、生まれてきます。むやみやたらと、精子と卵子が結合して、偶然に、生命意識が生ずるものではありません。そこにはあの世との世における計算が綿密に行なわれ、あの世に実在する魂がこの世に生まれ出るように仕組みられています。

ここで親子の關係について、ふれてみましょう。

親子の關係はどのようなにして結ばれるかといえますと、あの世において、あるいは過去世において、非常に親しく交わりを持った魂同士が、あの世で約束をかわし、こんどは私があなたの親に、私は子供に、といつて結ばれるものです。

このために、親子を選ぶ範圍というものはおのずと限定されてきます。その限定の範圍は、

一、魂意識が非常にあいにかよつてゐる場合。
一、過去世で親子の約束を強く望む。たとえばある人に非常に世話になり、その恩返しをしたいという場合。

一、過去世において親子兄弟、友人同士であつた場合。
一、あの世で生活を共にし、親子の約束をする場合。

などであります。

そうして、まず、親となる人が先に現世に生まれ、あの世で約束をした魂を待ちます。やがて、さきに生まれた人が成人し、結婚し、精子と卵子が結合した瞬間に、約束を交わした魂が、その胎児の中にはいるわけです。

ふつう一般に、妊娠したことが受胎といわれていますが、受胎とは、嚴格には、その胎児に、魂

が宿したことをいいます。

精子と卵子が結合する時期は、さきに現世に生まれ出た人の想念行為に多分に左右されます。また、約束を交わした人が受胎しても、さきに生まれ出た人がそんなことを忘れてしまつて、今流行の墮胎や、肉体的無理がたたつて流産してしまふ場合があります。

このような場合は、あの世の魂の兄弟達があの世に戻つた嬰兒を養います。

現在我が国では、こうした人為的な人口調整を行っている例が多いために、あの世の生活に多くの支障を与えています。といひますのは、親子の約束をし、共に魂を磨くその目的が果たせぬために、あの世に舞い戻つた魂は、ある一定の時間を経なければ現世に出られぬからです。つまり、それだけ時間をムダにし、魂の進化を遅らせることになります。

ここで注意したいことは、両親と子の関係です。広い意味では、親子関係は、必ず約束を交わしています。したがつて、その関係に絶対狂いはないのですが、その約束は、単数ではなく、大部分の人は複数で成立しているということです。

たとえばA(父)とB(母)との間にC(子)がもつとも理想的関係であつたとします。ところが現世に出たAとBは、AはB'(別の女性)と、BはA'(別の男性)と結婚してしまつた。このため、Cはその理想的な環境を望みたくても望むことができないという場合は、やむなくAとBの両

親を選んで出てきます。なぜかといいますと、子供となるその魂にとって成人するまでの過程は、父親よりも母親の方がより近いし、あの世で約束をした母親は、その子を大事に育ててくれるからです。ですから大抵はこのように、母親寄りにそって生まれてきます。人によつては父親寄りになる場合もありますが、普通は母親寄りであります。

また、AとBの結婚生活がうまくゆかず、AはBと、BはAと結婚するということもあります。そうかと思つと、その夫婦生活が正常さを失い、社会的問題等をおこしている場合は、その間に生まれ出る子供の魂もそれに合うようなものを引き入れることがあります。この場合でも、親子の關係は、複数という立場において約束されていたわけでありす。しかし、その複数の範囲は無制限に広いわけではなく、ある一定の枠内にかぎられています。

要は、各人の魂がもつとも修行しやすい環境と、その両親を選んで出てきているというわけです。ですから、さきにも述べたように、両親の魂とその子の魂が同じような場合もあれば、両親の魂が高く、子供のそれは低いということもあるし、反対に、子供の魂が非常に高いということもあります。

肉体舟は両親からもらつてはいますが、魂は全然ちがうということがいえます。

ここで現象界に出ている者にとつて大事なことは、己の想念行為は、これから生まれ出る子供の

精神と肉体にたいして、非常な影響を与えるということです。昔から、夫婦の交わりには美しい花を見て精神を安定にしたらどうか、よい音楽を聴くとか、いろいろないわれ、プラトニックな愛の心が望まれてきましたが、こうしたことはよりよい子供を生み、育てるといふ意味でも重要なことなのです。

現象界に出ている人達の意識が低下しますと、それに類似した魂がひきよせられて、この現象界はますます混乱してきます。現象界が混乱すると、あの世もさわがしくなってきました。

現象界の混乱はそのまま地獄の相が出ていることであり、地獄に堕ちてゆく人が多ければ、この世もまたそれに影響をうけるといふ悪循環をつくるからです。この悪循環を絶つには、現象界に出ている人達が常に善の意識、そうして進んで慈悲と愛の想念行為を日常生活に生かしてゆくことです。

あの世の地獄は現象界の善の姿を学ぶことによつて、浄化されてゆくからです。現象界はあの世の投射といわれますが、この意味は、現象界にある者の意識があの世にただちにコンタクトされ、写し出されてくるからであります。

したがつて、要は、現象界の人達の意識の高低がいちばん問題になり重要になつて来ます。さて、両親の調和によつて人はこの世に生を得ることができました。どんな環境にあるにせよ、

各人はその両親を選んでこの世に生まれ出てきたわけであり、両親にたいして、感謝の心をもって接してゆくことは当然であります。

あの世からこの世に生まれ出るためには、人間は最低千年から二千年はかかっています。あの世にあつては、魂の進化は遅々として進みません。魂の進化はこの世に出てはじめて果たされます。魂の進化は、人間として、神の子として果たさねばならぬ義務であります。一〇%の表面意識はそれを忘れていても、九〇%の潜在意識は知っています。それを忘れて、何故この俺を生んだ、俺はこんな世の中に生まれてくるなぞ考へてはいなくなつたと、もしも思うような人があるとなれば、それは大変な間違いであり、己の魂の進化を自らとざしてしまふものです。

あの世は波動の細かい世界、この世は荒い世界です。

この世は波動が荒いだけに、原因——結果のテンポが遅く、それだけに人間はあの世で学んだことを忘れ、現実的想念に翻弄される場合が多いのであります。各人が持っている意識の量の一〇〇%のうち、わずかの一〇%でもつてこの世の人生航路を渡つてゆくというのですから、無理がないといえ、ないのです。

しかし、そこが修行であるわけです。もしもその意識量が三〇〜五〇もあつたとすれば、あの世からこの世に出てきた意味は半減されてしまいます。

本当のことをいって、一年後、五年後の自分の運命が分かたならば修行の度合いも少ないものとなるからです。

一〇%の意識量についてバネの例で説明してみましよう。ここに一つのバネがあつてそのバネが完全に伸びきった長さを仮に一〇〇センチとします。つまり、弾性の限界とします。さて、そのバネを五〇センチのところまで圧力をかけて離しますと、そのバネの伸び率は五〇%となるはずですが、こんどは九〇センチまで圧力をかけて離すと、その伸び率は九〇%となります。つまり、その伸び率は、圧力を沢山かけた方が、より高いということが分かります。

私たちの人生航路は、このバネの伸び率と同様に九〇センチまで圧力がかけられ、九〇%の伸び率を期待され生活しているのです。

それだけに、その修行はきびしくつらいものとなりましようが、魂の向上にとつて、またとない機会が与えられているといえるのです。

したがつて、この世の十年の修行は、あの世の六倍、一〇倍にも匹敵するといふのもこうした理由からであり、一日一日をおろそかにしてはならないということがいえるのであります。

この世の波動が荒く鈍いということは、私たちの意識の量だけでなく、大自然そのものが、それにふさわしい姿で構成され、私たちが修行できるように、神がそうした環境をつくつてあるからで

あります。

人間の意識の量だけが三〇〜五〇%も出て、他の物質が一〇%とすれば、私たちはこの地上に生存することは不可能となります。なぜなら、波動が合わなくなってしまうからです。

人間の意識が一〇ならば、他の動・植・鉱の波動も一〇をもって構成されています。したがって、動・植・鉱もあの世に存在し、あの世の姿を現象界に映し出しているというのが、この世のいつわらざる姿なのです。

そうして、人間を中心として、あらゆる万生万物がそうした環境のなかで修行し、調和へ向かって進化を続けていくというのが真相です。

人間の意識が高まり、自己保存の本能的観念は誤りであると人類が認め、ともに協力和合のリズムが揃い出していきますと、他の動・植・鉱もそれにつれて、人類の目的にたいしてあらゆる協力を惜しまなくなりませす。

たとえば、人類があの世界で学んだ理性にもとづいた行動をとるならば、風水害、地震、火山の爆發、疫病等による天災はもろろんのこと、人為的な災害も消滅し、地上は植物が繁茂し、その植物・鉱物から、まったく新しい発明発見がなされるように仕向けられてくるでしょう。

動物についても、人類に危害を加えるものも少なくなり、彼らは彼らの世界で生活を楽しむよう

になるでしよう。

現在、動物は人間の言葉や所作について、それが何を意味するかを、せまい範囲ではあるが、本能的に理解する能力を持っています。犬、猫、小鳥、その他野生の生物と生活を共にすると、この事実がはつきりと分かります。

ところが現在の人間は、彼らの言葉や要求にたいしては、これを理解する人は非常に少ないのです。ところが、人間の意識が高まり、慈悲、愛の心が強くなってきましたと、彼らの言葉が分かり、人間と動物との意思の交流が行われ、動物は人間にたいして、あらゆる協力を惜しまなくなってくるのです。

仏国土というものは、こうした姿でこの地上に実現してゆくものです。

ところが前にも申しましたように、人間は一〇の意識で生活しています。そのうえ、それぞれの魂の転生輪廻の過程で、それぞれがカルマ（キリスト教的には原罪）をつくり出しており、そのカルマが、あの世で修正されておりながら、因縁のリズムによって再びくりかえすという悪循環をつくり出しているのが現状です。

そこで、人間の人間たる所以は、決して、肉体そのものにあるのではなく、肉体は単に、魂の乗り舟であるというあの世の心を思い出し、心を主体にした生活を送ることが大事です。しかもこの

ことは、他人のためではなく、あなた自身のためなのです。

貧乏なら貧乏という苦しみを、この世に出る度に経験するか、それとも、余裕ある生活を望み努力するかは、いつにかかつて、現在のあなたの心次第なのです。

各人の心は、あの世に通じています。その事実は、人にウソはいえても、己自身にはウソがいえないということでもおわかりのはずです。

各人の心は、人のものを奪うことは悪いことである、人に施すことは善いことである、ということを知っています。

大部分の人は、人のものを奪うことはしないかわりに施すこともしないようです。そうして、自分だけの生活を守ってしまうようです。

さて、このことについて、いいのかわるいのか、一つ考えてみていただきたい。

神の子の人間には、あの世に自分の兄弟がおり、その兄弟、先輩達が、神の子の本性を実生活に現わして欲しいと願ひ、先導しています。

先導しているという証明は、自分自身にウソがいえないという事実。たとえ小さなことでも困った人を助け、相手に感謝されたときの心の喜びと、人を押しつけて、人と争いをした時の心の状態をみれば、自分の心がどういうものであるかが分かるはずです。

一見、この世の中は悪人が榮え、善人がしいたげられているようにみえます。客観的にはそのように映ります。けれども、その悪人の心の中はごうであるうかとみると、心の中は常に格闘の連続であり、客観的な幸福に比べ、中身が地獄であるというのが実情なのです。

悪を犯して平気な人がおります。悪を悪と思えないような人。主観的には幸福な人とみえますが、この場合でも地獄です。自分は何ともなくとも人の呪いをうけます。ヒトラーは自分は善人だと思っていたかも知れません。しかし多くの人びとを殺し、殺された者の怨念が消えるまでは無間地獄からのがれることはできません。

天は決して不公平、不平等には扱っておりません。心のままの世界を、現実の生活のうえに現わしております。それは地位、名譽、金といったものではなく、この世も、あの世も、心が中心をなして回転しているからであります。

しかるに諸々の衆生は 己の肉体に 意識・心が支配され 己が前世の約束を忘れ

自己保存 自我我欲にあげられて 己の心の魔に支配され 神意に反しこの現象界を過ぎゆく

ん 又 生老病死の苦しみを受け 己の本性も忘れ去るものなり

ここでいう前世とは、この世に出る前のあの世をいいます。

霊界について考えてみましょう。

この世界は、現象界とひじょうによく似ています。生活の様式、住む環境、人と人との交際など

……。

地上とちがう点は、経済は物々交換であり、勤労にたいする報酬がキッチンと決められ、働かないで徒食するということはありません。

国家はあるかという点、これはありません。ただ日本人は日本人、アメリカ人はアメリカ人というように、民族的に集団的、社会的な生活をしており、地上で親しかった人達と会って、地上生活をなつかしむことは、随所にみられます。

ものの考え方についてみると、霊界の低位は損得の計算がやはりハッキリしており、そういう人たちの集団によつて社会生活が営まれています。

長い生活の過程には、多少のトラブルはありますが、大事に至ることはありません。

しかし、もしこの界の秩序を乱そうとする人があれば、その人はいつの間にか、幽界に転落してきます。この界の意識に調和されないのですから、異端者は、この界に住むことが出来ません。逆に、損得の感情に寛容さが加わり、奉仕の心が芽生えると、一段階上の界にあがります。

靈界までは自己中心的要素が強く働きますが、上にあがるにしたがつて、自己中心の度合いが希薄になつてきます。このように、靈界一つとつても、その界層は、幾層にも分かれ、上に進むほど、損得の感情、価値の標準は、物質的なものから精神的なものにかわつてゆきます。

しかし、魂のめざめが遅く、その界に安住し、これで満足だと考え、精神的な向上を怠れば、その魂は、何百年もそこにとどまります。あの世の社会環境は、各人の魂にふさわしい場をつくり出していきますから、それぞれの界に不調和の感情を出せば、周囲の人は相手にしません。したがつて、反省の度合いも地上より早くできます。

ところが、ものの考え方がいづれも同じようなので、それなりの調和、平和が維持されていますから、精神的な進歩・向上は、なかなかしにくいという欠点があります。

地上でも、都市から離れた僻地の農村、小島の集落では、そこに住む人びとの退嬰的、保守的な感情をみることができます。平和で、食べものに困らなければ、そこから抜け出そうという意欲がうすれます。

あの世もこれに似ていて、各界層というものは、その界層にふさわしい集落をつくつています。このために、退歩することは少ない割に、進歩の度合いも遅いということになります。ですから、この世の十年は、あの世では、五十年、八十年、人によつては、百年、二百年以上も

かかつてしまいます。

この世は、上をみればきりがなく、下をみても際限がないというように、地位や名譽にしても、人びとの感情を刺激する材料にコト欠かぬ状態です。それだけに、地上の生活は、魂修行にとつて、絶好の場となるわけです。

もつとも感情を刺激する材料が多いだけに、五官にふり回され、地獄に墮ちてしまう魂もでてまいります。

しかし陰と陽との極点の振幅が大きいだけに、地上の生活は、人間にとつて、またとない魂向上への踊り場といつてもいいのです。

しかも、あの世で、仮に、靈界にいた人、神界、菩薩界の人でも、この世に出れば、みな同じです。生まれると同時に、一から出直しです。

このことは、人間は生まれると同時に、過去の記憶が途絶えます。過去の魂がいかに高かろうと、その記憶は、一様に閉ざされてしまうのです。閉ざされるから、修行ができるのです。

あの世から、この世に出る時、人は調和という、又とない魂の経験的修行を身につけています。それは長い期間、そうした環境の下で生活を続けることによつて得たものです。

しかしこの世に出るといふ場合は、共同生活がなされ、地上に出るための訓練が行われます。長

い期間、あの世で生活していますから、地上の荒波に絶え得る魂の訓練が必要となるからです。

そうして、そこでみっちりと学び、その学んだことを、地上で果たすことを約束して出生します。

学んだこととはすでに述べたように、その一つは己自身の魂の向上、つまり、己自身のカルマの修正という魂の研磨であり、第二は、これを土台として、神意の仏国土をつくるということであり
ます。

肉体の支配者は己の意識であり、その意識の中心は、心であるということ。心は実在界に通じ、己の守護・指導霊が、常に、自分を導いているということを胸に収めて、人びとは、出生してくるのです。

ところが人は肉体を持つと、先天的・後天的因果にわざわざいされ、生活の実相はこの世だけと限定し、この世のルールのみにとらわれた、自分の意識、価値の尺度をおいてしまいます。

先天的因果とは過去世のカルマ。後天的とは、今世でつくり出した性格です。

この二つの因果によって、過去世で犯したカルマを再びくりかえしてしまいます。たとえば、社会的問題を犯した人があの世でそれを修正してこの世に出てきておりながら、再び同じ過失をおかしてしまうというのがその例です。

このために、魂の修行が修行にならず、あの世に帰る場合が非常に多いのであります。

Aという魂の人が仮に神界の中段階まであの世でいつていたとします。その人が中段階の一段上をめぐらしてこの世に出てきたところが、先天的、後天的因果にわざわざいされて、あの世に還つた時は地獄であつた。

そこで、またあの世で修行のやり直しをし、中段階にもどつて、この世に出たが、また地獄に墮ちた。こうした堂々めぐりが多いのであります。

この世の中が、何万年、何千年経つても一向によくならないというのも、一つにはこうした悪循環をくりかえしているのが実情であるからです。これというのも、あの世での訓練、調和の心を忘れ、自己保存、自我我欲にあけくれて、己の心の魔に支配されてしまうからです。

魔とは何か――。

それは迷いです。肉体がすべてであるという考え方です。知と意で物事が大抵片付いていくので人間は生きているうちが華であり、死んだらおしまいという肉體意識が強くなつてしまつてからです。また病気をすれば苦しい。死んだ人とは話しをすることもできない。せいぜい夢のなかで会つのが精一ぱい。

しかし、人を扶けた時はたしかに気持がいい、反対の場合は気分が悪い。まあ適当に、大事なく生きてゆければそれでいいとする人がほとんどではないかと思ひます。

こういうことから、人間は大事な心を忘れ、知らず知らずのうちに執着、自己保存という神の子に反した魔のとりこになってゆくのであります。

その原因は煩惱なり 煩惱は 眼・耳・鼻・舌・身・意の六根が根元なり 六根の調和は 常に中道を根本として 己の正しい心に問うことなり 己の正しい心に問うことは 反省にして 反省の心は 己の魂が浄化されることを悟るべし

人はそれぞれの生活の過程において、いわゆる浮世の無情さ、哀れさ、悲しさに直面し、日常生活に、反省を求めるような機会に、大抵、遭遇するように仕組まれています。

親しき者との死別。社会的な矛盾。健康の問題。どうにもならない運命のいたすら。生きんがための空しい努力、など……。

その人生のどこかの時点で、必ずや、一度や二度、否、何回、何十回となく立ちどまって、自身をふりかえる機会に会うものです。

このときが、いかなれば前世において学んだことへの郷愁なのです。ノスタルジアであります。人間は何のために生まれ、どこへゆくのか。死とは何かという疑問が、どんな人でも胸をかすめます。

胸をかすめたとき、その人が、もしも、これまでの誤った生き方に精神的な方向を見出し、正しく生きようと欲するならば、その人は、あの世で学んだことの何割かを、現実に生かすことになるでしょう。

その反対に、それはそれ、これはこれと割り切り、肉体的感覚のみを再び追いつづけるならば、その人は、あの世に還ったときに、生まれるときの約束をホゴにしたのですから、もう一度、千年、二千年、あの世で修行のやり直しをします。そうして、この地上に、生まれて来たときは、前の世と同じような状況の下で、生活をし、その人がその約束にめざめないかぎり、同じ運命を、二度、三度とくりかえすのであります。

たとえば、前の世で金持に生まれ、金に困らない一生を送ったが、金持であるがために人を見下し、増上慢や優雅な生活になじみ、困った人たちを救うことがないとすれば、金持という環境の中で自分の魂を向上させることがなかったのだから、もう一度、そうした環境に自分をおき、自分を見つめることになります。

一見、こういう生活は楽でいいように見えますが、あの世に還つてからが大変なのです。心は増上慢に高ぶっており、その上、優雅な生活になれ過ぎたため、まず、増上慢の人間が集まるエゴの世界に身をおきます。エゴの世界に心の安らぎはありません。同類が集まる世界ですから、俺が俺

がという争いの渦中にまきこまれ、右を見ても、左を向いても敵ばかり。金持でありながら人に施すことがないのだから、金に執着があり、餓鬼界という世界が展開される。地上界とちがつて自分のいうことをきく人がいないので、何をしても一人です。人の金をかすめるのも自分がやらなくてはならない。しかし、優雅な生活で腕力には弱い体なので、敗残の憂目を長い期間、経験させられる。

この地上界はテスト（修行）の場なので、金持であろうと、貧乏人であろうと、そうした環境の中で、自分の心がどう動き、どう行為して行くかが問題であり、こうした環境に負け、あるいは、それに流された場合は、そのテストにパスできなかったのですから、もう一度、そうした環境を選んで自分をみつめることになるわけです。

したがって、これほど本人にとって、過酷な運命はありません。

これを仏教では業といっています。キリスト教では、人間の原罪に当ります。

業も原罪も、人間の心の中に住むところの魔です。魔の作用です。

その魔が、人間をして、あの世で学んだことや目的を失わしめて、五官による六根にふりまわされる原因をつくつていきます。

魔とは自己本位の感情です。自我我欲です。たとえば、金はないよりあつた方がいい、とする自

然な感情をたくみに利用し、必要以上に扇動するのです。

「もしあなたが、ひれ伏してわたしを拜むなら、世のすべての国々とその栄華をあなたにあげますよ」

するとイエスは、

「サタンよ、退け……」

悪魔は、イエスの強い信念に押されて退散します。

このくだりは、聖書の中に書かれています。

イエスのような神の使者にも、その心の中に、悪魔はひそんでいたのです。

釈迦についても、六年の苦行の間に、さまざまに試練に会っています。

美女の一群に囲まれて、情欲をそそられたり、修行の無意味さ、悟りへの空しい努力に、カピラ

の楽園が脳裏に浮んできます。

体はやせ細り、みるも無残な敗者の姿が眼前に浮ぶと、出家の目的が霧の彼方にかすんでしま

います。しかし、釈迦は、己の心の中にひそむ、悪魔のささやきに耳をかさず、初志を曲げなかつた

のです。

こうして、釈迦も悪魔に克つたのです。宇宙大に広がった己自身の姿をみたときに、人間の本性

を知ると同時に、人間の苦しみは、己の中にひそむ悪魔の声にふりまわされることであつて、これさえ乗り超えれば、人間は皆、神の子、仏の子であるのだから、人間に与えられた真の自由と法悦を手中に収めることが出来ると悟つたのです。

苦の根本原因は、心の中にひそむ悪魔の声に自分が踊らされるところにあるわけですが、その悪魔の声に、自分が踊らされるような状態をつくつてゐるのが、人間の六根です。

あの世において学んだところの使命、目的を忘れるのも、肉体という五官を持つて生活しますから、なかば宿命的に六根煩惱をつくるようになり、苦界にあえぐということになります。

肉体は、それぞれ独立しています。男女の別、老若の別、兄弟姉妹の別、縁者他人の別というように、個々別々の、しかも、その考え方、精神状態、姿形も異なりますから、ますます六根の働く場が出てまいります。

しかし、人間の肉体は、個々独立してみえてゐるようですが、本当は一つです。

人間の肉体を又線にかけます。するとその肉体は素通しにみえます。骨の部分、病氣の部分が黒くみえるだけです。厳格には血管も黒くうつります。もつと素通して映しますと、骨の部分も透明になり、肉体の向う側が、ジカにみえてくるようになります。

このことは何を意味するかといへば、人間の肉体は、本当は、そこにあるようにみえていて、実

はないのです。

肉眼では個々別々にそこにあるようにみえますが、本当は、空気や宇宙の粒子に同化しているのです。

そこにあるのは、その人の意識、魂だけです。肉体はエネルギー粒子が凝縮して、一定の場所に集まっているにすぎません。ですからある一定の時間が経つと、宇宙空間に還元してゆきます。いわゆる、肉体的死です。

こうみてまいりますと、肉体が独立して生きているということは、本当は眼の錯覚、幻覚にすぎないということになりましょう。

個々の肉体は、宇宙という大自然の中に同化し、一つであるということです。

痛いとか、苦しいとか、こころよいとかの神経作用は、その凝縮された肉体細胞に、意識が、魂が、乗っているから感ずるのです。

人間には魂があり、意識があるから、諸々の事象をとらえることができます。厳格に言えば、肉体は単に（それへの）媒体にすぎません。

ところが人間は、肉体そのものが自分であり、人間であると思いがちです。魂とか、意識というもの、肉体があるから存在するとみてしまいます。肉体優先の生活が、やがては六根を生むよう

になつてくるのです。

六根とは、眼・耳・鼻・舌・身の五官に、意が作用し、煩惱を育てることをいいます。

意とはこの場合、自我我欲です。

我欲が働くと魂が五官にふり回されますから、本来、宇宙大に広がりを持つ魂意識が次第に小さくなり、やがて、人間は、煩惱の支配下におかれ、魔のトリコとなるのです。

これを業といい、原罪という名で呼んでいます。

六根とは、眼、耳、鼻、舌、身、意の六つが相互に関連し合つてつくり出されてゆくものです。

五官とは意をのぞいた五つの肉体的機能(眼・耳・鼻・舌・身)であります。したがつて五官は

肉体の部分。意は意識の部分ですから、これは精神機能となります。

六根とは、意(精神)の部分が五官にふり回されることによつて生ずるものです。

美しい人を見て、いろいろ想像し、心が動く。地位や名誉に夢中になる。金に執着を持つようになる。自分だけの幸せを願う。人を中傷する。グチが出る。おごる心が生まれる。

こうした想念の動き、あるいは行為は、すべて六根の作用から生じておりますし、人間の意識の部分の想念帯という意識の層に、黒い幕をつくり上げてゆきます。

人間の意識は、表面意識と潜在意識から成り、その両者の間に想念帯という層ができております。

この層には、その人の過去、現在における想念と行為の一切が記録されています。したがって、この層には、人を助けたこと、人を呪つたことが、そのまま記録されているのです。

人間は通常、五官と表面意識と想念帯という肉体的、精神的作用によって生活しており、潜在意識の作用は、ごくわずかしかな働いておりません。

第六感、第一印象、虫の知らせというような精神作用は、潜在意識（守護霊）の作用であり、こうした作用は四六時中あるものではありません。したがって、人間の生活は、どうしても六根を根底にして動いていきます。

想念帯という層は、本来、ありません。人類が転生輪廻を重ねてゆくにしたがい、それぞれ、想念帯という層をつくりあげ、これが各人の個性、能力、運命といったものを蓄積し、つくり出してゆくようになっていきました。

このため、この層は、いいこと、悪いことが全部記録され、悪い部分が多いと、その人の運命も悪い方向にむかつてゆきます。

よいものが多ければ、比較的順調に世を送るといふこともあります。もちろん、魂の向上からみて、順調に世を送ることが必ずしもいいとはいえない場合もありますので、一概には悪い部分が多から災難に合う、良い部分が多いから健康で地位も名誉も得ることができたとはいえないのです。

ただ、一口にいうと、総じて、そのような姿で人の幸、不幸が運ばれていくといえます。

人間の意識が表面意識と想念帯の作用のみで動くようになったというのも、もとはといえば自業自得といえるのです。

二億年前の人類は、仏国土をつくることが目的でしたが、現代の人類は、その前に、想念帯に記録された諸々のカルマ、原罪を修正してゆくことが急務となったわけです。カルマの修正とは、己自身の意識をまず仏国土とする。しかるのちに、人びとに働きかけ、人びととの調和と自然との調和をはかつてゆく。

二億年前の人類は、動物たちによって荒されていた地球という地上を、人類が住めるように調和してゆけばよかったわけですが、現代は、その前に己自身の調和が必要となってきたわけでありません。

六根を清浄にすることによつて、想念帯の幕がひらき表面意識と潜在意識が同通すると、真性人間として、本来の姿にもどつてゆくわけでありませう。

意識に魔がはいる、あるいは魔王が人の意識を占領するようになりますと、その人の運命は急速にかわり、普通では考えられないような状態をつくり出してゆきます。

殺人、強欲、こわいもの知らずというような精神異常をきたしてゆきます。これは六根にほんろ

うされ、愛執の念が強くなつた時に、あの世の魔王が憑依して働くからです。愛執の念も程度の差によつて、動物霊や地獄霊が憑いてきて、人がかつたようになります。

もちろん四六時中でなく、酒をのむとケンカをする。暗夜、女性をみると自制力を失つていく。デパートにいくと万引の衝動が起こつてくるというように、時と場所によつて精神に異常をきたしてくるのです。運命も急速にかわつてくるのも当然でしょう。

通常はこつまでゆかないまでも、六根に左右されながら生活してゆきます。この場合は分を守り、節度を保ちながら動いていますので、憑依は比較的少ない。

憑依は、こつした節度、もののケジメがわからなくなつてきた時に赤信号となります。人の意表に出るとか、自分を見せようとする思い、威張りたい、知識が鼻にかかる。そうかと思つと自閉症的症状、自己嫌悪、人間嫌いが強くなつても危険になつてきます。

五官による六根にふり回されない自分を確立するためには、六根の調和しかありません。六根の調和は、反省の生活です。反省の生活は、表面意識と潜在意識の同通を意味します。反省の思考は、表面意識が潜在意識に通じることですから、反省によつて自分自身の想念と行為の在り方を正しく見直せます。

ある仕事をして失敗した。その失敗したことにたいして、なぜあのような失敗をしたかを正しく

見つめ、二度とその失敗をくりかえさぬようにすれば、その仕事はやがて成功に結びついてゆきます。

科学の今日の成功は、こうした失敗に対して正しくそれを評価した結果です。人間の精神の問題、健康の問題、運命についても原因があるから結果があるわけです。ですから、反省はこうした問題を解明してゆく、人間に与えられた唯一の思考作用であり、反省こそ人間生活上の偉大なステップであり、そうして、これはまた神の慈悲であつたのです。

反省は行為を通してはじめてその効力が現われてきますから、反省は行為であるわけです。

反省によつて、人の魂はますます浄化されます。六根が浄化されてゆくのです。

反省の功德

一、反省は、表面意識が潜在意識の門戸を開くカギを握つてゐる。

一、反省は、表面意識と潜在意識が相通するかけ橋である。

一、反省は、過去世で学んだことを、表面意識が確認するただ一つの機会である。

一、反省は、神仏が与えた魂の向上のための慈悲であり、愛であつて、人間としての喜びを知る

最良の方法であり、智慧の泉でもある。

己自身は孤独にあらず 意識の中に己に関連せし守護・指導靈の存在を知るべし

守護・指導靈に感謝し　さらに反省は己の守護・指導靈の導きを受けることを知るべし　六根あるが故に　己が悟れば　菩提と化すことを悟るべし

反省は心の安らぎと智慧の泉であると、前段で書きました。

この意味は、各人の意識の中には、守護・指導靈が存在し、その守護・指導靈がその人の求める質と量に正比例するように、あらゆる智慧を貸してくれるということです。

反省とは、自分を改めて見直す意識の転換作用です。

自分を改めて見直すということは、自分を客観的にみることであり、そこには自我はないはずで

自分のよい面、悪い面が浮き出てきます。

よい面、悪い面が出れば、これの取舍選択は、自ずと判明してきます。

ここで大事なことは、自分を客観的に見ることが出来たときは、守護・指導靈が自分をみていて、ということなのです。

本物の自分(善我)が、二七物(偽我)の自分をみているということになるのです。

やがて、二七物が消え、本物だけになったとき、その人は、守護・指導靈と一体になったのですから、このときはじめて、悟りの一步を印したことになります。

そうして悟りの段階が進みますと、観自在心という、自由な心を得、生死をこえた大悟を獲得するようになります。このとき、人は真我の自分を発見するのです。真我こそ実在の神の子であり、神である自分であります。宇宙即我、これこそ真我の自分です。

ここで人間の生命、意識のグループということについて触れておきましょう。

人間は決して、孤独ではありません。本体を中心にして、五人の分身から成り立っています。物質の構造と同じです。ちょうどそれは、核と、陰外電子の関係です。もしも陰外電子がなく、核だけであれば、その核は崩壊します。物質が物質として、その生命を維持するには、核と陰外電子の相互依存の関係がなければなりません。

人間の場合は、本体が一、分身が五にわかれています。これには次のような理由があります。

大宇宙は、光（神の意識）に満ちており、光には熱、エネルギーが伴います。熱は電気を生み、電気は磁気を、磁力は重力を生んでゆきます。

大宇宙が大宇宙としての生命を営み続けているというのも、大宇宙という本体と、光、熱、電気、磁気、重力の五つのエネルギーの相互作用があるからです。

人間を称して、小宇宙といわれます。また、人間の姿が神の体に似せてつくられているということは、大宇宙の組織と全く同様につくられているという意味なのです。

このように、一個の人間は、同一生命グループの六人が、本体(核)を中心にして、五分身(陰外電子)からできており、一人ずつ、かわるがわる現象界に出て修行します。

そうして、一人が現象界に出ている場合は、他の五人は表在界に残り、生活しています。

実在界の五人のうち、その一人が守護霊となつて、現象界に出ている一人を、守り続けています。指導霊というのは、こうした生命グループに、関連した先輩あるいは友人がなります。

魂が上段階に進みますと守護霊が指導霊となつたり、指導霊が守護霊にまわつたりします。

こうして、守護・指導霊は、同一の生命グループ、あるいは、これに関連したグループの一人が担当して、現象界で修行している者を、守護・指導します。

このため、守護・指導霊は、現象界で表面意識の一〇パーセントで修行している者の潜在意識層の九〇パーセントの領域に絶えず入つて、その人を守り、指導しています。一〇パーセントの表面意識で反省するときは、九〇パーセントの潜在意識に在る守護・指導霊が、その人の肉体に入つて、その反省の度合いに応じて教えてゆきます。

たとえば、人を怒つたとします。あるいは心の中で怒りの想念を持つたとします。そのとき、その人がただちに反省して、これはいけない。人を憎んだり、怒るといふことは、争いの種を自分の心に植えつけるばかりか、さらに相手の反発心をあおることになる。そこで、こういうことは二度

とすまい、と考えたとしします。

こうした場合は、守護霊が、その人の肉体に波動を送り、あたかもその人自身が自分で考えたような形で教えていきます。

反省の度合いがさらに進み、怒りや憎しみという想念が、いったいどこからくるのだらう。それは結局のところ、自分を守ろう、自分をかばうところの自己保存のあらわれであり、自己優先、保身の感情であつて、自分と他人を別々に考えるところに、そもそもの原因があるとして、それはあつさり捨てるべきものなのだ、と思ひ至るならば、そのときは守護・指導霊がその人に働きかけているといえるわけです。

人間の想念——一口に心ともいわれる各人の意識層(精神)は一念三千といつて、環境の變化、その時々気分、めまぐるしくかわります。そういう變化してやまない想念を、反省というブレーキ、つまり自分をかえりみる心のゆとり、情操を常につちかつておけば、守護指導霊はいつそう、その人を、守りやすく、指導しやすくなり、その人の心を調和させてゆくことになります。そうして、やがて、一〇の表面意識と九〇の潜在意識が一体となり、本当の悟りを開くことになつてゆきます。

もつとも、反省ばかりしているのもどうかと思ひます。一日中反省のくりかえしでは、こんどは

日常生活がおろそかになり、心の小さな人間にもなつてしまします。

そこで、反省も、焦点をしぼって行い、あまり細かいことは、こだわらないようにしたいものです。

人間は、しよせん、神仏にはなれません。そして悟りにも段階があつて、その段階を一步一步地に足をつけて歩むところに、六根の人間の姿があります。

六根という煩惱をみつめながら、調和させながら一つ一つ悟つてゆき、やがて、大悟してゆくのです。

煩惱即菩提——。

煩惱は反省の材料となり、それによつて、人は煩惱即菩提（悟り）を得ることが出来るわけです。もし煩惱がなければ、悟りもなく、魂の前進もないでしょう。

魂の進化とは、心の豊かき、とらわれない自由さ、そして安らぎをいうのです。

煩惱とは不自由ということ。とらわれがあるために、自分の心を自分でしぼつてゐるわけです。自分の心をしぼるとは、怒り、愚痴、憎しみ、そねみなどであり、こころした心で日常生活を送つていまして、やがては病氣にもなつてゆきます。しかし、そうした苦しみ、悲しみがなければ、苦しみ、悲しみのにがさはわかりません。苦しき、悲しみのにがさは、苦しき、悲しみを超えてはじ

めてわかるものです。

健康なときには、健康のありがたさがわかりません。病気になるって、はじめて健康のありがたさ、楽しさ、喜びがわかるものです。

善と悪についてもそうです。善のよきは、悪があるのでわかるのです。悪のみにくさも、善がなければ判断がつきません。

煩惱と菩提の關係というものは、人間がこの地上で生活し、修行するうえにおいて、欠くことのできない仕組みであるわけなのです。

神仏の大慈悲に感謝し 万生相互の調和の心が神意なることを悟るべし 肉体先祖に報恩供養の心を忘れず 両親にたいしては孝養を尽すべし 心身を調和し 常に健全な生活をし 平和な環境を造るべし 肉体保存のエネルギー源は 万生を含め 動物 植物 鉱物なり このエネルギー源に感謝の心を忘れず 日々の生活の中において己の魂を修行すべし 意識のエネルギー源は 調和のとれた日々の生活の中に 神仏より与えられることを悟るべし

前稿で煩惱と菩提ということにふれました。これについてもう少し述べておきます。

煩惱、菩提というものは、人間がこの地上で生活する上において欠かせない仕組みですが、しか

しこの間をさ迷うかぎりは、人間はいつになつても菩提心を結実させることはできません。ひらたくいえば、悪（煩惱）と善（菩提）の間から抜け出さなにかぎり、絶対の善には至ることができません。

悪は善に至るための方便であり、善をよりのばすための素材であるのです。このため、相對の善悪から、絶対の善、つまり慈悲、愛に至るように努めることが大事であり、それにはどうすればいいか、いかなれば其の菩提心に至るにはどうすればいいかなれば、それは中道において、ほかにはないということです。

善悪の尺度は、通常は自分の都合から発しています。自分の都合とは自己保存です。これでは慈悲とか、愛の心を知ることができません。そこでひとまず自分を傍らにおいて、客観的な立場から物事を見ることが其の菩提心を発見する近道なのであります。煩惱即菩提という言葉は、こうした立場から初めて真にその意味を持つてくるのであり、悟りの境地も煩惱を超えることによつて得られるものなのです。

さて、本題に入りましょう。調和とは、神の心を自らの心とした調和の生活です。大自然は、そうした調和の姿を示しています。

もしも、太陽が西から昇り、昼夜の別が反対になったならば、地球は想像もできないような天変

地異に見舞われ、人間は、宇宙空間にほうり出されてしまいます。地上の生活は、一瞬のうちに崩壊して、この世の終わりとなるでしょう。

人間をはじめとした地上のすべての生物は、大宇宙の狂いのない調和があればこそ、麥わりなく安定した生活がおくれるのです。それなのに、雨が降ったといつては怒り、風が吹いたといつては、天を呪います。

与えられた環境にたいして、人間はまず、感謝することが大切でしょう。

信心のはじめは、感謝の心からです。自然の環境に対して、無条件で感謝できるならば、生きているそのこと自体に、無上の喜びが湧いてきます。雨が降ろうと、風が吹こうと、大自然の調和と恵みを理解すれば、怒りや呪いは出てきません。

雨が降り、風が吹くことよつて、大気は浄化され、植物が育ち、明日の生命、明日の生活が約束されてゐることを知れば、大自然のこうした、はからいにたいして、感謝の心は湧いても、文句などは出ないはずですよ。

人はまず天にたいして感謝し、地上の環境についても、感謝すべきですよ。

現在、自分がここに在る、この現象界に生を得たということは、だれの責任でもなく、いわば自分自身が求めたその結果として、在るわけです。

そのわけは、人間は自ら意思し、考え、行動するように出来ているからです。他人のせいではありません。大事なことは、この世の誕生は、だれもかれもが、約束手形を発行し出て来ているということです。すなわち、今日よりも、明日のよりよき運命を約束されて出ているのです。あの世で学んだことを、この世でおさらいする。おさらいがすめば、さらに一段と上に進むのです。

人間の生命は、転生輪廻という螺旋階段を一步一步上にのぼるようなもので、上にあがればあがるほど、その人の運命は、よりよく開かれてゆきます。恵まれてゆきます。

しかも、この世の修行は、あの世の何分の一、何十分の一も少なくて済みます。

現象界に生まれ、肉体を持ったその意義は大きく、その人の魂にとつて、またとないよき修行の機会を得たわけです。

この意味から肉体先祖はもちろんのこと、両親にたいしての報恩感謝は当然のことといえるわけなのです。

この世に人類が生存するかぎり、肉体先祖への報恩供養、両親にたいしての孝養は人倫の道であり、どのような時代がこようとも、永遠に変わることはないのです。

また、人間がこの世に出て、肉体を維持できるのは、万生を含めて動、植、鉱物のエネルギーのお蔭であり、これについても感謝の心を忘れてはなりません。

健康で食がすすみ、毎日が元気で過ごせるのも、こうした万物の恵みがあつて初めて可能なのです。

食物も生きています。感謝の心を持つてこれを扱えば、その食物は滋養となつて、血や肉となつて健康を維持してくれます。

反対に、ぜいたくをし、年中不満の心で食する場合は、食物もその人を嫌い、栄養にはなつてくれません。

物を大事にし、いつくしむ人には、万物は喜んでその人に奉仕してくれます。

感謝の心は、感謝になつてかえつてくるのが循環の法則だからです。

人間には肉体のほかに、意識というものがあります。すなわち精神であり、心です。

心配ごとや、勉強などの精神労働にたいして、そのエネルギーの補給は睡眠によつて得られます。

さらに、もつと大事なことは調和です。

神の心を自らの心として、調和の毎日ですることができれば、その意識は、常に健全に保たれ、

精神活動にたいするエネルギーの限らない補給が続きますから、ふつうの何倍ものエネルギーを消費しても疲れを知りません。

精神エネルギーの源は神仏の心であるからです。

人間は神仏の子です。神仏に目を向け、調和の心を忘れなければ、神仏の保護をうけるのは当然ではありませんか。

神仏に目を向けるとは、自分自身にウソのつけない善なる心を信じ、ウソのない毎日の生活を続けることです。

自分の心にウソがつかないのは、自分の心の中に、神仏の心が宿っているからです。

信心とは、自分の心を信じ、信仰とは、その心で日々を進行ことです。大自然に調和し、肉体先祖、両親にたいしては報恩し、万生万物には感謝する。この心を忘れなければ、人間の精神は健全に保たれ、肉体も健やかにあります。

肉体がすべてだという誤った考え方は、決してしてはなりません。

肉体は精神の乗り舟であり、大宇宙は、すべて、心を中心にして成り立っていることをあらためて認識しなければなりません。

調和の心とは、神仏の意を体した守護・指導霊の惜しみない光をうけることだということを、この際、肝に銘じておいてください。

己の肉体が苦しめば 心 悩乱し、我が身楽なれば 情欲に愛着す 苦楽はともに

正道成就の根本に非ず 苦楽の両極を捨て 中道に入り 自己保存 自我我欲の煩惱を捨てるべし

肉体と精神というものは、通常は不離一体です。

つまり、人間の肉体は、光子体という意識体によって活動しています。細胞の新陳代謝は、光子体の絶えざる活動によって行われるもので、もし、光子体が肉体から離れると、いわゆる死という現象になります。

それ故、肉体が痛むという現象は、肉体に密着している光子体が痛むわけです。

肉体と光子体は、神経繊維によってつながっています。神経の通らない肉体は、単なるモノにすぎません。戦争や交通事故などによって、腕なり足の神経組織がこわれ、その組織が寸断されたとしますと、その腕なり足は、外傷をうけても痛くも、かゆくもありません。やがて腐つて役に立たなくなつてきます。

また、足や腕を切断し、義足や義手をはめながらも、その足や腕がムズがゆいことがあるという事実は、例え肉体はなくなつても、光子体の足なり腕の部分は切断されることはないということを示しています。

人間には、このように光子体というもう一つのボデーを持った意識体があつて、それが、肉体を動かしているわけです。

さて、肉体と光子体の関係について、もう少し、つつこんで考えてみましょう。

人体の生活機能はなんによつて行われているかといえば、医学的には、植物性神経と動物性神経の二つが支配しているといわれています。前者は自律神経といつて、人の意思に関係なく、日夜活動している神経です。胃腸、肝臓、心臓などの働きは、みなこの自律神経が司つています。

一方、動物性神経といわれるのは、脳脊髄神経です。これは、運動、感覚作用などの働きを司つています。

恐ろしいものをみて、足がすくむ。美しい花を見て、心が和むのは、脳脊髄神経の働きといわれています。

二つの神経組織は、全然別々の活動をしているかにみえますが、気がイライラしたり、心配ごとがあると、胃腸の活動は弱まります。逆に、大いに笑うとお腹がすいてきます。

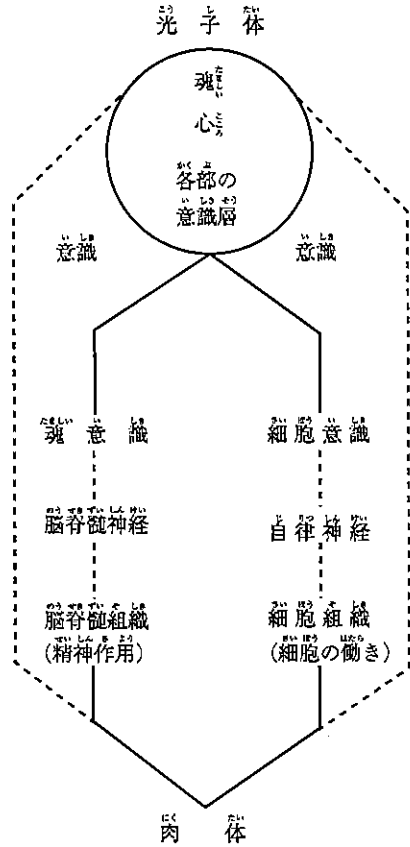
つまり、脳脊髄神経の働きは、自律神経に大いに影響を与えているわけです。両者の関係は、それぞれ別の機能を持つて動いています。自律神経は脳脊髄神経の傘下にあるといえます。たとえば、こわいものをみて、気絶し、そのまま死に至ることが間々あるからです。これは、自律神経も

同時にその活動を停止することを意味します。

病気は、文字通り、気の病いです。が、肉体の過労によつて自律神経の活動が弱まり、内臓が悪くなることもあります。暴飲暴食による胃腸病、運動不足、太りすぎによる心臓病、過激な運動によつて肺を悪くする。こうした肉体そのものの病気もあるのですが、しかし、これとても、やはり、本人の心がけ次第であり、病気の原因をたどつてゆくと、やはり、気の使い方、帰着してくるのです。つまり、自律神経を弱まらせる、あるいは、固有の細胞意識を弱体化せしめる精神作用をしていたがために、病気をつくつたわけです。

では病気は、気の病いというが、それは脳脊髄神経の働きに間違いがあつたために、そうなつたのか、ということですが、実は、脳脊髄神経そのものに原因があるのではなく、既述した光子体のなかにある各人の魂の所在に原因があるのです。

注 点線の部分が光子体と肉体の接点



ふつうは肉体そのものが人間とみられているが、人間を分割すると肉体と光子体に分かれ、その中間に脳がある。そしてこれら三者を結んでいるものが神経である。上図はその関係を示したもので点線の部分が接点である。

脳脊髄神経は、魂の命令をうけて作動する組織体です。脳そのものは、命令の執行者ではなく、命令をうけて、各方面に働きかける代理人にすぎません。科学的には、電算機です。電算機を動かす者は人間です。魂です。この魂の在り方が、その人を病気にしたり、健康にしたりするわけです。二つの神経組織は、人間の魂によって動いているのです。厳格に言えば、各人の心、想念の在り方によって、二つの神経組織がより強靱になったり、弱くなったりするのです。

人をよせつけぬ自我の強い人や、欲望にふりまわされる人。いかり、そねみ、ねたみ……、こう

した想念は、病氣の原因をつくり、事故を招き、環境の不調和をつくってゆきます。そうしてこうした想念と行為が、病氣となって現れた場合は自律神経を弱まらせ、肉体細胞の運動を不活発にしてゆくのです。もちろん、脳脊髄神経の働きも、円滑にゆかなくなり、精神病の原因にもなつてゆきます。

人体の構造を図説すると前ページのようになります。

この図で光子体と肉体の關係が明らかになつたと思ひます。

これはひらたくいえば、肉体の機能と同じような肉体（光子体）が、もう一つあつて、その肉体が、現実の肉体を動かしているといふことです。

ここで魂についてふれますと、魂といふものは、本来、光子体（意識体ともいふ）全体をいいます。心の面からいいますと、潜在意識、想念帯、表面意識を含めていいます。

しかし、狭義には、表面意識と想念帯をいいます。潜在意識は、神に通じた意識層ですから、ここは神の子である自分自身のある場です。

ひつうは、表面意識と想念帯によつて、人それぞれの魂を形作つていいます。したがつて個性を持つています。

表面意識とは、五官による意識層です。想念帯は、その五官から得た想念と行為の一切を記録し

た意識の層です。同時にこの層には、前世、過去世、あの世の記録も含まれており、人はこの二つの意識の働きでふつうは生活しています。したがって、人それぞれの魂の姿は、この二つの意識の働き具合で、なされているのです。

魂の純化は、光子体の純化であり、それはまた、肉体の純化、環境の調和につながってゆくわけです。

さて、心行に「己の肉体が苦しめば、心悩乱し」とありますが、人間は、肉体と精神を切り離して考えることは不可能です。肉体的苦痛は、精神的苦痛につながってゆきます。肉体の苦痛は、光子体の苦痛であるからです。健康状態は光子体の健康を意味します。ですから、肉体的に苦しいときは、精神も一緒になって苦しんでしまいます。

行者といわれる人は、強靱な精神をつくるため、敢えて肉体行を重ね、火や針の痛みにも耐え得る訓練をします。そうして、普通人のできないような離れ業がやれるようになります。

人間は意思の力で、こうした苦難に絶え得る精神を養うことができますが、この場合は、大抵、その人の表面意識があつた世の悪霊に支配され、痛み、苦しみの感覚がマヒしてしまっていることが多いのです。

精神と肉体というものは常に不離一体をなして息づいています。肉体の苦痛は心の苦痛につなが

り、心の悩みは、肉体細胞の活動を弱めてゆきます。たとえば、ある仕事をいつまでに為しとげねばならないとする。その目的のために肉体を酷使する。夜の二時、三時まで仕事に精を出す。気が張りつめているときは、肉体の疲労はあまり感じません。しかし肉体には肉体を維持する最低の条件というものがありません。むろん、人によって個人差はあります。しかしそれにも限度というものがあ、り、やがてその人は仕事の目的とひきかえに病氣という結果を生み出してゆきます。目的を果たした後の病ならまだ救われるでしょうが、果たす前にたおれたら、後悔が先に立つのみです。肉体には運動と休息が必要なのです。精神もむろん同じです。人間をはじめとしたすべての生物は、運動と休息の相関関係によつて生活してゆくものであり、肉体はこうした原則によつて維持されていきます。昼間は体を動かし、夜は休息をする。こうした原理原則を無視して、心が先走り、ある目的のために肉体に休息を与えないようなことをすれば、肉体細胞は新陳代謝を弱め、やがて病氣の原因を生み出してゆきます。

また、肉体保存のみに意をそそぎ、精神活動をおろそかにしますと、精神は退化し、さらに肉体的にも衰弱してゆきます。

たとえば適度の運動もせず、暖衣飽食をしてゆきますと、肉体に抵抗力がなくなり、ちよつとした風邪でも大病を誘発してゆきます。

仕事という緊張から離れ、残る人生は恩給で暮せるといふ、ホツとした定年退職者が一、二年のうちには他界するという例は少なくありません。

適度の精神活動と適度の肉体運動は、健全な精神と肉体を保持する上に欠かせない原理なのです。そうしてこの原理は私たちの生活環境についてもあてはまることなのです。

経済的に非常に苦しい、あるいは経済的に非常にめぐまれているという極端な環境のなかでは、人間はどうしても自己を発見することがむずかしいものです。お金がたくさんありますと、人間はつい好き勝手なことをし、わがままになります。

反対に貧乏をし、明日のパンにも事欠くような状態ですと、他人のことなど構ってはいられなくなり心まで貧しくなります。

昔から氏より育ちといわれますが、このように環境によつて人間の性格の形成は大きくかわつてゆくものです。

数千年前、古代エジプトの地に、モーゼという人は、奴隷の子として生まれましたが、王宮にひろわれ育てられました。そうしてここで知と仁と勇を養つてゆきます。

長ずるにしたがい、支配者と被支配者の矛盾を強く感じ、奴隷解放のために、まず自分自身が奴隷のなかに身を投じてゆきました。そうして奴隷の苦しみを身をもって体験し、奴隷解放に決然と

立ち上がっていったのです。

もし、モーゼが王宮にひろわれることもなく、奴隷の子として秘かに育てられていたならどうなったでしょう。運命の子モーゼの、旧約聖書に書かれてあるような、あの華々しい後半生もだいぶ変わったものになっていたことでしょう。

しかし王宮にひろわれることにより、奴隷では学び得なかつた文字を習い、品性を陶冶し、体制の裏側を知り、社会全体を見渡せる素養を身につけていったのです。

勇者モーゼは、やがて自分が奴隷の子であることを知り、奴隷制度の矛盾に目をひらいてゆきます。かくしてエジプトから六十数万の奴隷を解放することに成功して、安住の地をめざして四十数年にわたる長途の旅にのぼってゆきます。

このように人は環境によつて、物の見方、性格、心の持ち方が大きく影響されてゆきます。

正道成就是、苦楽の両極の中から得ることはなかなかむずかしいものです。どうしても自我の渦中に陥ります。

中道の心がわかつていれはいいのですが、中道の心は、求めれば求めるほど、実に奥深いものです。それだけに、毎日の実生活のなかにあつて、常に反省という行為を忘れず、精神と肉体の調和、環境の調和というものを心がけることが必要なわけです。

ここで中道について考えてみましょう。

中道とは、文字通り真中の道であります。真中とは、いわば円の中心、扇の要です。

この世は、天地、男女、善悪、美醜、というように、すべてが相対的にできており、そうして、人はその相対の中にあつて魂を磨くようにできています。

したがつて、魂を磨くというプロセスからみれば、相対の世界はまたとない修行の場になるわけですが、しかしその中に沈みつ放しではこの世に生まれ出た意味を知らないままにあの世に舞い戻つてしまいます。無常の現世を体験することにより、相対の苦界から脱け出す工夫が必要であり、そのために人間は現象界にあるのです。それではどうすればよいのか。この点については煩惱即菩提のところの説明したように、自我にもとづくものの考え方をまず改めなければ中道の心はつかめません。

ものの正、不正や善悪というものは、客観的な立場に立たないと正確に判断することはできません。よく喧嘩両成敗とか、泥棒にも三分の理といわれるように、正と不正、善と悪の区別はなかなかつけにくいものです。

一応今日の社会は法律によつて、人のものを盗むことは悪い、人を助けることは善い、ということになつていますが、国と国との争いになると、こうした人間としての本来の理念から離れ、国民

の利益、民族の興亡の是非が尺度になつてしまします。

また私たちの一人一人の日常生活における善悪、正、不正の尺度というものも、理念よりは、自分の利益、家族の幸福が先行していきます。理屈はどうあれ、自分をほめてくれる人は善い人であり、自分を罵倒する者は悪者だというわけです。

このように私たちの日常なり、国と国の関係はこうした自分のつごう、自己保存によつて動いており、善悪、正、不正の規準は、まったくバラバラであるというのが現実です。法律はあつても、法律以前の個々の自己保存の感情によつて、善悪を決め、正、不正をはかつています。

これでは中道の心はわかりません。中道の心は、自我の自分を離れて、客観的な立場に立たなければ見出すことはできないのです。

それには、常に白紙になれる自分であることです。知識や経験によつて頭の中にいろいろなものがつめこまれています。こうした知識や経験というものを、ひとまず傍らに置いて、自分の姿というものを他人の立場で眺めてみるのが大事です。個人個人の知識、経験などはたかがしれています。そういう浅い狭い尺度でものをみてしまうと、自分の立場もわからなく、状況判断も狂つてきます。

中道の心とは、裸の心、私心のないことです。神の尺度です。神の尺度に立つたときに、初めて、

正しい判断がなされ、精神と肉体、環境の調和というものが生まれてくるのです。

正道成就は、中道の心を目的としたためまざる反省と行爲によつて達成されてゆくものです。

一切の諸現象に対し 正しく見 正しく思い 正しく語り 正しく仕事をなし 正しく生活し
正しく道に精進し 正しく念じ 正しく定に入るべし

中道の道を歩むために、では具体的にどうすればよいのでしょうか。それは、中道の心と生活を規範とする八正道を實踐するしかありません。

正しく見る、思う、語る、の三つの精神作用は、人間がこの世で生活する上に、もっとも大事な、そして、基本的なものです。

天台大師は、これを、見ざる、聞かざる、語らざる、の三猿になぞらえ、煩惱遠離の基本的条件にしています。

煩惱という迷いは、見たり、聞いたり、話したりすることから生じることが多いからです。それ故に、煩惱を滅するためには、眼、耳、口を閉じよ、といつているわけです。

しかしそのいわんとする狙いはどこにあるかといえますと、正しい精神作用を通じて、現実社会の中で、正しく行なえ、ということなのです。天台大師はこれを、煩惱を閉じよ、と表現したわけなの

です。八正道はいわば、在家の行ですが、天台大師の三猿の喩は、いうなれば出家の行にあたるでしょう。

天台大師がいうように、この三つは、煩惱を生じせしめるもつとも危険な精神作用であり、人間の弱さがここにあるわけです。だからこそ、まず、この三つを、八正道の冒頭にあげ、「正しく見る」とは、心の眼で見よ、「正しく思う」とは、頭で考えず、心で考えよ、「正しく語る」とは、心で考えたことを語るようにせよ、といつているのです。

心とは、意識の中心であり、意識の中心は自他の差別観のない善なる心です。さて、それでは八正道について説明しましょう。

八正道の目的は生老病死の迷いを消滅させ、正法の精神である慈悲の心と愛の行為が自然に行なえるようになることであり、それはまた中道の心の具現にあります。

中道の心がなぜ慈悲と愛につながるかというと、中道は、すべてを生かす道だからです。生きとし生けるものを活かすつづけるものは神の心であり、私たちがこの地上界に生活できるのも、大地が在り、水が在り、空気が在り、そこに太陽の熱光が常に放射されているからです。

こうした自然界の生命を育む条件というものは、自然界そのものが常に、右にも、左にも片寄らない中道の道を歩んでいるからです。

たとえば、私たちが吸っている空気の総量は常に一定に保たれています。全体が増えたり、減ったりはしません。もし空気が増えたり、減ったりするならば、人間を含めたあらゆる生物はこの地上に生存することができないでしょう。

太陽の熱・光についても、時には強くなったり、弱くなったりすればどうなるでしょう。生物は生きて行けません。草木も太陽の熱・光が強烈に照りつけるならば焼きつくされてしまいます。反対に弱くなれば氷河時代が再来し、これまた生物の生存は許されません。

このように、自然の条件というものは、常に中道の道を歩み、それによって生きとし生けるものを生かすつづけているのです。

したがって、中道の道は万生万物を生かす働きであり、それはとりもなおさず慈悲と愛の心の現われということになるでしょう。

八正道とは、この大自然の中道の精神、慈悲と愛の具現であり、私たちの生活も、大自然の心から自らの心とした生活によって、はじめて、安らぎある調和へと導かれるわけです。

さて、それでは安らぎある生活とはどういうものをいうのでしょうか。

しかし、その前に、安らぎのない生活とはどんな生活を指すのでしょうか。

すでに述べて来たように、それは煩惱という迷いの心、執着の心が強くなると、不安と混乱が巻

き起こつてきます。

迷いや執着というものは、肉体・五官に心がとらわれるから起こつてきます。各人の意識がその乗り舟である肉体・五官を通して、ものを見、ものを感じ、ものを思うために、人間は知らぬ間に肉体保存を根底とした、見方、思い方、行動を起こしてしまいます。しかし、肉体がなければこの地上の生活は営めません。問題はこれにとらわれるから執着になる、ということなのです。

肉体を大事にすること、肉体に執着を持つことは、同じではありません。

執着とは自己本位、ご都合主義、我欲です。人はどうでも自分さえよければいい、というエゴが執着の想念です。

肉体を大事にするということは、もともと肉体は両親からいただいたものであり、また両親はその前の両親からいただいで……と、そうして、順次さかのぼつてゆくと、私たちの肉体は、もとは神から与えられたものであるからです。

このように、肉体は自分のもののようでも、実は自分のものではないというわけです。借り物である以上は、これを大事に扱うのは当然ではないでしょうか。

執着というものは、神から与えられたその肉体を自分のものと思ひ込み、他と自分との差別意識が生んだ悪の想念なのです。

こうした想念に心がゆれてくると、人を憎み、怒り、そねみ、足ることを忘れた欲望にふりまわされ、やがてそれは自閉症、ノイローゼ、精神病にも発展してゆきます。

これでは安らぎある生活とはいえません。安らぎある生活とは、ものに執着しない生活なのです。ものへの執着心が少なくなればなるほど、安心の境地にのぼってゆきます。

人が困っているのを救ったとします。そのことをあなたはどのように感じますか。

反対に、人が困っているのを見て、あざ笑ったとします。おそらく、その人は修羅の心で自分身さえ分からなくなり、心は安らぎを失っていることでしょう。

愛の行為は人間の本性なのです。それは、執着から離れることによって、ますます大きくなってゆくものです。

中道の道とは、自分を愛し、他人をも愛することです。自分を愛することは執着ではありません。神性の自分を自覚すると、自分を愛さずにはいられなくなるからです。

人の心は人類の数ほどもあると思うでしょう。しかし、人の心は一つしかありません。

映画や芝居を見、小説を読んで、あなたは悲しい場面で笑いますが、楽しい場面で泣きますか。ちがうでしょう。人の心は一つに結ばれているからです。

自分を愛するとは、すなわち人を愛することなのです。

他を生かし、自分も生きることなのです。

心は一つですから、自己愛は、利他愛につながらなければならぬ性質を持つものなのです。

苦しい、悲しいという心は自己本位の我欲が先に立つのでそうなります。自己本位の我欲は、一方が楽しいときは、一方が悲しいときです。この地上に争いや混乱が絶えないのも、こうした相対的な心が支配するからです。

中道とは、相対の考え方、思い方から離れることであり、みんなが楽しい調和された生活ができるような道です。

八正道の一つ一つの規範は、大自然が教える法の在り方、中道の生き方を教えるものです。

めぐみを与え、悲しみを取り除く慈悲の心で、他を生かし、助け合う愛の行為を行うことが中道の道であり、八正道の目的です。

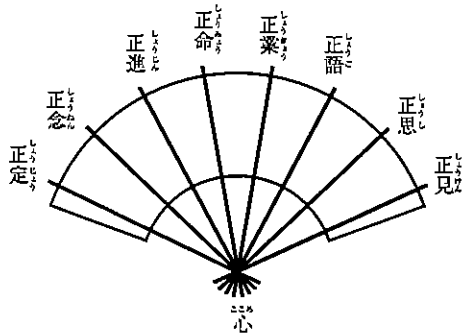
八正道を毎日の生活に活かしてゆきますと、心のさまざまなきがわかり、やがて人の心の動きも分かるようになって来ます。

これを如心といえます。

如とは法です。法とは正法です。正法とは、大自然の正しい循環の姿です。

人を憎めば憎しみが返ってくる。善を思えば善が返ってくる。

八正道



己の心信じ神仏の心を
心とする反省の生活の実践

八正道とは八つの規範に別れていますが、その一つ一つは、すべて己の心に問う、聞くことが大事です。ですから扇の要を心としたのです。(無断転載禁ず)

作用と反作用の物理法則は、万生万物すべてに働いています。

したがって、正法を行ずるとは、善を思い、善を行う生活です。すなわち、慈悲の心で愛の行為をすることが、正法にそった生き方となるわけです。

法は神の心を軸として動いているので、法を理解することは神の心に近づくことであり、それはまた、人びとの心を理解することにつながります。

したがって、八正道を行じ、如心の境地に達すると、人の心が手にとるようにわかってしまうよう

になるわけです。

如心に至ると、守護・指導霊、そうして、神の光が放射されてくるので、心は安らぎ、智慧も湧

いてくることになりす。

そうすると、物事におびえ、恐怖におののくこともなくなり、正法の恵みというものを、真に会

得することができるようになります。

八正道には、そのような功德があるのです。

八正道を日常生活に活かしてゆこうとするとき、努力と勇気が必要となります。それは反面からいえば苦痛かも知れません。

正法は自力であり、善なる正しい心で生活してゆこうとするものですから、強い意志が必要になってきます。本来は、そのような強い意志は必要ないのですが、これまで旧来の習慣や思想の中で生活してきたのですから、いわば、その軌道修正のための、強い意志が必要になってくるのです。真に、あなたが自身が安らぎを求め、人びととの調和ある生活を欲するならば、八正道を實踐してみることです。

八正道を体得することによって、あなたはこの世だけではなく、この世の十倍、二十倍の長きにわたる、あの世での安らぎある生活が保障されるでしょう。

疑わず、まず実践してみることです。

八正道を学ぶことは、すなわち、法を学ぶことです。すべてのよりどころは法にあることを確信することが肝要です。

正しく見る (正見)

正しきの規準は何かといつと、「公平」であるといふことです。

ではその公平はどのようにして得られるか。

それは、常に第三者の立場に立つて、ものを見ることです。自分中心にもものを見るから、そこに偏見が生まれ、邪見になつてゆくのです。

すなわち、正見の反対は邪見です。邪見は心のわだかまりであり、自我我欲、自分中心から生まれま

れます。
心のわだかまりはどうして生じて来たのでしうか。

それは、これまで生活してきた環境、習慣、教育、思想などによつて毒されてきたためです。

したがつて、ものを正しく見よう、公平に見ようとするには、これまでの既成觀念を白紙に戻し、全く、新しい立場から、ものを見るよう努めることです。

(例) 感謝について

年が進むにしたがつて、ものに感謝する心が失われてきます。すべてが当り前に動いており、感謝や、感動の心は湧いてこなくなりま

す。
しかし、ものに感謝できない心は、もともと、どの辺りから生じてきたのでしう。誰しも子供の時代がありました。子供のときは両親から可愛がられます。両親は子供のいうことなら大抵の

ことはきいてくれます。近頃は過保護となり、親は子供のこととなると夢中になってしまふようです。

両親は大抵のことはいうことをきいてくれる、わがままを通してくれる、ということから、子供の心は成長するにしがたい、次第に、ものに感謝する心を失ってゆきます。

学業を終え、社会に出て、仕事をするから給料をもらうのは当然だ、課長は係長より余計に給料を取っているから、それだけ働くのは当然だ、ということになってゆきます。

こうして感謝の心は一向に芽生えてこないわけですが、そのもとをたどると、子供の頃のわがままが、大人になつてもつづいていくからです。

これでは感謝の心がよみがえってきません。

この地上界は、お互いに、助けたり、補い合うことによつて成り立っているのですから、感謝の心というものは、人間にとつて非常に大事なものであるのです。

感謝は謙虚な心をつくり、やがて、愛の心をも育てるものです。正法の出発、そして終点は、ものに感謝することにあります。

すべてが当り前で、当然、という見方をしているは、「正しくものを見る」ことにはなりません。大事なことは感謝です。感謝が基礎にないと、ものの見方は偏見を伴つてくるでしょう。

このほか、親子の問題、夫婦の問題、社会生活の問題、いろいろその例題は尽きませんが、正し

い見方みかたというものは、具体的くわいてきには現あらわれているさまざまな事柄ことばらを深く掘り下げ、物事ものごとを正しく認識にんしきすることから生うまれてきます。

公平こうへいな見方みかたは、そうした認識にんしきから生うまれ、正しい見解けんかいに至いたるわけです。

この地上界ちじょうかいの事象じじょう(現あらわれているさまざまなできごと)は、すべて、人の想念そうねん、心の動きこころごぎから生うじており、現あらわれの姿すがたはその結果けっかなのです。ですから、ものごとの原因げんいんは、人の心こころにあるのであつて、現あらわれているさまざまな現象げんじょうは、原因げんいんではなく結果けっかなのです。

したがつて、結果けっかだけをとらえ、あれこれ判断はんだんすると、間違まちがいのもととなります。まず、現あらわれている結果けっかを見たらば、その原因げんいんについて、掘り下げてゆくことが「正見せいけん」のポイントです。

正見せいけんの目的もくてきは、物事ものごとの正確せいかくな判断はんだんであり、そうして、それにもとづく正しい見解けんかいを持つことです。以上いじょうを要約ようやくすると、

- 一、まず感謝かんしゃの心こころをもつこと。
- 一、事象じじょうの一切いっさいの原因げんいんは人の想念そうねん、心こころにあつて、現あらわれる世界せかいは結果けっかである。
- 一、既成観念きせいかんねんを白紙はくしにもどし、物事ものごとの真実まじつを知しるようにする。
- 一、正見せいけんの反対はんたいは邪見じやけんになります。常に第三者だいさんしやの立場たちばに立つて、自我じがの思おもいを捨て、正しく見みる努力どりよくをすることになります。

正しく思う (正思)

正しく思えないのは、正見でみたように、自分の心にわたかまりがあるからです。怒りや憎しみ、しつと、愚痴、欲望がありますと、心がそれにほんろうされ、正しく、ものを思うことができなくなります。

正しい思いとは、慈悲と愛しかありません。

これ以外の思いは、すべて、自我からきています。

怒りの感情や本能的な欲望、また知におぼれると、冷たい人間になつてゆきます。

理性は経験を基礎としていますが、経験だけに頼り、ものを知る知性の働きを無視すると、人を納得させる深い智慧は浮んできません。

意志は、弱くても、強すぎても困ります。弱ければ、くるくる変わるし、強いと頑固者になります。はがねのような、強靱な意志は、心の機能が全体的に働き、十分にゆきわたつて、はじめて、その力を発揮します。

心が丸く、大きく、豊かであるといふことは、まず、正しく思うことから、出発します。

そうなのです。物事の始まりは、まず、思うことからスタートを切ります。

この大宇宙も、神の意思、つまり、思うことから始まりました。

人間の生活も、思うことから、始まります。

ただ人間は、五体を持ち、眼でものを見ることによつて、「思う」ことが機能化するので、八正道も、正見、正思という順序になつていますが、本来は、心が主体であり、一切の創造行為は、すべて、思うこと、考えることから生まれるものです。

人の思いは、以心伝心といつて、すぐさま人に伝わります。またあの世に対しても、同じように伝わります。

慈悲と愛の思いは、天上界につながり、憎しみ、怒りの思いは地獄界に通じてゆきます。

病氣、災難、さまざまな不幸の原因は、正しく思わない自己本位に、心がゆれているから起るのです。

正しく思うことは、正念と密接に関係し、特に重要ですから、正念と合わせて理解して下さい。

正見、正思の目的は、慈悲と愛を根底にした中道の思いにあります。

善の思いには善が返ってきます。

悪の思いには悪が返ってきます。

思いは、ものを創造する行為です。他を生かし助け合う、正しく思うことが、あなたを調和させ、

人びとを調和させる根本です。

正しく語る (正語)

通常は、思うこと、考えることは言葉になって伝わりま

す。言葉は言魂といつて、光の波動であり、光の粒子ですから、その粒子を黒い想念で汚してはならないのです。

怒りで感情がふくれ上がりますと、言葉はつい荒くなり、相手にも悪感情をいだかせることになります。つまり、光の粒子に黒い想念を付着させるからです。

それ故、正思を根底にして語ることの重要性がわかります。

言葉が足りない、言葉がすぎる、というのは、しばしば感情が入るからです。

また、誤解や不信が生じるとすれば、それは心の底に慈愛がないからです。

慈愛を根底として言葉を発するようにしていれば、誤解や不信というものはおこらず、かりに、

不足の言葉があつても、相手が補ってくれることでしよう。

そうした経験は、おそろく誰もがしていると思います。

言葉は、意思の疎通に欠くことのできない重要な機能ですが、心に愛があれば言葉以前の言葉が

相手に伝わり、こちらの意思が正しく伝わってゆくものです。

正しく仕事を為す（正業）

地上界のあらゆる生物は、働くように仕組まれています。動物も植物も、そして、鉱物さえも、この地上の生きとし生けるものに、その体を提供しています。

人間の場合も、その点は老若男女を問いません。幼児は乳をのみ、眠ることが勤めです。それによつて、やがて、成人し、次代を背負う、大事な働き手となるのです。

学生は学校で学問を学び、社会人は社会のために働きます。

主婦は家庭にあつて子供を守り、夫の仕事が円滑にゆくよう、安らぎの場を与えるものです。

安らぎの安の字は、下に、女と書きます。下なもともと家の下からきており、その下に女が加わると、安、つまり、その周囲は安らぎとなるのです。

男は、田と力が合わさつて男となります。男は外に出て田畠で仕事に精を出す。女は、家庭にあつて安らぎの場を提供します。

男性が女性に美を求めるのは、美は安らぎの象徴であり、女性が男性に求めるもの、力は、たくましさの象徴だからです。

男女の性が、それぞれ機能するところによって、人間社会は円滑に回転します。

働くということは、人間としての義務であります。

同時に、職業に就き働くというものは、人びとに必要なものを提供するを意味します。職業のない者、働くことの必要のない者は一人もいないはずで、

今日の社会生活はそれぞれがその業務を分け合い、たがいに、その生活を補い合い、助け合っています。すなわち、分業化によって、それぞれの生活を支えているというのが実情です。

私たちが仕事をし働くということは自らの生活を維持し、人びとの生活を支えることです。ですから、それは愛の行為につながるのです。

愛は他を生かすことであり、助け合うことです。

仕事をし、働くことは他を生かすことから、愛の行為なのです。

仕事をし、職業に就くことが愛の行為にも拘わらず、社会がこのように混乱するのは、仕事に金儲けの手段と考え、人はどうでも自分さえよければいいと思うのが、その原因です。

ですから、今日の多くの人びとは正しく仕事をしているとはいえないでしょう。

正業の在り方は、この地上界の調和に役立てることであり、その基礎は愛であり、奉仕の心なのです。

戦後の企業は労使の対立が深まり、常に争いと混乱が絶えません。一部の指導者や扇動者は、文明の発達と社会の進歩は、こうした闘争の中から生まれるとみています。が、とんでもないことです。人間は、文明や科学技術のドレイではありません。人間のための文明や社会の進歩であつて、進歩のために人間があるものではありません。

闘争はどこまでいっても闘争であり、平和はきません。平和のない文明ならそんな文明は必要ありません。

労使の対立が激しい企業ほど不調和であり、やがて倒産へと発展してゆきます。企業が倒産すれば労使ともども生活に困り、家族は路頭にさ迷うことになります。

労使の対立はどうして起こるか、それは、組合も使用者もたがいに自己主張してゆずらず、それが自己保存の中に埋没しているからです。使用者はできるだけ賃金を払うまいとし、労働者はより以上の賃金を獲得しようとしています。これでは両者の争いはエスカレーターせざるを得ません。

労使が裸になり、常に対話の姿勢を持つならば、こうした争いというものは起きません。

経済社会がどんなに合理化されたとしても、お互いに汗して働かなければ、生活に必要な物、つまり衣・食・住は得られないのです。

経済の合理化とは分配の公平にあるわけですが、分配の公平はまず人間尊重の対話からであり、

対話の前提は自己保存による自己主張をまず捨て、人間本来の目的と使命を自覚したところからはじまります。物事は対立を通しては、決して満足な結果は得られません。

こうした意味で、まず、人間とは何か、人間はどこから来てどこへ行くのか、ということを理解することが必要です。

人間は経済のドレイではありません。

人間は己の魂を磨くために、この世に生まれてきています。

それぞれの職業、役割というものは、そのときどきの自分の魂を磨く材料、環境であるということを知る必要があるでしょう。

すでに、これまで既述してきたように、人間の魂は転生を輪廻し、あるときは王として、君臨し、あるときは一介の農夫で身を粉にして働き、あるときは医者として人びとを救つて来ました。そうして今世は一介の労働者であり、経営者の立場に立っているわけであり、そうした立場は、己の魂をより広く、豊かに育ててゆくためのものであり、対立や争いにあるのではないのです。

人間はみな兄弟であり、友です。

こうなりますと、一つのパイ(物)をめぐる競争うことの愚が理解され、たがいに愛をもって、助け合う、他を生かすことの意義を見出すことでしよう。

こうした意味から正業とは、次の三つの目的から成り立っています。

一、魂の修行

一、地上界の調和

一、奉仕

すなわち、人間の魂（心）は転生を輪廻して行くものですから、現在の環境、立場は自分の魂を磨いてゆく修行の場です。

地上界の調和とは、そこに住む人びと、それぞれが、職業を持ち働き、自分の生活を保持し、人びとの生活を維持するということなのです。つまり、働くことは地上の調和に役立っているわけです。

次に、その調和というものは、各人が人びとに奉仕するという愛の心が根底になければなりませんし、調和は愛の心によつて支えられるわけです。

正しく生活する（正命）

正しい生活は、右にも左にも片寄らない中道にあります。

中道とは仏教でいう色心不二です。

色心不二の生活は、調和ある精神的、肉体的生活を意味する。人間の生活は、そのどちぢに片

寄つても不調和になつてしまいます。

たとえば、煩惱を滅却したいとして肉体行に打ち込み、滝に打たれ、断食をし、己の肉体をないがしろにすると、やがて健康を損ない、自分の心をも見失つてゆきます。自分を失うとは魔に犯され、普通の生活ができなくなることです。

肉体行は、精神のみにウエイトを置き、肉体を無視するところにあります。しかし、その精神についても正しい精神の在り方である、正法を規準としたものではないので、それ自体にも問題があることはもちろんです。

また、精神を無視し肉体中心の生活に比重が傾いてきますと、今日のような混乱した社会ができ、家庭も、人とのつながりも瓦解してゆきます。

では正しい生活とはどうすればよいものか、それは八正道の目的である中道を物差しとして、己の業を修正し、中道に適つた生活をするということです。

業は私たちの性格、性質の上に、その人の短所という形で現われています。人の短所は自分自身にも他人に対しても、よい結果を及ぼしません。怒り、愚痴、優柔不断、独善、気取り、強欲、中傷、そねみ、粗野、多弁、排他、増上慢

引つ込み思案、自閉、出しゃばり、憎しみ、怠惰……。

こうした性格は自分自身を孤立させ、自分の運命を不幸にして行きます。

正しい生活は、まず自分の短所を長所に變えてゆくことから始まります。

長所とは、明るく朗らかで、素直であり、人と協力し、助け合い、補い合つてゆく調和の性格です。

人間は、みなこうした心を持ち、そうした性格を持つてゐるのですが、環境、教育、思想、習

慣などの影響をうけてさまざまな業を作り出してしまつてゐます。

業が身につくと、業自体が回転を始めるため、怒りの場面にぶつかると、習慣的についカツと

なつてしまいます。

つまり、業というものも常にリンネします。『わかつちやゐるけどやめられない』というのが業な

のです。

人の欠点の三分の二は今世のもの、残り三分の一は過去世の業といつてもいいでしょう。

したがつて三分の一の業は、反省してもなかなかその原因をつかまえることがむずかしいもので

す。しかし、今世の三分の二の業が、これの影響をうけて働いてゐますので、その三分の二の業を

修正することによつて、修正することが可能です。

己の欠点を直すことは、己の安心につながることであり、己の心が安心し明るくなれば、自分の

周囲も明るくなります。

正しい生活は、こうして、まず自分自身から修正して、初めて可能なのですが、それには、八正道の規範である「正定」による正しい反省が重要になってきます。

中道に反する生活は、すべて自己保存という想念行為が原因であり、自分中心のエゴ、原罪にあるわけです。

原罪とは肉体五官による六根、迷い、煩惱にあるのですから、まず、六根を清浄にする反省の生活が、自分の業を修正することになります。

このように、正命の目的は、精神的、肉体的な調和をめざし、業と化したさまざま原罪（自己保存の想念）を正すことにあるわけです。

正しく道に精進する（正進）

私たち人間の道は、中道に沿った調和の生活にあります。

いふなれば、正しい普遍的な法にあるわけです。

法とは、循環の法則であり、循環の法はこの地上界のあらゆる面に適用されています。

正道の生活とは、この意味で循環の法に乗った生活であり、正しい生活です。正しい生活とは前

述の通り、中道の生活であり、中道の生活は、人びとをして調和の生活に導いてゆくものです。

中道の生活は慈悲と愛の生活であり、その想念行為は再び自分にめぐってくるものです。

自己保存の片寄ったひとりよがりの生活は、この地上界が相互扶助の調和を軸に動いているので、当然その反作用として、苦しみを招きます。

循環の法が働いているからです。

正進の目的は、人間関係の調和にあります。

正命の目的が自分を正すものでありますから、その次にくるものは、人びととの調和なのです。

人間関係とは、夫婦、親子、兄弟、友人、隣人、そうして個人と社会の関係であり、それは、ま

ず自分の足元から始まって、全体にまで発展してゆく調和のリズムであり、波動であります。

夫婦の関係は、たがいに足りないものを補い合い、よき子孫を育て上げてゆくものであり、親子

の関係は、過去世の縁によって生じたもので、親は子をいつくしみ、子は親を敬うのは当然な

ことです。

兄弟は、たがいに向上し合う切磋琢磨する間柄であり、友人は、社会生活上のよき協力者といえ

ましょう。

こうした人間関係の調和に一貫して貫く柱は何かという、それは他を生かし、助け合う「愛」

の心です。

愛こそ、調和の姿であり、この地上の光なのです。

この地上は、男女の両性から成り立っています。一方が増えても困るし、減つても困る。男だけでも女だけでも人間社会は成り立ちません。

考えてみて下さい。もし、一方だけが存在し、一方が存在しないとすれば、人間社会は、百年を待たずに絶滅してしまいます。これでは、この地上界に、仏国土もユートピアもできません。

男女の両性があつて、はじめて、社会生活（それはまず家庭から）が生まれ、子孫を育てることが出来ます。人類の永遠の生活は、こうした男女の両性の存在によつて可能であり、調和ある仏国土も完成されてくるのです。

男女の両性にはそれぞれ特性と役割があり、それぞれが助け合うことによつて調和されます。色心不二の中道の精神はここでも生きています。

現象界は、天地に分かれてはじめて空間が生まれ立体となり、生命の生きる場がつくられます。地球は南極、北極に分かれ、地球の自転、公転を正しく回転させ、地上の生命を育てています。人間の世界も男女の両性があつて、人間社会が永遠に続いて行きます。

調和、中道、愛、慈悲という言葉の意味を現実的に、実際にによく考えて下さい。

そして、こうした言葉が現実的に生きてくるのは、常に複数という関係の中においてです。これらの言葉は単独では決して成り立っていないことを考えてみて下さい。

正しく道に精進するとは、私たちが複数という社会の中で、他を生かし、助け合つてゆくことによつて、はじめてその意義が生まれ、本来の目的に適つてくるわけなのです。

正しく念する（正念）

正しく念じないとはどういうことでしょうか。

正念の反対は邪念です。邪念とは自分の都合だけしか考えない自己本位の想念であり、欲望の想念です。

欲望の想念が激しければ激しいほど、この地上界は混乱してきます。足ることを知らない欲望はたがいに相入れないエゴとなり、エゴは自分本位の我であるから相互協調は非常にむずかしいものとなります。

念の方向が自分本位であればあるほど苦悩が多く、心に業をつくります。人びとの心に業が多く生まれると、真実とニセものの区別がわからなくなり、地上界は無法となつてゆきます。

思うことは念によつて具体的な行為になります。

たとえば、どこどここの学校を受験したいと考える。しかし、自分の実力からしてA学校はむずかしい。ではBにしようか、Cにしようかと思案します。

この段階では、思うこと、考えることが心の中だけの話で、まだ行為にはなっていない。ところが、あれこれ考えた末、Bに決定したとします。すると当人は、Bに向かって進んで行くでしょう。つまり、受験準備という行為が始まるわけです。

念の働きは、B学校に決めた、という意志の決定なのです。

すなわち、念というものは、こうしよう、ああしよう、こうありたい、という目的意識であり、意志の決定であり、行為である、というわけです。

念によつて、私たちは、心の中で思うこと、考えることの創造行為を具体的に形に現わしているわけです。

人の思いは、あの世に通じ、人の心にも通じます。しかし、ふつう、人に通じないのは大抵は外に氣をとられ、それをキャッチしても、打消すか、忘れるか、仕事に追われているためです。

しかし、思うことを、念を通じて心に強く働きかけますと、相手によつては通ずるものです。怒りや憎しみ、嫉妬の念は、具体的にはキャッチできなくとも、その念を発した人に道などで出会うと、なんとなく敵対視してしまふ、というのがそれです。ところが、そうした念波が発せられても、

こちらに何もなく、慈愛の心に満ちていると、敵対視の心は湧いてこず、その念を発した人はかえって気まずい思いにかられることになってゆきます。

このように念というものは、具体的な意志決定とそれに伴う行為であると同時に、念そのものの働きによって他に作用を及ぼします。

念はエネルギーであり、心の中の創造行為を形に具象化して行くものです。

また、一度発した念波は、一秒間に地球を七回り半もまわる光以上の速さで自分に返ってきます。つまり、リンネします。善念は善念として返り、悪念は悪念として、もとの発信者に返ってくるのです。

ですから、常に安心した境涯を毎日の生活の上に望むならば、自分さえよければ外はどうでもという自己保存の念を改め、他を生かす、助け合いの、愛の想念、中道の法を、まず、心の中に確立させることです。

思うこと、念することは、万生万物の創造の根源であり、仕事を為し得るエネルギーでありますから、これを正すことがなをさておいても重要であるといえます。

人の幸、不幸の分かれ目は、心の中の思うこと、念することによって決定されてゆきます。

また、想念は、カルマをつくってゆきますから、そのカルマを超えるためにも、左右に片寄らな

い心の在り方が重要になります。

中道の想念は、慈悲と愛、そうしてそれは調和というバランスがとれた状態をいうわけですが、中道の極致は神の心であり、法でありますから、ここまで人の心が昇華しますと、人は苦楽のカルマから本当に解脱することができまます。

ところで、ときおり、こういう質問をうけます。

思うことは現われる、念ずるとその通りになるというが、私は金が欲しいと日頃から思い念じているが、さっぱり、金が貯まらない、これはどういうわけか、というのです。

お金が欲しい、金を貯めたいという欲望は大抵の人がそれを思い念じています。念は人によって強弱がありますが、みんなが同じ物を念じますと、その念はぶつかり合い、交錯してゆきます。そうして、やがて交錯した念は、強い念に弱い念が吸収され、強く念じた人に集まります。つまり、それを望む念の強いところに金は集まってくることになります。

お金が集まるもう一つの理由は、人にはそれぞれ今生での目的があります。それは本人の今生での意志とは関係なく働きます。今生の目的が経済的問題よりもむしろ人を救うことにあるとすれば、その目的を外れた意志をいくら強くいだいたとしても、お金は集まらないといふことになります。

こうした意味から念の作用は、その人の今生での目的と合致したときに、もつともよくその効果

を現わし、最大に發揮されます。

金が集まらないと愚痴をいう前に、人も欲しがるお金（お金は有限）を集めれば、集めただけその反作用もあるということを考えて下さい。いつときの悦楽を求めることと、長期間にわたる苦悩を考ふるならば、もともと一定限度しかない物を奪い合う愚かさには気付くと思います。

一事が万事、何事によらず、このように考えていけば、念の作用はどのようなものであり、念はどのように使えば正しく行使できるかということが、おわかりになったと思います。

正しく定に入るべし（正定）

正定とは、反省をいいます。

私たちは、自己反省を通して、ものの道理が理解され、同じ間違いの愚かさから解放されてゆきます。

反省こそ、神が人間に与えた慈悲であり、愛の能力といえましょう。

動物にも本能・感情がありますが、反省という理性の能力、知性の働きは、人間を置いてほかにありません。

この意味で、正定の反省は、人間だけに神から与えられた特権であり、その特権を生かしてこそ、

進歩があり、無限の調和に向かうことができるのです。

反省は、正見、正思、正語、正業、正命、正進、正念の七つの規範について、行います。

中道の尺度を持つて、今日一日をふりかえり、ものを正しく見たか、思つたか、語つたか、働いたか、生活したか、念じたか、友をいたわつたか、と反省します。

人の個性と業というものは、一見似ているようだが、ちがうのです。しかし、その個性と業というものが、日常生活の上に非常に大きく影響しており、したがつて、その個性と業のちがいを、まづ発見する努力、そして反省を試みたいものです。

それにはまず、ずつとさかのぼつて、一才から十才、十才から二十才、二十才から三十才、三十才から四十才、というように、年代別に自己反省をしてゆきますと、自分の業はどのようなものであり、全体の中での自分の在り方、自分の役割が明らかに become と思ひます。個性というのは、ここでは、人それぞれの持味、特性、そうして、ここから生ずるその人の人格、役割を指します。

年代別に反省をしていきますと、人それぞれの性格が、大体、三才頃から十才ぐらいまでに、ほぼ形づくられてゐることに気がきます。

たとえば、仮に、短気の性格があつて、人を傷つけ、対人関係、仕事上の関係、家庭の關係の中で氣まずい思ひをし、それが原因で、折角のチャンスをはたしてしまふという場合も、短気の性格

をつくつた年代は大體、この頃が多いのです。

末っ子で育ち、周圍からチャホヤされると、知らぬ間に我儘が身につきます。自分の主張は家庭では大抵通つてきたとしますと、さて、成人して社会に出ると、社会は家庭とはちがひ、そうそう思い通りには運びません。自分の希望が適えられなくなれば、心の中は平安ではありません。子供の頃の我儘は、最初は身近な家庭で爆発し、家の中でどなったり、夫婦ゲンカになつたりします。うつけきした気分は、こんどは対人関係や仕事上の関係まで発展してゆきます。

こうみてきますと、短氣の性格は、自分の我が思うように通らないときに起こるものであり、それは子供の頃のチャホヤ育てられた我儘の生活に原因があつた、ということなのです。

もちろん、人によつて、その短氣の性格が二十代、三十代につくられる場合もあります。両親に早く死に別れ、子供の頃に非常に苦勞する。あるいは家が貧しいために苦勞する。二十代、三十代でその苦勞が実を結び、やること、為すことが図に當つてきますと、人のやることがまどろっこしく、ついでとなり散らしてしまいます。若いうちに苦勞した中小企業のワンマン経営者にこういうタイプが多いのです。原因は、二十代、三十代にあります。しかし、これでも反省をして行きますと、小さいときの苦しみが身につく、人をそねみ、うらみ、憎しみの心が内在しており、成人してから、それが短氣という形で變化して出る場合があるからです。

苦勞して成功した人は、人を信じないことが多いのです。家庭の愛情生活が不足していますから、どうしても孤独になり、自分の意見を押しつけたり、短気という性格になりやすいのです。

このように、短気という性格一つとっても、人それぞれその原因は異なりますが、年代的に見るとたいていは、子供の頃につくられ、成人するにつれ、さまざまに枝葉となつて変化していることに気がきます。

業というものは、自分自身にとつても、人にとつてもプラスになる面が少なく、いわゆるその人の欠点、短所という形で現われています。

業は、もともと執着の想念であり、それは家庭の環境、教育、思想、習慣、友人などの影響をうけて、つくられてゆきます。

食べ物一つとっても、業となり、その人の性格を形づくつてゆきます。

たとえば、肉食は血液を酸性にし、寿命をちぢめる原因をつくる、だから、植物性のものしか食べないとしますと、世間の見方、人の見方、そうしてももの価値判断が、自分でも気付かぬうちに偏見を持つようになります。つまり、これは良い、これは悪い、というように、物事を簡単に割り切り、断定するようになって行きます。

良い、悪いの判断は大事なことです、それが自分だけの浅い経験を土台にしている場合、自分

には当てはまっても、人には当てはまらないという場合が多いものです。

イエス・キリストは、肉類も結構食べたし、酒も強かつたようです。

釈迦も、食べ物にこだわらず、出された物は何でも食べたものです。

食べ物は何でも食べよといっても、現在、病氣の人、肉体的に欠陥がある場合は食生活を規制しなければなりませんので、そういう人の場合は別です。

いずれにせよ、人の性格、業というものは、私たちの生活環境によつて、知らぬ間につくられます。その中でしか自分を見出すことができないとすれば、魂の前進はあまりはかばかしくゆかないでしょう。

また、業というものは、常にリンネしており、短氣という性格は、ふだんは出なくとも、その場合に会うと、つい出てしまふという性質を持っています。つまり、短氣のリンネです。

そこで、反省し、その原因をつきとめたならば、勇氣と努力と知恵をつかつて、二度、三度と同じ事を繰り返すことがないようにして行くことです。

原因がわかり、その原因にほんろうされていたことに気がきますと、その原因によつて影響を与えてきた人びと、そうしてまた、神に対して詫びなければいられない氣持になるものです。

悔い改めの心こそ、業を超えて行く足場になるからです。

もし、本^{ほん}当^{とう}に悪^{わる}かつた、あるいは感^{かん}謝^{しゃ}と報^{ほう}恩^{おん}の気^き持^{もち}が湧^わいてこないとすれば、その人^{ひと}の反^{はん}省^{せい}は、まだまだ本^{ほん}物^{ぶつ}とはいえないでしょう。

己^{おれ}の欠^{けつ}点^{てん}、短^{たん}所^{しょ}、業^{カルマ}というものは、自^じ分^{ぶん}を傷^{きず}つけ、人^{ひと}をも傷^{きず}つけてきているからです。

私^{わたし}には反^{はん}省^{せい}する材^{ざい}料^{りょう}がないという人^{ひと}によく出^で会^あいます、こういう人^{ひと}は反^{はん}省^{せい}が浅^あく、反^{はん}省^{せい}とはど
ういうものか、まだ、わかっていない人^{ひと}だといえます。

恵^{めぐ}まれてる人^{ひと}にかぎって、反^{はん}省^{せい}する材^{ざい}料^{りょう}がないというようですが、ではその恵^{めぐ}まれた環^{かん}境^{きやう}はど
のようにして、つ^つく^つら^られたか。夫^{おつと}か、両^{りやう}親^{しん}によ^よつてか、夫^{おつと}は社^{しゃ}会^{かい}に出^でて、ど^どう働^{はたら}いているのか、
両^{りやう}親^{しん}はど^どうして財^{ざい}を為^なしたか……。

このように考^{かん}え^えてくると、今^{いま}の自^じ分^{ぶん}の環^{かん}境^{きやう}をた^ただ盲^{もう}目^{もく}的^{てき}に是^ぜ認^{にん}し、その中^{なか}に安^{あん}住^{じゆう}している自^じ分^{ぶん}を
発^{はつ}見^{けん}するはず^{はず}です。恵^{めぐ}まれぬ人^{ひと}びとを考^{かん}え^えた場^ば合^あい、現^{げん}在^{ざい}の自^じ分^{ぶん}の立^{たち}場^ばに疑^ぎ問^{もん}が湧^わいてくるはず^{はず}です。
このように反^{はん}省^{せい}の材^{ざい}料^{りょう}は山^{やま}ほどあるものです。

反^{はん}省^{せい}の仕^し方^{かた}としては、各^{かく}人^{じん}が工^く夫^{ふう}してや^やつ^つても^もら^らつ^つてよ^よい^いの^のです。

が、一^{ひと}つ^つの^の方^{かた}法^{ぽう}法^{ぽう}として、ま^まず、現^{げん}在^{ざい}の欠^{けつ}点^{てん}、短^{たん}所^{しょ}をノ^かー^てト^とに書^かき記^しし、その一^{ひと}つ^つ一^{ひと}つ^つにつ^ついて、
年^{ねん}代^{だい}を追^おつて、原^{げん}因^{いん}を^をつ^つきと^とめ^めま^ます。

もう一^{ひと}つ^つの^のや^やり^り方^{かた}は、両^{りやう}親^{しん}と自^じ分^{ぶん}、夫^{おつと}と自^じ分^{ぶん}、子^こ供^{ども}と自^じ分^{ぶん}、兄^{きやう}弟^{てい}姉^し妹^{まい}と自^じ分^{ぶん}、友^{ゆう}人^{じん}と自^じ分^{ぶん}、上^{うわ}役^{やく}

と自分、後輩と自分、得意先の人ひとと自分、隣人と自分、というように、他と自分を対比させ、これまで生きて来たさまざまな状況の中で、自分の心がどのように動き、どのような態度ですごしてきたか。

これらを前と同じように年代別に追って行く方法です。

ものを対比しながら反省をしますと、比較的自分本位の傾向から離れ、客観的に真実をとらえることができます。

長い人生航路の間では、人は、一度や二度、自分を反省する機会を持つものですが、大抵は自己本位の想いに流され、自分をかばってしまふようです。これでは中道の反省とはいえません。中道の反省は、自分の在りのままの姿、内在する正直な心に照らして、両親に対して自分はどう対処してきたか、両親の献身に対して、自分はどれほど孝養したか、と疑問、追究して行くものです。両親と自分というテーマの中から、両親を困らせた、両親を悲しませた、自分の我儘が、いつ、どのような場合に、どう現われて来ていたか、また、ものに感謝する、しないということも両親との関係において理解されてくるでしょうし、また、子供の頃の生活態度が、現在の性格を形作っていることも明らかになつて来ます。

こうして、自分の欠点はすべて自己保存という自我の想念がつくり出しており、この想念に自分

が支配しはいされているかぎりは、正見しょうけん、正思しょうし、正語しょうごといった正しい生活せいかつ、調和ちょうわされた生活せいかつは期待きたいできないわけです。

不幸ふこうの一〇〇パーセントは自分の想念せんねんの在り方かたにありますから、幸福きふくを望むのぞむなら、中道ちゅうどうの生活せいかつに軌道修正きどうしゆせいする必要があるわけです。

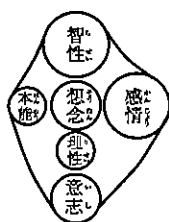
私わたしたちの心の姿すがたは、このような状況じやうきやうの中で、次第しだいに形作かたちぞられ、本来ほんらいあるところの黄金色おうごんしよくに輝かがく、丸まるい、豊ゆたかな、大きな心こころが、ヘンにゆがんでいたり、あるいはハート形がたになり、あるいは感情かんじやうや本能ほんのう、知性ちせい、理性りせい、意志いしのどちらかがアンバランスとなり、片寄かたよっているからです。

各人かくじんの心こころは、図ずにある通り、想念せんねんを中心ちゆうしんとして、左右さゆうに本能ほんのう、感情かんじやうがあり、上うへの方に知性ちせいがあり、下したに理性りせいが、そうして、その下したに意志いしが活動かつどうしています。

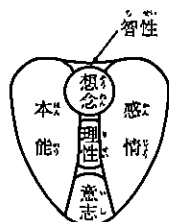
正常せいじやうな心こころでは、これらが平均へいじんして、丸まるく豊ゆたかに活動かつどうしているのですが、前述ぜんじゆつのように反省はんせいをしていきますと、すぐカツとなる、嫉妬しじゆ心が強い、そねみやうらみの念ねんが湧わいてしまふ、という場合ばあひは、知性ちせいや理性りせいの働はたらきが弱よわく、感情かんじやうだけが異常いじじやうにぶくらみ、心全体こころぜんたいが丸まるくない証しやうこ拠こです。

感情かんじやうのみに自分じぶんが支配しはいされるといふことは、自分じぶんの都合つうごでそうなるのですから、知性ちせいや理性りせいを働はたらかせて、常つねに自分じぶんを冷静れいせいな心こころに置き、事態じたいをよく見みきわめるようにつとめることです。

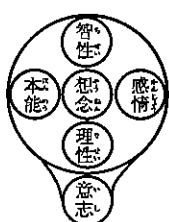
ここで心の機能こころのきんごうの説明せつめいを簡単かんたんにしておきます。



(思想的に片寄った心)



(ハート型の心)



(正常な心)

本能＝食・性の二大本能は本来、生理的なものです。私たちは生まれ落ちると同時に母親の乳房を求め、親が教えないのに、お乳を飲みます。性的本能についても、一定の年頃を迎えると異性を求め、性本能が活動を始めます。

また、夜になると眠くなるというのも生理的欲求の現われです。こうした生理的欲求をそのままに放置しておく、人間の場合は本来の軌道を外し、あらゆる方に突っ走ります。ただ、人間の心は本能の外に、感情、知性、理性、意志という機能が備わっていますから、自制心の強い人は、そうそう無軌道には流れてゆかないわけです。

動物の場合は、知性や理性は働きませんが、運動、休息、そしてその生活は自然環境の支配下におかれていますので、生理的欲求を發展させる条件は人間とは比較にはなりません。つまり、自然のコントロールをうけています。

人間は、気象に寒暖があればそれに対処するよう生活設計を考え、また、食糧を貯蔵したり、川に橋をかけたり、海に船を浮べ、どんな遠方にも自由に行き来できますからそのコントロールは自分が必要なければなりません。

こうした状況下にあるため、本能の欲求は各方面に発展することになります。つまり、生理的欲求を第一次本能とすれば、それにもとづく欲望は第二次本能となって働いてきます。

闘争、群居、好奇、逃避、拒否、誇示、服従など、こういった行為は、明らかに生理的本能を展させた第二次本能的欲望といえるでしょう。

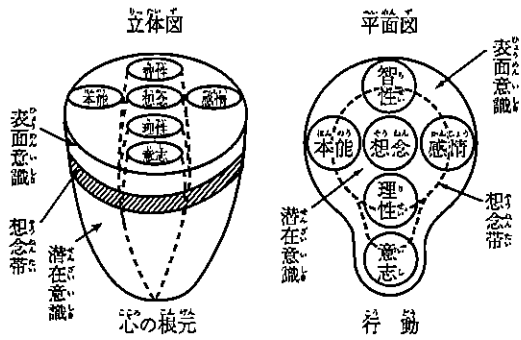
本能の働きは極めて、現実的、この世的であり、また、排他的傾向を帯びています。

個人間の争いや集団での戦争の原因を追究すると、個人の本能的エゴ、集団のエゴが発端になっています。

戦争が終り平和が到来すると、性の乱れが世上を覆うようになります。そうして、男女間のさまざまな葛藤が続出します。

地位、名譽、金、虚榮、虚偽、偽善、といった欲望は、闘争、群居、逃避、誇示、などの第二次本能の変化とみるべきでしょう。第二次本能は第一次の食と性の生理的本能に根ざしており、ことに性本能は、昔から英雄色を好むというように、それがさまざまな欲望を発展させていることに気が付きます。

ですから、こうした欲望に執着があるとすれば、心の安定は期し得ないし、中道による丸い心はいつまでたつても達成されません。



(図解説明) 心の姿は本来丸く大きく、そして風船のように立体的なものです。心の内部の機能を説明する場合は、上の図のようにすると理解し易い。平面図は心を上から見た図で、円の中心に想念があり、左右上下に本能、感情、理性、意志がある。表面意識と潜在意識は、想念帯(点線の部分)という想念が記録された壁でさえぎられています。表面意識と想念帯が浄化されると、想念帯の壁が崩れ、心の内部の潜在意識が表面意識に流れ出し、これまで学んだことのない過去の言葉や智慧が生じてくる。心の立体図をみると心の根元部は想念をはじめとして本能、感情などの各機能が一つに集約されています。各機能は表面意識ではそれぞれがった形で働いていますが、心の中心部になると、すべてが調和され、慈悲、愛、智慧、建設、義務、責任、使命といった神の子の己に帰ります。宇宙即我の大我は心の根元部に表面意識がつながり、発現された姿である。

真に安心を求め、不動の境地を願うとすれば、まず、本能の本来の在り方に目を向け、他の心の機能と同じように丸く豊かな、ふくらみのあるそれにしなければなりません。

本能による欲望は、もともと生理的なものであるだけに、放っておけば気付かぬ間に発展しますから、知性や理性、意志を通して、コントロールしなければならぬでしょう。

また、現在の本能的欲望は過去のカルマに非常に影響を受けます。したがって、現在のカルマ

は過去世の延長とみても差支えありません。

したがって、これをコントロールするには、強い勇氣と努力が必要となります。

本能の本来の姿は、図にもあるように、潜在意識の中にあつて、その目的は地上の仏国土を達成するための地上の建設、相互の調和にあります。

人間がこの地上に肉体を持つて生まれてきた目的は、この肉体を基盤とした地上の調和にあるわけですから、本能を無視すれば、その基盤を無視し、仏国土の目的さえ否定することになります。

また、もし食・性の本能がなければ、肉体維持も、子孫を残すこともなく、人類は早晩に滅亡せざるを得ません。

したがって、足ることを知つた生活、それは知性、理性の働きによつて、本能をコントロールし、本能本来の調和、建設の姿を顕現させてゆかなければならないわけです。本能は仏国土顕現の原動力です。

その原動力を正しく生かすことによつて、本能の機能は丸く豊かに発光し、家庭や社会の調和に役立ってゆくわけです。

感情 || 本能と同じように、私たちの感情の働きは幼児の頃から芽生え、行動の原型を成しています。好き嫌いの感情、愛の感情は理屈を越えて行動に走らせます。

もともと感情は熱しやすくさめやすい性質を持つていますから、感情の機能が好き嫌いであらうんでゆきますと、一時は直進しても長続きはしません。

しかし、好意を持つ、好意が持てないことによつて、人と人とのつながりが生まれ、離れたりして、私たちの行動を決めています。どんなに理屈をならべ、自分にとつて利益になると考えても、感情が肯定しないと、人はなかなか行動に移れないものです。

それほど感情というものは、本能と同じように重要な地位を占めています。

また、感情のない人間というものは考えられませんし、感情は人間の行動にとつてマイナス面が非常に大きい反面、この機能を小さくさせ、時には殺してしまうようでは、それこそ、心のない人間、ロボット人間になつてしまつてしまつてしまふでしょう。

最近の若い男性の中には感情があるのか、ないのかわからない人が多い。これは小さいときから勉強を強いられて、豊かな感情を育てる機会、たとえば友人と遊ぶ、楽しむ、競技するということが少ないために、感情を働かせる機会を故意に押さえられてしまつたからでしょう。

豊かな情操は、友人と遊び、動物と親しみ、家庭内での対話から養われてくるでしょう。

いずれにしても、感情の機能はプラス、マイナス両面を持つて機能化されていますが、その感情を生活の規準にして行動していると、苦しみ多い人生を送ることになります。

怒り、憎しみ、そねみ、嫉妬、中傷、そうして争い、といったマイナス面を助長させることになるでしょう。

感情がふくらみ、喜怒哀楽のみに心がゆれてきますと、ものの正しい判断ができなくなります。あとで深い悔恨だけが残ります。

そうならないために、そして、心を豊かに、感情の独走をさけるために、知性、理性の助けを借りるようにしたいものです。そうすることによって、私たちは、感情の機能を正しく働かせ、怒りや憎しみなどの喜怒哀楽にほんろうされることが少なくなります。

それには、怒りや憎しみ、愚痴の感情はどこからくるか、という八正道に沿った反省をしてゆくことです。

反省をした結果、これまでの日常生活が常に感情に流されていたとすれば、感情の部分は異常にふくらんでおり、反対に、知性が強く、冷たい人間であるとすれば、感情の部分は水のない田畑に似て、ひび割れしてくるでしょう。

感情の潜在意識層は、他を生かし、助け合って行く愛の波動で埋まっているのです。

その愛の波動は、感情を機能化している原動力であり、これを正しく働かせることが正法にそう人間像であるといえるでしょう。

知性Ⅱこの働きは、事物を追究し、真実をつきとめる役割を持っています。

人間が他の動物とちがう点は、この知性が飛び抜けた働きを持っているからです。

知性を養うにはさまざまな方法がありますが、要は、ものごとをうのみにせず、疑問と解答の柔軟な思索をすることです。知性の尺度は常に客観性にあります。物事を客観的に見る、そうすることによって、事物の真実をつきとめることができます。

知性のマイナス面としては、これだけが単独に働き、感情や理性、本能が無視されてきますと、非常に冷たい人間になって行くことです。人に対する思いやり、計算を外した行為というものができにくくなるからです。

知性は合理性を求め、科学社会を発展させてきましたが、その結果は、さまざまな非合理を生み出してあります。

つまり、人間社会を豊かにする科学技術は、かえって、人類を滅亡させる方向に進んでいます。公害やさまざまな殺人兵器などはその最たるものといえるでしょう。

知性は事物の真実を求める働きをしていますが、これが単独に働くときは、どうしても近視眼的となり、全体的に眼が届かないという弊害がついてまわります。物事を客観的にとらえる働きがあるなら、そんなはずはないと思うでしょうが、本来、知性そのものは、科学的であり、物を分析追

究するものであるだけに、事物を生動的にとらえることは不得手なのです。物事の細かい研究には知性は素晴らしい能力を発揮しますが、政治とか、行政といった全体的な問題になりますと、その能力は半減してしまふのです。

このことを現実社会に当てはめると、研究者とか科学者に政治や行政や経営をまかせると失敗するでしょう。今日、地方財政は危機にひんしていますが、赤字財政の公共団体の長は、大抵、学者出身の人が担当しています。もちろん、学者にも政治的能力のある人もいるし、政治家といわれる人の中にも研究者のような知性の持主もいます。

何れにせよ、知性の働きは事物の真実を追究する性能にありますが、これを単独で働かせるだけでは、心を豊かにするということにはならないのです。

知が立てば角がたつといわれるように、心の各機能を働かせながら知性を磨いてゆくようにしなければならぬわけです。

正法は学問ではありません。物事の真実を知ることが大事だからといって、学者や研究者がするような正法の研究者になつては、豊かな人間性は育ちません。

仏教やキリスト教が哲学化され、学問に姿を変えていったのも、知が先行していったからです。

潜在意識の知性は、智慧なのです。

智慧はなんでも応用がきき、これはわかるが、これはわからない、というものではありません。智慧を引き出すにはどうすればよいか。

それは、これまでくりかえしてきたように心の各機能を通して、反省と実践によつて、生まれてきます。実践というと単に体を動かすことを連想しますが、物事の真実を知るためには、まず考える、人の話をきく、知識を貯えることも、実践の一つです。

こうして、知性の裏側にある智慧が湧き出るようになりますと、物事に迷ったり、あせったり、失望したりすることはなくなつてきます。

智慧は、心の各機能の働きにもとづいて現われるものですから、それはまた、豊かな人間性、安らぎある心の現われとして表出されるものです。

理性Ⅱこの性能は、物の道理を判断する能力です。

物の道理は豊かな経験を必要とします。経験の浅い者は、どうしても狭い、片寄つた知識にとらわれ、全体を見通すことができません。

理性はそれ故、人生経験を必要としますが、その理性といえども、いわゆる、経験主義に陥り、知性を磨くこともなく、単独で働く場合は、小さな道学者になつてしまい、万人に共通した道理を理解することはできません。

つまり、ある地域社会の中では通用しても他の社会には通用しない、ということになってくるでしょう。

理性は知性の力を借りて、初めて、その力を発揮し、狭い人生経験の視野を拡大させることができます。

個人の人生経験の範囲は広いようで狭いものです。会社と家の間を往復して一生を終えたとするサラリーマンの経験を考えてみて下さい。

また、人は、さまざまな職業を通して、一生を終えて行くわけですが、個人個人の経験などは、非常に狭く小さなものです。

そうした狭い小さい経験をいかに活かし、全体的な道理としてとらえてゆくか。それには、多くの人の知識や経験を学び、知性の働きの助けを借りなくてはならないでしょう。

もちろん、感情や本能の在り方を考慮しながら、理性を育てて行くことです。理性にこだわると、独善に陥ります。俺はこうして人生を渡った、私はこうしたから成功した、

というように――。

苦勞して、何かを得た人は往々にして、独善的になりやすく、こうした傾向は年輩者に多いのです。しかし、理性の素暗らしさは、物の道理を判断する能力ですから、その潜在意識の働きは宇宙を

包含するような大きな心となつて表出されてくるでしょう。

すなわち、過去世の経験がこの機能の中に一パイ詰まっているということになります。

言葉をかえれば、それはもう一人の自分であり、守護霊の世界ということになります。

したがつて、独善に流されず、知性や感情、本能の働きを通して理性を磨けば、守護霊の示唆や

思わぬ考えが浮かんできて、状況判断を誤らないようになってきます。

もし、守護霊の力が不足すれば、指導霊の力も借りられます。

それには、中道に照らして、理性の機能がこれまでどのように働いてきたか。普通の場合は若い

人は、この働きは少なく、年輩者になるにつれて機能化してきます。しかし大抵は独善になり、今

の若い者はこうだから怪しからん、わしの若いときはこうだった、と、自分の狭い経験や判断で物

事をきめつけるとすれば、理性の機能は小さく、あまり活発に働いていないといえましょう。

守護霊の通信が得られるような理性に育てるよう、八正道の規範を当てはめ、独善的に流れた原

因はどこにあるか、あるいは理性の働きのない日常生活はどこからきているかを反省してもらいた

いものです。

意志は行爲です。意志がなければ、物事を具体的に成就させることはできません。

意志は八正道の念と非常に関連を持っており、したがつて念の在り方が意志の機能を正しくさせ

ていくでしょう。

意志は心の外に現われるものですから、人それぞれの意志は、その人の人格をも形成します。

意志の強い人を信念の人というし、弱い人は強い人の後からついて行くことになるようです。

意志の強弱が人それぞれの生活環境を形作つてゆきませんが、強固な意志というものは、しばしば

知性から直接意志につながる、本能からつながる、理性からつながる、という場合があります。そうなる、どうしても他との調和に欠けてきます。

つまり、知が立てば角が立つというのは、知性から意志につながるからそうなるのです。相手の感情を無視していますから、理屈が合わないと冷たく、思いやりのない意志として働くからです。

本能から意志につながる場合も、地位や名誉、金銭に集中し、そのために、人はどうしても自分さえよければ良いということになり、人を押しつけてもそれをやり通そうとします。

理性が意志に働くときは、独善的頑固者となり、ハシにも棒にもかからないことになりやすい。感情の場合は、人の話など受け付けず、問答無用となり、これも人のことなど構いません。

要するに、各機能が単独で意志につながったときは、同じ信念の行動をとったとしても、周囲に悪影響を及ぼします。同時に、自分自身にとってもマイナスとなります。心がもともと丸くないの

ですから、自分一人になると心の動揺はかくせないことになります。

一方、意志が弱いのは何が原因か。

前述と同じように、各機能の単独の働きにあるのですが、その働きが、浅いために起こります。つまり、知性を通していろいろ考える、そうしてこれはよいと判断し意志につながり、行動を起こしても、他の人から耳よりな話をきくと、それに動かされるからです。行動を起こす際の思慮が浅いから、意志も弱くなつてきます。

感情で意志を働かせている場合は、その典型といつてもいいでしょう。

意志の強弱は生活環境に左右されてつくられます。

大過なく人生を渡っている人の意志は比較的弱いのです。強い意志を生活上にあまり必要としないからです。これは子供の頃のわがまま、過保護が習性となり、根気にとほしいからです。

反対に、意志の強い人は、苦勞人に多いのです。意志の決定は生活に直接ひびいてくるので、決定後の変更をしていては計画を遂行することができないからです。

立志伝中の人をみると、この点がよくわかります。

心の各機能は過去世の影響をうけているわけですが、この意志についても同じことです。

意志が弱いと物事が中途半端になり、魂の成長を自らとめてしまうことになり、その原因をますますつきとめ、さまざまな機会を見つけ、意志を鍛錬することです。

意志を強くし、しかも周囲と調和させるには、心の各機能を働かせ、意志につなぐことです。

周囲の調和と自分の意志というものは、必ずしも一致しないものですが、こうした場合は時を待つことが必要です。

丸く豊かな心は、中道という片寄りのない、客観的な見方、思い方、言葉からつくられて行くわけですから、そうした方向に、智慧を働かせて達成させたいものです。

心の機能の大略は以上ですが、さて、正定の反省は、このようにして、正しい想念を軸として行われることが必要です。

反省後の瞑想は、心を豊かに安定させます。

心のバイブレーションは神の心に近づいて行きます。

心が落ち着き平静になりますと、守護霊の通信をうけやすくなり、示唆に豊んだ考えが腹の当りから浮んでくるようになります。

平静な心を生活の場に保ちつづけますと、外界の動きに心を動揺させることがなくなり、外界のさまざまな動きを正確にキャッチすることができま

す。心を内に向け、外に向けるなどということは、外界の動きに心をとらわれず、これらをすべて心の糧とすることです。

誰かが自分を中傷したとします。心が外に向いているときは、すぐそれに反発し、心をいらだてます。ところが内に向いているときは、その中傷を平静にうけとめ、冷静な立場でその中傷の本身を考えます。もし自分に非のないものとすれば、中傷した人は真実を知らぬ気の毒な人であるわけです。誤解を解く機会がなければ相手のために祈ってやることです。中傷の中に自分を置く、それだけ心を不安定にさせ、生活のバランスを崩してゆきます。毒は食わないことでありますが、中傷という一つの事柄を通して、人間の心の姿を知る機会ができたのですから、心が内に向いているときは、すべてが心の糧になるといふことです。

こうして、正定を重ねていきますと、やがて、静（心）と動（生活）のバランスが保たれ、不動の心が養われてきます。

つまり、正定の目的は、一つには中道に照らした反省にあります。今一つは、その静なる心を日常生活の中で活かしてつづける不動心にあるといふことです。

かくの如き 正法の生活の中にこそ 神仏の光明を得 迷いの岸より 悟りの彼岸に到達するものなり このときに 神仏の心と己の心が調和され 心に安らぎを生ぜん

心は光明の世界に入り 三昧の境涯に到達せん

正法とは、正しい法、万古不滅の神の理、宇宙の法則をいうのであります。

その法則とは、ものにはすべて転生輪廻という循環の法があり、その法自体が、万物万生を生かし、慈悲と愛に満ち満ちているということでもあります。

地球は太陽の周囲を回っています。極微の原子も、原子核を中心に陰外電子が回っています。一日が終われば、また明日がやってきます。人は生まれれば、やがては死に至ります。善の行為は善の結果として返ってきます。

こういう原則を、循環の法といいます。

したがって、人間の日常生活も、こうした法に乗った生活こそ、大事であるわけです。

正しき行為は、正しき結果として、その人の人生、健康、環境を整えてくれます。自然の運行が、それを如実に示しています。狂いのない運行があればこそ、私たち人間は、地上での生活が行えるのです。

慈悲と愛についてもそうです。法が正しく運用されているから、太陽の熱は冷えないし、地球は定められた軌道を外さずに動くことができます。地上での生活も、太陽のかわりない熱、光のエネルギーがあればこそ可能です。

慈悲と愛というと、いかにも人は、人間的行為、人間的感懐を連想しますが、太陽も、地球も、

人間同様に、心を中心にして動いているのです。自然はものを語らない。人間はものを語る。喜怒哀楽の感情があるのに、自然は、そうした感情を示さない、といわれます。

たしかに、表面的にはそうです。ところがそれはちがいます。

この地球という大地も、空気も、水も、植物も、動物もみんな感情を持っており、言葉もあります。現象世界にあるものは、すべてが生命を持っており、生命があるということは、意識があるという事です。

花でも動物でもそうです。人が愛念を持ってこれに接すれば、花も動物も、その人のいう通りに動き、言葉もわかりお互いに通じ合います。更に進むと、花には花の精があつて、人間の心が浄化されますと、花の精が姿を現わし、日本人の場合は日本語で、アメリカ人の場合は、英語で語りかけます。松や銀杏の木でもそうです。そこに住む植物の精霊が姿を現わし、三百年、五百年の風雪にたえた大木ならば、世の移りかわりをみていますから、自分の身の回りで起こったさまざまな変化、歴史を、語ってきかせてくれます。

このように、人間が彼らに愛念を持って接するときには、彼らもまた、それに応えてくれます。地球という大地でもそうです。大地は、人間をはじめとした地上や地下に住む生命を生かし続け、支えています。それはまったく辛抱強く、あらゆる生命を生かしています。

大地に表情がないかという点、ちゃんとあります。私たちが旅行をします。知らない土地を見て歩きます。するとその土地、特有の雰囲気がつくられていることに気付きませんか。大地は受動的で、人間は能動的につくられています。したがって、人間の感情想念——いわばそこに住む人たちの意識の調和度、心の持ち方が、その土地の空気をつくっているのです。争いの多い土地には、作物も育ちません。町も汚いです。調和に満たされた場所は、町もきれいで、明るくゆつたりしています。

人気のない大地は、それではどうでしょうか。やはり、表情を持っていません。気候や風の流れに依りて、サラリとしたところもあるかと思えば、現在は人気はないが、その昔、人類が居を構えたところは無数にありますので、そうしたところは、かつての人類の波動を残し、明暗、美醜の空気をかもし出しているところもあります。

このように、大地といえども、生命を持ち、感情を抱いています。

火山、地震、地すべり、陥没など、大地そのものは、時には怒り、狂うことがあります。こうした、怒りや狂いというものは、大地そのものが勝手に動きだしたかという点、そうではなく、人間の好き勝手な行動、想念が原因となつてつくりだした物理的現象が大部分です。

太平洋の中央にあつたムー大陸。大西洋に文明の華を咲かせたアトランティス大陸などの陥没も、

いずれも、そこに住む人類の業概念が生み出した現象であります。

なぜ、このようなことが起こるかといえば、人間の生命意識、地上での目的というものが、己自身の調和と同時に、動物、植物、鉱物をふくめた、地上の調和にあつて、その目的に反した想念行為にたいしては、その目的に反した分量だけの償いが必要になつてくるからです。

これは、各人が信ずる信じないにかかわらず、人間の生命目的というものが、そのように作られており、いたしかたのないところなのです。

人間は、大地という生活環境が与えられ、太陽という熱・光の変わらないエネルギーの供給によつて生かされていることを考えるならば、そこに、大自然の、神の、偉大な慈悲と愛ということを感じないわけにはゆかないと思います。

私たちは、大自然の生命に調和し、神の心を心とした慈悲と愛に生きることの意義が、これまでの説明によつて、大体おわかりになつたと思うのですが、なお人間の価値というものが、価値判断というものが、なにを規準に、なにを標準に定めるべきかを説明いたしましょう。

まず価値の概念について考えますと、ものに値打ちがあるのは、効用があるからです。

金の値打ちは、金があれば、なんでも自分の欲しいものが買えるからです。ロビンソン・クルーソーのように、絶海の孤島の独り暮らしでは、何億の財宝も、なんの意味も、価値もありません。

このように、価値というものは、効用があると同時に、相対的なものです。

人間の値打ちというものも、この意味では相対的です。悪い人がいるから悪くない人がよく見える。善人だけだと、善人がわからない、ともいえます。

近頃では、人間的にどうあれ、金、地位、名誉、あるいは才能がある人は、善い人、偉い人に見えるようです。

「……なんだかんだといつても、あいつは大した男だ」

ということを、よく耳にします。

人間の評価を単純に、それは間違いだであるということをするうす感じながらも、遅、不運で片づけてしまうようです。

価値の性質はこのように相対的でありますが、同時にそのときどきの時代的背景によって、その価値観はくるくるかわります。仇打ちは昔は美談でした。今では犯罪です。親のためには子供は売春をしいられても仕方ありませんでしたが、現代は子供にも主権が認められています。このように、価値観にも流行があるようです。

価値にも流行すたりがあり、現代はまさしくそうした時代であるといえましょう。

しかし、価値の普遍性、安定性を望むのは、人間である以上誰しも求めるところではないでしょ

うか。価値がくるくる変わるということは、人間の心が不安定で、物に動じやすいからです。人間の歴史が心を中心として回転せずに、五官にふりまわされ、知と意という、いわばうわべの人生しか見ていないために起こる現象ではないでしょうか。

才能のある者には、奇行や不自然な言動があつても、人は黙認します。地位やお金があると、偉い人に仕立てあげてしまふ。文明文化は進んできましたが、人間の心が不安定ですから、常に、不安と焦燥のなかであえいでいます。公害にしろ、過当競争にしろ、人間の心が不在で、知と意が先行しているためにおこっている現象です。

このために、こうした現象を防ぐには、どうすればよいか。心の安定、心の認識、そうして、価値の確立ということを人類はもう一度、その原点に戻つて考えてみる必要があると思ひます。

貨幣価値が年々下落するとすれば、なまじの貯金では、それに追いつきません。五年前の百万円が、今は五十万円に下がつては、貯金の張り合ひも、働く意欲も阻害されましよう。

やはり、生活してゆくからには、価値の絶対性、安定性を望むのは、人間として当然のことだろつと思ひます。

人間の心、人間の価値づけについてもそんなのです。外面的、相対的な理由だけで、価値判断をすることのおろかさ、私たちは、長い人生経験のうちに、何度が直面して思ひます。

そこで人間の価値を決める価値判断の規準なり標準をどこに求めたら間違いないのか、少なくとも、価値の物さしである以上、絶対不変の物さしでなければならぬと思ひます。

そう考えますと、その物さしは、大自然の姿にしか見当たらないし、大自然なら絶対に間違いないというところになるうかと思ひます。

すなわち、自然の尺度をもつて、人間を評価するということです。

自然の尺度をもつて、人間を価値づけする。これこそ、またと得難い、物差しであろうと考えます。えこひいきは、絶対ありません。プラスコでの分析と同様の、まじりけのない結果しか出ません。

しかもこの価値判断は、人間を正しく評価すると同時に、一方において私たちの生活を真にエンジョイさせてくれます。不安と焦燥からも解放してくれます。

ではいったいその自然の尺度とは何か。

まずその第一の尺度は、ほかならぬ地球という大地です。

地球が宇宙空間に創造されて以来、地球そのものの変化変滅は、今もつて一度も起こっておりません。地上の変化は人間や生物が生きるための地ならしとして、また、人間それ自身の我欲の結果以外は、地球は、常に健在であり、私たちを守ってくれています。

第二の尺度は、水です。

気体、液体、固体の三相の循環をくりかえしながら、決して、その分量を、増やしたり、減らしたりすることもなく、何万年、何億年という間、地上の生物に、生きる力を与えています。

第三には、太陽です。

何度もくりかえすように、太陽の熱・光のエネルギーは、万物万生の元といてよく、これなくして、生物の生存は不可能です。人間が地上に住む前から、太陽は存在し、その熱・光のエネルギーは、少しもかわることなく、放射されています。

第四は、空気です。

酸素、炭酸ガスなどの混合物質である無色透明の空気は、地球の周囲をとりかこみ、決して宇宙空間に飛び出そうとはいたしません。人類の数がふえ、空気を求める生物が多くなっても、空気の量は、一定不変、その分量を加減することもないので、

第五の尺度は宇宙です。

地球という惑星、太陽という恒星が存在できるのも宇宙という空間、宇宙という無限の広がり、統制があればこそ、可能です。宇宙はかぎりない生命の母体であり、智慧と創造の源泉です。

以上の五つが、人間の価値判断の尺度です。

大自然という尺度は、常に絶対不変の立場を守り、しかも増えもしなければ、減りもしないとい

う」中道「法」の下に生きています。

人がこの中道という自然の姿を尺度として生活するとすれば、私たち人類には、限りない進歩と調和が約束されます。なんとなれば、自然は中道を軸に調和しており、調和は争いのない世界であり、破壊がなければ、その分だけ進歩の分量がふえることになるからです。

戦争は発明の母であるとみる人もいるようですが、人類の意識が、自然という価値と調和にめざめたときは、発明発見は欲得から生まれるのではなく、人類全体の幸福、という自覚と義務感の中から勢いよく湧いてくるでしょう。

私たちは、意識をそこまで高める必要があるのです。またそうでなければ、私たちの環境はもとより、私たちの生活それ自体が行詰まってきました。戦争、破壊、インフレ、失業、そうして、経済優先、価値の絶え間ない変化、こうした悪循環から人類はいつになつても解放されることはありません。

こうしたためまぐるしい不安と混沌の社会から一人一人が脱却し、人間の心の偉大性と価値の尺度の在り方を素直に認めることによつて、安心と希望の世界がひらけてくるのです。

自然の尺度は、人間の評価だけではありません。政治、経済、文化、教育、科学、厚生、労働などにわたつても、その価値づけを与えています。

すなわち、大自然をもとにした正法神理というものは、人間の全人格にわたつて、影響し、作用し、教えているものであるといえるのです。

一切の混迷は、心の不在からです。法を忘れたからです。自然を愛さない目先の利益のみを追つた経済、欲得が、人間の最大関心事になつているところに原因があります。

神仏は存在します。存在しないとみるのは心を正しく見ることができない人のいうことです。

心は素直に、正しくみることができれば、そうして、その心で正しい想念と行為に努めるならば、神仏は誰彼の差別なく、その前に現われます。神仏は決して沈黙を守つてはおりません。神仏をして沈黙させる原因を人間がつくつているために、沈黙せざるを得ないのです。

三昧の境涯は、人が心をとり戻したとき、すなわち、神仏の心と己の心が調和されたときに、心の安らぎという、無限のひびきを持つて私たちをつつんでくれるのです。

人間がいくら騒いでも、わめいても、この地上から一步も外に出ることはできません。宇宙船に乗つて地球から離られたとしても、大宇宙の外には出られません。所詮、人間はこの大宇宙のなかの地球というこの環境のなかで生活してゆかなければならないようにできています。

ということ、大自然の胸中で生かされ、生きてゆかなければならないものであるということなのです。どんなに威張つてみても、かんでみても、人間と自然というものは切つても切れない絆で

結ばれていきます。

そうだとすれば、私たち人間は大自然の法という正法にそった生き方しかできないということをも悟らざるを得ないと思います。

大宇宙大自然は正法を忠実に守っており、人間も小宇宙でありますから、人間も正法を忠実に守らざるを得ないのです。はっきりいって、人間は、そのまま正法なのです。だから小宇宙なのです。人間が小宇宙ということは単なる観念や願望ではありません。

心をまるく大きくすれば、太陽も、地球も、あたかも宇宙船に乗ってみるように、否それ以上の広く高い立場から、客観的に、その存在を知ることができます。

人間の肉体にしても、心臓からはき出された血液が人体をくまなく循環し、再び心臓に舞い戻り、そうした過程をくりかえすことによつて、人体そのものを維持しています。丁度、地球が太陽の周囲を三百六十五日と四分の一めぐり来たつて、再び春夏秋冬をくりかえすことによつて地上の生命が育まれ、太陽系の一員である地球の役目を果たしているのと同じです。

このように、心の面からみても、肉体諸器官の機能一つみても、人間は大宇宙の機能と同じようにつくられています。すなわち、人間は、大自然という正法にそった生き方をしていることがわかりかと思ひます。

正法の根本は中道であり、中道の極点は調和という神仏の心です。

それには一切の執着から離れ、あるいは離れる努力から正法に合う生き方が生まれてくるわけです。迷いは執着から生まれます。悟りとはその執着から離れた心です。

心の安らぎは、こうした執着から離れた分量に応じて、生じてきます。

三昧の境涯は、こうした執着から離れることによって、生まれてくるのです。

真の三昧は衆生済度を目的とした如来の心を指していいいます。如来の心はすべてを見通します。

地上天国がいつ完成するか、地球人類はやがてどうい風に進んでゆくか、人びとの苦悩がいつ晴れるか、そうしたことを見越して現在をどう処してゆくかを、熟知しています。したがって執着

にとらわれることがありません。絶対の安心と、無限の智慧を内に秘めながら、人びとを導いてゆきます。

禅定の内容も光明世界に行き来するだけでなく、あの世とこの世で苦しむ人びとに光を与え、その苦悩から救います。

禅定にも第一から第九までの段階があつて、第八から第九の禅定は、こうした内容を伴つたものです。人によつては三昧の境地は心が空っぽになり、無に帰一するものとしてゐるが、そんなものではありません。生きた人間と同じように行爲している、静中動の姿が禅定の中身であり生活であ

ります。

少なくとも人びとの悲しみを取りのぞき、人びとの喜びとともに喜べる菩薩の心にまで人びとの心が向上するならば、三昧の真意も明らかに becoming でしょう。菩薩の禅定は第七に位置し、あの世とこの世の、求める者に光を与えることができる禅定です。もちろん、これにも段階はあります……。

いずれにしてもこういうように、三昧の心は、私心という執着から去った己自身の確立されたときに得られるものであり、それには正法にそった生活が必要であるわけです。

人は好むと好まざるとにかかわらず、正法を心身に具現してゆかなければならないことを、この際、肝に銘じてください。

この諸説は末法万年の神理なることを悟り、日々の生活の師とすべし

二千五百有余年前の釈迦は、やがてこの仏法はその力を失い、法灯は消えうせ、無明の世界をつくっているであろうと予言しました。

仏教は口伝えされ、文字となり、中国に渡り、日本に定着しましたが、その間に仏教はいつしか哲学となり、学問にかわり、むずかしい経文となつてしまいました。このため、仏教は法力を失い、

仏教者までが、生死の意義すらわからなくなり、壇家相手の葬式仏教にかわってしまいました。

釈迦が説いた仏法、すなわち正法は今日、予言通り末法と化してしまつたわけです。

本来、正法は、この大宇宙の成立と同時に生まれ来たものであり、人間も正法者として、大宇宙とともに、無限の進化を求めてこの地上に生まれ来たものです。それが転生輪廻を重ねるにしがたい自己保存という自我がめばえ、物質至上の世界をつくり上げてきたのです。何回となく繰り返されたノアの方舟現象にもかかわらず、人類は性懲りもなく、物質の奴隷となり、ここ一万年の間にもモーゼ、イエス、釈迦をはじめとした大指導霊によつて正法が唱道されながらも、時がすぎると、またもとのもくあみとなり、末法は万年の長きにわたつて続いてきたのであります。

しかし万年にわたつて末法が続いたとしても、正法という大宇宙の神理は永遠にわたつて消えることはないのです。大宇宙が正法から外れたときは、大宇宙の終わりを意味するからです。地上は末法と化しても、大宇宙は、それを静かに見守つています。物質の奴隷と化しているといえ、人類はやがてめざめるときがくるであろうと、神仏は、その経綸にしたがつて、大宇宙を創造しつづけているのです。

しかし物質の奴隷と化している間は、人類から苦惱を抜き去ることはできません。人類の目的は正法という調和にしか、生きる権利も、義務も、責任にしても与えられていないからです。調和を

外れた生き方をすれば、人類にはその分だけ苦悩がついてまわります。

「この諸説は未法万年の神理」とは、以上のような意味を持つており、人類が物質に、自己保存に執着を持つかがぎりは、未法は万年にわたつて続いてゆきます。しかしそれにもかかわらず、正法神理は生き続けているのであり、人びとが苦界から脱したいと思うならば、正法にそつた生活を心行を日々の生活の師として、学び、努力されることを望むものです。

正法は誰のためでもない、

あなた自身のためのものです。

そうして人類全体にそれを及ぼしてゆくものです。

心行概説

「心行」とは、心と行いといふこととです。

すでに「心行」を讀まれて氣付かれたとおもいますが、人間を含めた大宇宙は常に相互に關係し合つて動いています。太陽系一つとつても、太陽を中心に九つの惑星が相互に關係し、太陽系といふ体を形作つています。地球や火星が一つ欠けても、太陽系の存立ははかれません。

地上の生活にしても、動、植、鉱の相互関係がなければ成り立ちません。

その相互関係は何に起因するのでしようか、それは大自然の意識なのです。秩序整然とした意識の働きがあればこそ、大宇宙も、地上の生活環境も、調和されているのです。生命の神秘をみるときに、私たちはそこに、偉大な大自然の叡智を発見するでしよう。それが神の心なのです。

もしも、自然のそうした相互関係が、ただの偶然の連続によつて生じたとすれば、地球はとうの昔に滅びているでしよう。地球誕生にはさまざまな説があるでしようが、地球という球体が出来上つたのは今から約三十三億年も以前のことなのです。その当時の地球は、いわば火の玉であり、太陽のように燃えさかっています。生物が住めるようになったのは今から約六億年も前のことです。それまでの地上は、火山の爆発や氷河時代を繰り返しました。大宇宙の時の流れからすると、六億年という歲月は一瞬の出来ごとかも知れません。しかし地球が太陽の周囲をまわりはじめて、すでに数十億年、その軌道は、昔も今も変わりません。偶然にしては、あまりに出来すぎていると思ふのが当然ではないか。

しかも、極大の大宇宙と極微の素粒子には、ともに核と分子の相互関係がみられるという事実を知るならば、そこに大自然の意思、意識、心というものを感得しないわけにはいきません。

私はそうした事実を、客観的に、主観的にとらえることができました。

ただ皆様に説明する場合には、主観的では納得されないうために、右のような説明になつてくるのです。

大宇宙には心が存在します。そしてその心は私たちの心にも相通しているのです。

客観的にこれを説明すると、太陽の熱・光に強弱がない、空気に増減がない、一日には昼と夜とがあつて、決して一方に片寄らない、つまり、大自然の心は、私たちに中道という調和ある秩序を教えている、ということになります。太陽の熱・光が強くなつたり、弱くなつたりしたらどうなるでしょう。地上の生命は生きてはいけなうでしょう。空気が増えたり減つたりしても同じことがいえるでしょう。

私たちの生活態度も、食べすぎれば腹をこわし、惰眠をむさばれば体力に抵抗力を失います。しかし、もつと体に影響を与えるものは心です。心配事があれば食欲は減退し、睡眠がさまたげられる。どなつたり、腹を立てれば血行が悪くなり、怒つた息を風船に入れ、金魚鉢に入れたら金魚は死に至るでしょう。怒りの息は大変な毒性を持つていることを知つている人は少ないでしょう。

大自然は調和という中道の心を教えています。人間の体も無理はいけなうし、怠惰もいけません。心についても、怒つたり、悲しんだりすれば、体に、精神に、悪い影響を与えます。肉体も心も、中道に適つた生活行為、つまり正しい想念と行為が必要なのです。大自然は、そのことを教えてい

ると同時に、大自然の心にさからえば、その分量だけの苦しみがついてまわることも教えています。中道とは足ることを知った生活です。欲望にほんろうされない自分自身を確立することです。生老病死の苦しみは、こうした中道の心を失った自我我欲に執着した想念、心にあつたのです。

人間は大自然界の中で生活しています。大自然から離れては生活が出来ません。このことは大自然の心と相通しているからなのです。

「心行」とは、足ることを知った心で感謝し、報恩という行為を示していくことです。それ故、心行は中道の精神で毎日を生かす生活しなさい、ということなのです。

「心行」は、大宇宙の相互関係と、人間の関係、そうして、すべてのものは循環され、その循環は、大宇宙の心、中道を軸にして回転し、人間の魂もまたこうした正しい循環の過程の中で育まれ、調和という目標に向かつて、転生輪廻を重ねて行く永遠の生命体であることを、極めて平易に、端的に、文字で表したものです。

物事にはすべて柱というものがありますが、「心行」の柱となるものは、

大自然という神の心

永遠の生命体を維持している循環の法

慈悲と愛

この三つです。

この三つが「心行」を形作り、私たちを生かし続けていているものなのです。

「心行」はそれ故に、心の教えであり、生活の規範です。

したがって、これは暗記するものではありません。これを理解し、実践して行くものなのです。実践の過程を通して、私たちは、大宇宙の中道の心に調和され、真の安らぎが体得できるものなのです。

ところで言葉というものは波動です。経文の読誦はただ読み上げるだけでは意味を持ちません。経文の意味を理解し、実践している者が読誦するときは、その言葉の波動はあの世の金剛界にまで通じ、人びとを感動せしめていくものであります。

言葉は本来、言魂といつて、もともと光の粒子から出来ており、言葉を発する人の心の在り方いかんで、言葉の一つ一つが、光の玉となって、空間に流れ出ていくのです。光の玉はふつう肉眼ではわかりませんが、霊視のきく者、あるいは四次元の世界から見ると、この点は実にはつきりと見えます。

人の話に感動する、ないしは笑いや怒りが出る場合は、話す側の心と、これを受け取る人の精神状態によつてちがってくるでしょう。しかし、純な心で話す場合は、これを受け取る側に邪心が

あつても、大抵その邪心は消えていつてしまいます。話は筋が通つてわかるが、さつぱり氣持がそれについていけないというものもあるでしょう。こうしたことは、話す側の心の在り方が、聞き手に非常に大きな影響を与えているからなのです。純な心は光であり、わだかまりがあると光が黒い塊りとなつて相手に伝わつて行くので、反作用を呼び起こすことになります。

ちよつとした寺にいくと釣鐘がある。あの釣鐘の音色も、これを打つ人の心によつて、ひびきがちがつてきます。ゴーンという鐘の音は誰が打つても同じだと思ひますが、打つ人が常日頃、心の研鑽を怠つていなければ、その鐘の波動はあの世の金剛界にまで達し、その人に返つてくるばかりか、その鐘の波動は、人びとの心に伝わり浄化してくれるのです。經文の誦誦、朗誦というものも、まったくこれと同じです。正しい心と行為をしている者がすると、その声の波動は金剛界にまで通じ、再びその人にその波動が返つて来て、心の統一、安らぎを一層、助長していくものです。

「心行」の朗誦は、そうした意味では大切なものだし、しないよりした方が良いということになります。ただ、書かれている意味もわからず、おがめばご利益があるということでは駄目です。般若心経はどこでも読まれています。有難いお経であり、したがつて写経も良いし、誦誦もまたご利益があると伝えられています。しかしその意味もわからず、行為のないものが、朝晩これを上げてても光は届きません。

今日の仏教は、經文をあげたり、寫經をすること自体にウエイトがかかり、日頃の想念と行為については問題としていないところに問題があるでしよう。

「心行」は、そうした意味において、中身をよく理解し、それを現実の生活の上に現わし、そうしたその心で朗読するならば、一の言魂は、二になり、三になつて、心の安らぎを増して行くでしよう。

こうした意味で「心行」の意味をよく理解し、夜休むときに、床の上で静かに朗読し、その日一日の想念行為を反省し、過失を正し、中道の心を養つて行くことを望みます。

祈き

願がん

文ぶん

(全文ぜんぶん)

祈りとは 神仏の心と己の心との対話である

同時に 感謝の心が祈りでもある 神理に適

う祈り心で実践に移るとき 神仏の光は我が

心身に燦然とかがやき 安らぎと調和を与え

ずにはおかない

私たちは神との約束により天上界より両親を縁としてこの地上界に生まれて来ました 慈悲と愛

の心を持つて調和を目的とし 人びととたがいに手を取り合つて生きて行くことを誓ひ合いました

しかるに地上界に生まれ出た私たちは天上界での神との約束を忘れ 周囲の環境・教育・思想・

習慣そして五官に翻弄され 慈悲と愛の心を見失ひ 今日まですこして参りました 今こうして

正法にふれ あやまち多き過去をふりかえると 自己保存 足ることを知らぬ欲望のおろかさ胸

が詰まる思いです

神との約束を思い出し 自分を正す反省を毎日行い 心行を心の糧として

己の使命を果たして行きます

願わくば私たちの心に神の光をお与え下さい

仏国土・ユートピアの実現にお力をおかし下さい

一、大宇宙大神靈・仏よ

我が心に光をお与え下さい

心に安らぎをお与え下さい

心行を己の糧として 日々の生活をします

(己の心で 一日の反省をする)

日々の指導 心から感謝します

一、天界の諸如来 諸菩薩 (光の天使)

我が心に光をお与え下さい

心に安らぎをお与え下さい

心行を己の糧として 日々の生活をします

日々の指導 心から感謝します

一、天界の諸天善神

我が心に光をお与え下さい

心に安らぎをお与え下さい

我が心を正し 一切の魔よりお守り下さい

日々のご指導 心から感謝します

一、我が心の中にまします守護・指導霊よ

我が心を正しく お導き下さい

心に安らぎをお与え下さい

日々のご指導 心から感謝します

一、万生万物

我が現象界の修行にご協力

心から感謝します

一、先祖代々の諸霊

我に修行の体を お与え下さいまして

心から感謝します

諸霊の冥福を

心から供養致します

祈願文の解説

天と地のかけ橋

いつたい祈りというものは、どのような精神的過程を通じて発生したものでしょうか。

それは、人間が肉体を持ち、あの世、天(てん)上(じやう)界(がい)（実(じつ)在(ざい)界(がい)）から地(ち)上(じやう)に生(せい)をうけたときからはじまります。

魂(たましい)のふるさどである天(てん)上(じやう)界(がい)では、「祈(いの)り」は即(そく)行(ぎやう)為(ゐ)そのものとなつてゐるので、殊(こと)更(ごと)に、祈(いの)らなくてもいいのです。思(おも)うこと、考(かん)えることが、そのまま祈(いの)りの行(ぎやう)為(ゐ)となつて、神(しん)仏(ぶつ)と調(てう)和(わ)してゐるからです。ところが、人(にん)間(げん)は肉(にく)体(たい)を持(も)つと、こうした全(ぜん)なる心(こころ) そうして、それにもとづく行(ぎやう)為(ゐ)を忘(わす)れ、自(じ)我(が)に生(せい)きようとします。五(ご)官(くわん)に左(さ)右(ぎゆう)され、六(ろく)根(こん)にその身(み)を、心(こころ)を、まかせてしまいます。すると、煩(わづ)悩(なう)といふ迷(まよ)いだ、己(おのれ)自(じ)身(しん)を埋(ま)没(ぼつ)させ、どうにもならなくなつてしまいます。

苦(くる)しい時(とき)の神(かみ)だのみ。これは煩(わづ)悩(なう)にふりまわされた人(にん)間(げん)が、最(さい)後(ご)に求(もと)めるものは、己(おのれ)自(じ)身(しん)の魂(たましい)のふるさどであり、ふるさどこそ、救(すく)いの手(て)をさしのべてくれるもう一人(ひとり)の自(じ)分(ぶん)自(じ)身(しん)であるといふことを、無(む)意(い)識(し)のうち(うち)に知(し)つてゐるからにはかなりません。助(たす)けを求(もと)める自(じ)分(ぶん)と、救(すく)いの側(がは)に立(た)つ

自分は、ともに一つですが、救いの側に立っている自分は、「心行」の中に述べている潜在意識層の守護・指導霊であります。本来、その人が煩惱にふりまわされた自分を反省し、どうぞ助けて下さいと祈ったときは、潜在意識層の守護・指導霊が救ってくれます。守護・指導霊に力がない場合は、より次元の高い天使が慈悲と愛の手をさしのべてくれます。

このように「祈り」というものは、自分自身の魂のふるさとを思いおこす想念であります。同時に、反省という、自分をあらためて見直す立場に立った「祈り」でないと、本当はあまり意味がないし、救いにはならないということです。

苦しいから助けてくれ、というだけでは、愛の手はさしのべられません。なぜかといいますと、今の自分の運命は、自分自身でつくり出したものだからです。それは、他の誰の責任でもありません。自分自身の責任だからです。

人間は神の子であり、神の子に反した行為は、その分量だけ償うことが神の子としての摂理です。反省し、さんげして、祈るときに、神仏は慈悲と愛を与えてくれます。

あやまちは、人間にはさけられないからです。

祈りというものは、このように、肉体を持った人間の、神仏を思い起こす想念として発生しました。

聖書の中に、「汝信仰あり、我行爲あり」という意味の言葉が随所に出てきます。これは、単な

る祈りでは意味がない、行為で示せということ。祈りは、行為にまで発展しなければ、其の祈りまで、高めることは出来ないであります。

また祈りは、神の子の人間を自覚したその心と、その感謝の気持が、祈りとなるのであります。

現在与えられた環境、境遇というものは、神が与えてくれた自分自身の魂の最良の修行場であり、ここを通らずして魂の向上はあり得ないとする自覚、感謝の心が天に向かった時に、祈りとなつて、ほとばしるのです。人間は、所詮、神にはなれません。したがつて、神仏の加護と人びとの協力なくしては、いつときといえども生きてはゆけません。自分の運命を天命として、その使命をこの世で果たすためには、人間は祈らずにはいられないものなのです。

こうみてまいりますと、祈りには、段階があり、同じ祈りにしても、各人の心の所在、調和度によつて、かなりの相違があるといえます。

しかし、祈りの本質というものは変わりません。

その本質とは、祈りは、天と地をつなぐ光のかけ橋であること。したがつて神仏との対話であるということ。という事です。

人が祈つたときは、天と地の光のかけ橋がかけられたことになります。

ただしこのかけ橋は、各人の心の調和度によつて、大きくもなり、小さくもなり、太くもなり、

細くもなるものなのです。

祈りは行為

祈願文について説明いたしましょう。

祈願文は、既述のように六章から成っています。このうち、第一章から第四章までが、「心」にあたり、第五、第六章が、「肉体」についての祈りの言葉です。

それですから、祈願文は、心と肉体、宇宙と人間の関係を、もつとも短い言葉で表現し、魂と神の一体化、己自身と守護・指導霊の調和をはかる、もつとも身近な想念であり、魂の叫びであります。

またこれを唱えるとき、人は、各人の心の調和度によって調和され、その調和した心で行為に移るときは、心の位置はいつぞう高まってまいります。

まず第一章をあげてみましょう。

大宇宙大神靈・仏よ

我が心に光をお与え下さい

心に安らぎをお与え下さい

心行を己の糧として 日々の生活をします

(己の心に一日の反省をすべし)

さて、ここまでの第一章は大宇宙の全なる大神靈にたいして光と安らぎを求めています。

大宇宙は、生命発祥の母体であり、大宇宙なくして、我々は存在いたしませんので、発祥の母体に、まず光を求めます。

すると、その光は各人の心の調和度にしたがって降りそそいでくるのであります。

心から唱えますと、心に安らぎを覚えます。安らぎは、各人の魂・意識に光が伝わって来るためにおこる現象です。

光を身に受けたなら、大宇宙の正法の生活こそ宇宙の法に適うものでありますから、宇宙の經典(人げん)の經典である「心行」にもとづいた生活を送ります、と最後の節で宣言するのです。この宣言が、ひじょうに大事なところです。

ふつう祈りというと、お願いごとで終わる場合が多いようです。お願いすればなんでも適えられ、と思いがちです。これは人間の弱さ、もろさからくる迷い(まよ)です。神と人間を切り離れた迷信(めいしん)からくる自己満足(じこまんぞく)です。

祈りというものは、人間が神の子としての自覚と、それへの感謝の心が湧き上がってくるときに

おこる人間本来の感情であり、そうした感情が湧き上がってくれば、当然、これにもとづいた行為というものがなければならぬからです。

祈りの根本は感謝であり、その感謝の心は行為となるものでなければ本物とはなりません。

大宇宙大神霊の光を求めると同時に、心行を己の糧として日々の生活をします、と唱えるのも、こうした理由からです。

また真の調和は、己の心を信じ、行なうことにあります。そうして、信じて行なう過程に、「祈り」というものがあるのです。

正しいと思つても、間違いを犯すのも人間、善なる行為と信じて、相手のうけとり方いかんでは、不善と見なされる場合もあるかも知れません。

人間の想念、行為というものには、これが絶対正しいと自分では思つても、そうでない場合がひじょうに多いのであります。

そこで、人間は、神仏の偉大な救いを求め、その求めた中から生活するように心がけることが大事であり、救いも、またそこから生まれてくるものです。

日々のご指導、心から感謝します

祈願文第一章の最後の節はこう結んでいます。

日々のご指導ということは、太陽が東から昇り、西に没する、春夏秋冬の転生輪廻、植物の生態、動物たちの生活……こうした姿というものは、われわれ人間にたいして無言のうちに正法の実体、実相というものを教えています。人はパンのみにて生きるに非ず、まず自然の姿、人間の存在というものを静かにふりかえる時に、そこに、大宇宙、大自然の計らいというものを人間は知ることが出来ましょう。

自然の日々の教えにたいして私たちは、心から感謝の気持が湧き上がり、その心が第一章の最後の節となるのであります。

第二章は、神の命をうけた上々段階、あるいは上段階光の天使に、光を求め、感謝するための祈りです。

すなわち、第二章の祈願文をあげると次のとおりです。

天上界の諸如来、諸菩薩（光の天使）

我が心に光をお与え下さい

心に安らぎをお与え下さい

心行を己の糧として日々の生活をします

日々のご指導 心から感謝します

諸如来、諸菩薩は、あの世とこの世を善導する光の使者であります。

私たちが人間にとつて、一番身近に感じ、救いの手をさしのべてくれる人が、光の天使であります。

人間が迷いの淵に立たされたとき、決断を迫られた瞬間、あるいは病床の中にあつて、心を新たに

し、反省し、祈るときには、これらの天使がその人の魂・意識に光を投げ与え、その人を救つてく

れます。

人は誰しも転生輪廻の過程のなかで、こうした天使と接触を持つており、したがつて救いはどん

な人間にも与えられているのであります。

縁なき衆生救い難し——という言葉がありますが、本当は、縁なき衆生というものは、一人もい

ないのであります。この意味は、今世で救われる者と、そうでない来世、再来世でなければ光の

け橋にのぼれない人もあるので、今世と限定したときにこうした感慨がでてくるのであります。

魂の遍歴というものは、外見では決してわかるものではありません。前世、過去世、あの世の生活

と一口にいえば簡単ですが、実は、過去世とあの世というものは、人間が想像する以上に複雑であ

り、魂によつては今世でどうするにともできないう者もあるのであります。

しかし、本来人間はみんな神の子、仏の子ですから、反省するときには光の天使の救いをうけられるのであります。

この意味で、第二章を唱えたときは、上々段階光の大指導霊の光をはじめ、諸如来、諸菩薩の光が伝わってくるのであります。

諸天善神の加護

第三章は、諸天善神の加護を求める祈りです。

天上界の諸天善神

我が心に光をお与え下さい

心に安らぎをお与え下さい

我が心を正し、一切の魔よりお守り下さい

日々のご指導 心から感謝します

諸天善神とは、人間の魂を悪魔から守るいわば法の番人です。心が正しく、慈悲と愛の心を失わず、調和の生活を送っている人たちにたいして、これらの天使は、いつでもどこにいても守ってくれます。

す。

諸天善神にはどのようなものがあるかといえますと、不動明王、摩利支天、八大竜王、大黒天、

稲荷大明神……といったものがあります。

不動明王——心の正しき者を守護する天使。

摩利支天——心の正しき者が誤ちを犯さぬように善導してくださる天使。

八大竜王——心の正しき人を守ると同時に、人間以外の一切の生物を統轄管理し、生物相互の生

存に必要な措置を講じてゆく天使。

大黒天——光の天使を側面から応援する。地上においては心の正しき者、正法を護持するための

経済援助をはかつてゆく天使。

稲荷大明神——五穀豊穡の手助け、情報の収集、また正しき者を助けてゆく天使。その方法手段

は、ある特定の動物霊を指導し神理を教え、その動物霊を手足のように使う。

このように、諸天善神は、法を守り、光の天使の活動がしやすいように、その行動を側面から応援

してゆくと同時に、心の正しき者の味方となつて、あの世における人間の意識界と、現実の地上

世界の両面にわたつて、働いている天使たちであります。

諸天善神は、光の天使になるための修行の場であり、役柄であります。しかも、如来、菩薩をも

救う力が与えられております。

人間は所詮、神仏にはなれません。誤ちを犯し、これをさげられないのも人間であるとすれば、諸天善神の助けを借り、その救いにたいして、感謝し報恩するのは当然であります。

守護・指導霊への祈り

我が心の中にまします守護・指導霊よ

我が心を正しくお導き下さい

心に安らぎをお与え下さい

日々のご指導心から感謝します

第四章の祈りは、私たちの潜在意識層にある私たちの本体あるいは分身にたいしてであります。その本体、分身が、守護霊となり、指導霊となつて、現象界に出ているその人の一生を見守り、魂の向上のためにあらゆる努力を払っています。

守護霊、指導霊について若干の説明を加えますと、まず守護霊は魂の兄弟（人間の生命は本体一人、分身五人から成る）の一人で、ほとんど専属的について守っている霊です。したがって、ある人の五十年の歴史（想念行為）を調べようとするとするならば、その人の守護霊からきけばわかります。こ

の場合ききだすこちらの意識が相手方より低いと、それは不可能になります。あの世の意識界は、自分の意識より下位の者の意識は見えても、上位の者の意識をのぞくことはできないからです。

指導霊は、主として、その人の職業なり、現象界の目的使命にたいして、その方向を誤らないよう示唆を与えてくれる魂の友人あるいは先輩であります。たとえば、医者として過去世に経験のない者が今世で医者となった場合、その人の心の調和度によって、より高級な指導霊がついて示唆を与えてくれるのです。

また人によつては、守護霊と指導霊を兼ねてその人を守り、指導している者もいます。

ともかくこのように、私たち現象界の人間にとつて、いちばん身近にいる魂の兄弟たちに、常に感謝し、「祈り」という調和された想念と行為を怠らないならば、その人の一生は、真に、安らぎのあるものとなりましょう。反対に不調和ですと守護霊はその人を守ることができず、これが長期にわたると不幸を招くことになります。

自然への感謝

これまで述べてきました一章から四章までの祈願文の内容は、宇宙の心と人間の心を結び祈ります。人間は、心と肉体とから構成されておりますが、そのもつとも重要なものは、各人の心です。心

は、素直に、のびやかで、自由自在でなければならぬのに先天的、後天的因果によつて、その円満さを欠き、性格がいびつになっています。それを修正し、もとのまるい心にするために、四章までの祈り、その祈り心にもとづいた実践行為によつて、人の心は、次第に修正されてくるのであります。

いふなれば、四章までの祈りは、天と地をつなぐ光のかけ橋です。

第五章は、肉体維持に協力される動・植・鉱にたいする感謝の祈りです。

万生万物

我が現象界の修行にご協力

心から感謝します

私たちが人間は、五体という肉体を持っています。肉体のない人間、これはあの世の人です。あの世の人は、光子体という肉体と異なるボデーを身にまといますが、この世では、原子細胞からできた肉体という舟に乗つて人生航路を渡つています。したがつて、舟を浮かべるには、水が必要、燃料が必要であります。この地上は、私たちが生まれる以前から、私たちの肉体保全のために、あらゆる素材を無料で与えてくれています。もしも、この地上に、私たちの生存に必要な食べ物、水、

太陽の光が与えられていないとするならば、私たちはこの世に出ることも、生きてゆくこともできないと思います。科学の進歩によつて、太陽光線を人工的に創り出すことが、仮に、できたとしても、その素材は大自然から求めてこなければなりません。つまり、肉体維持に必要な素材は、すべて、大自然から与えられているということを悟ることが大事です。

万生万物にたいして感謝し、万生万物をいつくしむ心、これが第五章の祈りです。

先祖にたいする感謝

第六章の祈りは、先祖代々にたいする感謝と供養です。

先祖代々の諸靈

我に修行の体をお与え下さいまして

心から感謝します

諸靈の冥福を心から供養いたします

現在、こうして肉体が与えられ千年に一度、二千年に一度しか出てこられない現象界にあるといふのも、もとをただせば先祖のたゆまざる調和への努力の結果です。

したがつて、先祖にたいして心から感謝するのは人間として当然の義務であります。義務とは供

養を意味します。供養とは、調和への行為です。感謝の心は、調和への行為となつて、はじめて循環され、己も、そして先祖の諸霊も神の光をいただくことができます。

この世の人が調和されるとあの世の人と調和されます。あの世の人はあの世の環境に安住しがりであり、向上は容易ではありません。これは自分が住んでいる下位の世界は見ることができても、上位の世界をのぞくことができないからです。そこで先祖の諸霊は、時おり子孫の家庭を見に来ます。その時、家庭内が争いや不調和に満ちていますと、地獄霊の場合は、自分のおかれている環境が苦しいために、家庭内に憑依し、苦しみからのがれようとしています。すると、その家庭内はいつそう不調和になります。家庭が調和されておれば、おかれている環境、想念に疑問を持ち反省するようになります。一方、高級霊の場合は、家庭が不調和ですとその家庭を守りたくても守りようがなく、反対に自分より調和されておれば、その家庭から反省の材料を得ることになり、その家庭を守りやすくなつてますますその家庭内は調和されることになります。先祖の供養とは、感謝の心が祈りとなつて調和の心が行為されたときに、はじめて実を結ぶものであります。

神仏との対話へ

祈願文に書かれている一章から六章までの意味は、これで一応おわかりいただいたことと思いま

す。

祈りというものは、感謝であり、行為である。

祈りというものは、天と地をつなぐかけ橋である。

祈りというものは、神仏との対話である。

神仏との対話とは、各人の守護霊・指導霊との対話であり、守護霊・指導霊はあの世の天使の導きをうけており、天使は神の意を体していますので、守護霊・指導霊の導きは、そのまま神の導きであるといってもいいのです。

ただいい得ることは、各人の心の調和度によって、その対話の内容もかわってくるということは否めません。このため、その毎日の生活の中で、正法に合った反省と努力、忍耐と献身、人間としての義務を果たしてゆくことが望まれます。そうして、こうした生活の積み重ねが、やがて自分自身の品性を高め、神仏との対話にまで向上してゆくのであります。

祈りについて気をつけることは、人間はややもすれば、祈ることによって他力的になつてゆくという事です。祈りが他力にかわつたとき、その祈りは祈りとしての意味をなさなくなつてきます。勿論、祈りは、守護・指導霊の力を借りることにはちがひありません。しかし正法の祈りは、神の子の自覚にもとづいた祈り心で行為するというのが、祈りの真意なのです。他力は行為を棚上げし

て、神仏の力にすがつてゆくものです。人間凡夫という前提で——。この点を間違えますと、大變です。

色心不二という言葉があります。物も心も、ともに大宇宙の心から出発し、この心を基点にして、万生万物ができあがっておりますので、人間の場合、心と肉体をすこやかに、健全に保つためには、中道という神意にそつた生活をする必要があります。

私たちの祈り（行爲）も、色心不二という中道の心にまで高めてゆきたいものです。

神しん理りの言こと魂たま

正直 しやうじき

自然は正直である

冬に雪を降らせ 春に花を咲かせる

人の心も正直である

心は己自身の偽りの証を述べたことを拒む

自然も人間も 神仏という大心にかたく結ばれているからだ

苦惱 くのう

夜空の星 太陽をとりまく惑星集団は糸乱れぬ秩序のなかにある

その分を守り 天命のままに従っているが故である

人の肉体も同様である

小宇宙として調和されている

人の世も それぞれが分を守り 天命を知るならば 破壊や苦悩は 生じては来ないものだ

執着

傲慢 逃避 中傷 妬み 愚痴 争い 独善 排斥 差別 自己顕示 自己満足——これらは人の心を毒す

執着の想念は 神仏の心からもつとも遠い距離にある

死を急ぐ

空を飛ぶ鳥は 地上に倉をつくることをしない

地上の動物も その日の生活に満足している

明日の糧を求めて 相争うのは人間だけだ

鳥や動物はその日の糧で生き永らえている

人は明日の糧を求めて死を急ぐ

人間よ！ 眼をひらけ——

正法しょうぼう

正法とは 大自然の法則をいう

春夏秋冬の四季 昼夜の別 生者必滅 因果応報 すべて ことごとく 正法に適合するものはない

自然の姿が変わらぬかぎり 正法も変わらぬ

正法は永遠である

人が永遠の生命を得ようとすれば 正法を学び行じよ

自然は常に 地上の人間に生きる方法を教え 慈悲を与えている

神理しんり

真は偽の反対 偽があるから真があると人は見る

だが 正法の理は 神の理をいうのである つまり正法神理は 自然が教える教えなのである

類は友を呼ぶ

心は万物を生かし 愛はすべてを癒す

水は低きに流れる

心こころまるければ肉にく体たいもまたすこやかかなり

己おのれに生いきる者ものは人ひとをも生いかす……

正しょう法ほうにもとづく神しん理りは 永まは遠えんにして不ふ変へんである

行ぎょう

行ぎょうのない正しょう法ほうはないのである

正しょう法ほうは生せい活かつのなかに生いかさされ 生いきていいるからである

自し然ぜんを見みよ——

自し然ぜんは 一いつ刻こくの休やすみもなく動うごいている 停てい止しはない

自し然ぜんは常じょうに動うごき 行ぎょうじ 行ぎょうずるから正しょう法ほうがそのまま生いきている

正しょう法ほうは 行ぎょうじて はじめて 生いかさされてくる

正しょう法ほうは 知ち識しではない

観かん念ねんでもない

あくまでもも行ぎょうなのである

正しょう法ほう者しやは 行ぎょうじて はじめて 自し然ぜんと一いつ体たいになる

想念そうねん

生命せいめいあるものはすべて輪廻りんねしている

地上ちじょうの四季しきがそうだし 万物ばんぶつはすべて変化変滅へんかへんめつをくりかえす

人の想念ひと そうねんも輪廻りんねの循環じゆんかんを統つうじている

悪あくを想おもえば悪あくが 善ぜんを想おもえば善ぜんがもどってくる

幸しあわせせを求もとめたいならば ます悪あくの想念そうねんから離はなれることだ

怒いかり 憎にくしみ 嫉あはれみ 嫉妬あはれ 嫉妬あはれ 中傷ちゆうじやうなど

こうした想念そうねんをつみとり 責任せきにん 博愛はくあい 勇氣ゆうき 努力どりよく 向上こうじやう——

こうした善ぜんの想念そうねんをいなくように心がけることである

人の幸ひと こう 不幸ふこうの根本こんぽんは 毎日まいにちの想念そうねんの在り方あかたにかかっている

幸福者こふくしゃ

多くおほくのモノを持もつ者と持もたざる者もの

そのどちらが幸しあわせせであらう

持つ者か それとも持たざる者であろうか
もしも多くを持つ者がそれを失うまいとし 持たざる者がそれを欲するとすれば
その何れをも不幸であるといわざるを得ない
一日の食糧は数片のパンで十分だし 居住の空間は数平方米で足りるからである
物の多少に幸 不幸があると考える人は本當に不幸である
なぜなら 自分自身を含めて あらゆる物質は
やがては大地や大気に還元されてしまうからである
幸せな人とは 失う物のない人をいう

慈悲 愛

この地上界も大宇宙も 神仏の慈悲と愛によつて動いている
人間もまた慈悲と愛の心を所有し 生きているものだ
正法という神仏の法にふれた者は まずその心を体し その意をくみ
実践する者でなければならぬ
慈悲を法にたとえれば 愛は法の実践である

慈悲を神仏とすれば 愛は人間の行為を意味する

それ故 慈悲は万生万物に無限の光を与えるものであり

愛は寛容にして 助け合い 補い合い 許す行為をいう

間違えてはならぬことは 慈悲も愛も

自ら助ける者にその光は与えられるということである

その心のない者 実践をいとう者には光は届かぬ

愛を求める者は 愛の行為を示せ

慈悲の門をくぐらうと欲する者は 法の心にくみとれ

末法の世を救うものは正法であり 慈悲である

慈悲を生かすものは愛である

慈悲を神仏の縦の光とすれば 愛は横の光である

柔和

怒ってはならぬ 怒りは そこにどんな理由があるにせよ その波動は

やがて己に返り魂の前進をばはむことになるからだ

己おのれに厳きびしく 人ひとには寛容かんようの態度たいどを決けつして忘わすれてはならぬ

柔和にやわな心こころは神かみの心こころであり 法ほうの心こころでもある

妥協たきよう

妥協たきようはぬるま湯ゆにつかつたような気分きぶんに似にてすつきりしない

妥協たきようには自我じがが伴ともなうからだ

しかし妥協たきようによつて一刻いっくわくの平衡へいこうが保たもたれているのも事実じじつである

たがいに自己主張じこしちしようを通とおそうとすれば この世よは一瞬いつしゆんにして 暗黒あんこくとなろう

妥協たきようは破壊はかいを防ふせぐ一時いちじのきの防波堤ぼうはていの役やくを果たはすが 永続性えいぞくせいはない

なぜかというと 妥協たきようには心こころからの共感きやうかんがないからである

愛あい

調和ちやうわは無限むげんの進歩しんぽと安らぎやすを与える

調和ちやうわの根底こんていには愛あいが働はたらいているからだ

愛あいには自己主張じこしちしようがない

おごりが無い

へつらいが無い

喜び悲しみがあつたとしても それにとらわれることが無い

苦しむ者があれば その苦しみを癒し

悲しむ者には光を当てて生きる希望を与える

愛は神の心であり 私心を去つた調和への偉大なかけ橋なのだ

この世に愛が満つれば 地上に仏国土が誕生しよう

神はそれを望み 神はそれを辛棒強く見守つてゐる

とらわれ

執着の心がある間は人間の苦しみ悲しみは消えることが無い

執着とは「もの」にとらわれることである こだわることである

とらわれの原因は生老病死であり それは五官六根を通してつくられてゆく

執着から離れたいと願うなら まずものを正しく見ることからはじめよ

正しく見るためには自己の立場を離れ 客観的な眼を養え

そうするとしたいに「もの」の真相が明らかとなり
とらわれの心から解脱するようになる

自由

人の心は一念三千と云って 無限の自由と無限のひろがりを持つている
その心がひろくと この世だけでなく あの世の姿も見通せる

さらに 大宇宙の果てまで旅することもできる

執着の心が消えると 心の自由自在性を身をもって体験することができようし

人間の真相を はつきりと自覚することができよう

人がその心を獲得すると 執着の心がいかに小さく 狭く 頼りなく

そのおろかさや悟ることができよう

真の自由は 執着の心を捨てたときからはじまる

夢

夢をみない人はいないだろう

しかしその夢を的確にとらえる人は少ない

夢はその時々々の その人の想念と行為をもっとも抵抗なく
偽りなく表現するものであるからだ

夢は心の窓でもある

めざめているときは周囲の眼や自分の意志によつて押さえられているその想念が

夢の中ではまるで意志を持たぬ生物のように自由気ままに動いてしまう

夢の中で正しく行為することができるようになったときに

その人は本物になったのである

その想念と行為について 悟りを得たといえよう

運命

運命にほんろうされてはならない

正法を行じる者は 運命を超えてゆく自分を確立することにあるからだ

運命はもともと自分がつくり出したものだが その運命に執着をいなくと

運命に心をしばられ ますます身動きできなくなつてくる

運命から自分を切り離すには何が大事かといえは

まず他人の眼で自分を眺めることだ

するとその運命の道筋が明らかとなり 運命の原因をはつきりと

とらえることができよう

客観的な心が養われ 他人の眼で自分がながめられるようになればしめたものである

自己の運命に苦痛を感じないばかりか

他人にたいしても博愛の心が大きくひらいてくるからである

勇気

人が調和ある中道を歩もうとすると 因習や周囲の環境 意見の相違などによつて

その前進をはばまれることがあるう

しかしそうしたことを恐れては 現状に甘んずるほかはない

正法を實踐するためには 努力と勇氣と知恵が必要なのだ

因習や意見の相違をたやすく乗り切るためには 相手の心を傷つけないように

知恵を使つて 勇氣を以つて努めることである

目的のために蛮勇をふるつては かえつて波紋を投じよう

仏智は 自ら努める者に与えられよう

神は 求める者の心に応じて 道をひらいてくれよう

責めるな

人を責めてはいけない

人を責める前に まず自分を省みることだ

大抵は 自分の心を 自分が非難していることが多い

自分の周囲に起こつた諸現象は

自分に無関係であることは絶無といつてもよいからだ

しかしなかには光にたいする陰の場合もあるであろう

その場合は 時を待つことだ

縁無き衆生は 時が経たねば救うことはできないものだ

愛

愛と憎しみは諸刃の剣のようにみる者がいるが そんなことはない

憎しみは自己保存であり 憎しみをかくし持った愛は 愛とはいえない

愛に自己弁護はない

愛に立場はない

愛に報奨はない

愛に自我はない

愛に甘えはない

愛に苦しみはない

愛に楽しみはない

愛には神の心しかない

神の心とは調和である

他を生かし 助け合う 補い合う 許し合える その心が愛の心に通じ

その行為が神の心につながって行く

誘惑ゆうわく

悪魔あくまは人ひとを誘惑ゆうわくすることはない

誘惑ゆうわくは己おのれ自身の心こころのうちにある

経験けいけん

人ひとはややもすると平坦へいたんな道みちを選えらびたがるものだ

しかし多おほくの事ことを知るには 多おほくの困難こんなんに当あたらないと知しることはできない

悟りさと

まづ己おのれを知しることだ

今いまの己おのれを知しることのできない者ものは 永遠えいゑんに 悟さとることはできないだらう

実践じっせん

人ひとは反省はんせいすることによって前進ぜんしんする

しかし反省の功德は 反省後の中道の実践にかかっている
実践のない反省は 観念の遊戯にすぎない

勇者

真に努める者は勇者である

勇氣は知慧から生まれ 智慧(仏智)は怠りなく努めるそのなかから生ずる

今

明日を頼むな

人の生命は今を置いてほかにない

行い

人を見るには 言葉より行いをみよ

天国と地獄

天国も地獄も人の心が創り出す

天国の住者は布施（慈悲）と他を生かす協調（愛）の行為のできた者
地獄は我執に心を奪われた者が集まる場所である

一歩一歩

正法は一日怠たれば一日遠ざかる

一年怠たれば一年離れる

僥倖という文字は 正法にはない

奇跡

奇跡は自ら助ける者に与えられる

正道に励む者の報奨として

自覚の機会として

迷いを打ち消す証として

神が与えてくれた慈悲であり 愛である

安心

安心の境涯は誰のためでもない 自分のためである

人をうらみ そねみ ぐちり 逃避に自分を置くと

それだけ正法から離れることになる

自分が愛しいと思うなら まず行ずることだ

今生で行じられない者は来世で 来世で行じられない者は再来世で

いつかは行じなければ安心という至宝を手にはできない

一秒一秒の歩みが 彼岸に通ずる貴重なかげ橋であり

人も正法も そのように仕組まれていることを忘れてはならない

自分との戦い

正法は自分との戦いである

己おのに克つつことである

業カルマの自分じぶんに負まけると その分量ぶんりょうだけ来世らいせに持もち越こし

もう一度いっぺんやり直なおさなければならぬ

二ふたつでも三みつつでもいらぬ

己おのの業カルマを正ただし 正道生活しやうどうせいかうの一いちページを飾かざるようになりたい

毒どく

人ひとの中傷ちゆうしやう ねたみ うらみをそのまま受うけとり 相手あいてを非難ひなんすると

中傷ちゆうしやう ねたみの 毒どくを食たべたことになる

毒どくは体からだをこわし 周囲しゅういを暗くらくする

波動はどう

己おのれ一点いってんのやましさがなく 心こころの鏡かがみを磨みがいておく

人ひとの非難ひなんは 発信者はつしんしゃのもとに勢いきほいこんで返かえって行く

人ひとの想念そうねんは光ひかりと同じおなじように 波動はどうと速はやさを持ち

必ず発信者に返つて行くものであるからだ

業カルマ

すべてのものが循環するように 業もまた循環する
業の循環を断ち切るには 努力と勇気が必要であり 知恵を働かせば
効果はもつと速まる

極楽

あの世の極楽を望むために正法を学ぶのではない
現在の極楽（心の安らぎ）を得るために行ずるのである
極楽も地獄も現在の自分の心のなかにある

現象利益

現象利益を求める信心は 信心ではない
信心とは ウソのいえない神の心を信ずることだ

正法にめざめてくると 人は 義務と責任の生活になつてくる
現象利益は そうした生活の中から 自然に湧いてくるものである

平等

守護靈はどんな人にもついており その人の心に応じて 指導靈が指導してくれる
自分はダメだ これでもいいのだ といつてあきらめてはならない
人間は皆平等であり 神は公平であることを忘れてはなるまい

愛

山を動かし 海をわかち 川をせきとめる力があつても愛には抗えない
愛は すべてを癒す神の心である
人を救うものは超能力ではなく 愛の力である

さばき

思うことは現れる

思うことは創造の出発点である

愚痴 怒り 不信 中傷 我欲……

悪(あく)の思(おも)いを心(こゝろ)の中(なか)につくりだしてはいけな

神(かみ)の裁(さ)きは 形(かたち)よりも 心(こゝろ)の姿(すがた)をみる

信頼と理解

親子(おやこ)の道(みち)は 愛(あい)と義務(ぎむ) 信頼(しんらい)と理解(りかい)とによつて生(い)かされる

主義(しゆい)主張(しゆじゆ)におぼれ 執着(しやくちやく)や自我(じが)に流(なが)されてくると 家庭(かてい)は 不信(ふしん)と疑惑(ぎわく)を招(まね)ぎ

生活(せいかう)の基盤(きばん)を失(うし)うことになる

自戒

忍耐(にんたい)は ひとつ間違(まちが)うと執着(しやくちやく)となり 自信(じしん)は 過(す)ぎると増上(ぞうじやう)慢(まん)となる

ものには表裏(ひょうり)の相(さう)がついてまわり 人(ひと)の心(こゝろ)は 悪(あく)に染(そ)まりやすい

常に 自戒(じがい)の心(こゝろ)を忘(わす)れてはならない

努力

人は結果のみに期待し、努力を惜しむ悪いクセを持っている

人生の意義は、結果ではない

努力する過程のなかに価値があり、光がある

役割

人は皆平等である

平等という意味は、神の前に、人間として平等であるということだ

能力、顔立ち、容姿などの相違は、平等不平等に関係がない

もしこうした点ですべてが同じであつたなら、この世の修行も

それぞれの役割も必要としない

ちがつた形でこの世に出てくるので、魂磨きが可能なのだ

全なる心ぜんなるこころ

五官ごかんに左右さゆうされると自分じぶんを見失みうしなう

五官ごかんを超こえた九〇%の意識いしき 全なる心ぜんなるこころに自分じぶんの意いを合あわせ 生活せいかうすることだ

そうすると色心不二しきしんふじという中道ちゆうどうの心こころを知しることが出来できる

全なる心ぜんなるこころは 第三者だいさんしやの立場たちばに立たった公平こうへいな見方みかた 考かんがえ方かた 念ねんじ方かたによつて

とらえることができるものだ

体験たいげん

体験たいげんは尊とうとい

体験たいげんこそ正法しやうぽうを知しる大おほきな手てがかりであるからだ

しかし 体験たいげん 体験たいげんといつて 体からだを動ごかすことだけが彼岸ひがんに至いたる道みちではない

考かんがえることも 人ひとの話をはなしきくことも体験たいげんの大だい事じな要素ようそである

何事なにごとによらず 一方いつぱうに片寄かたよると実みのりは少すくない

義務と責任

欲は自我と執着から生まれる

欲がないと人は生きられないと思われている

しかし人としての義務と責任を自覚し、これにもとづいた想念と行為があれば、自分を生かし、人をも生かしてゆくものだ

足ること

足ることの生活は、人間としての自覚を基礎におけば、よりたしかなものとなろう

足ることの限界は、心に抵抗があるかないかによつて判断出来よう

期待や我慢が内にある間は、足ることの限界点を踏み出しているといえる

足ることの中身は、それ故に、人によつて皆異なり、千人千様といえよう

忍辱

正法は自力であり、己の限界を試すことも必要なことだ

忍耐 にんだく たえしのぶことは 自分を向上させる意味で大事なことだし

正法を理解したならば 実践し その限界点を上げるようにしたいものである

謙虚 けんきょ

一升のマスには一升の水しかはいらないように 人にはそれぞれ器というものがある

おごり 高ぶる心ほど自己を見失うものはない

慎しみ 自戒し 謙虚な心こそ 神の心に適うものである

神の道 かみのみち

悪 あくの道は入り易く 神の道は毛穴よりも小さく 忍苦を伴う

今の自分がどの道を歩いているか すぐにもわかることである

神の道を行くか 悪に身をまかすか その選択は誰でもない自分自身である

五体 ごたい

肩の力を抜くと怒る心がおさまろう

悲しみが襲つてきたら大きく背伸びせよ

判断のつかぬときは天を仰ぐことだ

あせりが出たら瞑目し心を静めよ

人の心は一念三千

しかし五体(肉体)の動きで 心の針を平常に戻すこともできるのである

青空

正法は神の子の己の心を信ずることである

我(われ)があり 期待(きたい)があり 望み(のぞ)みがあり 執着(しやくちやく)があり 損得(そんとく)がある間は(あいだ)その心(こころ)ではない

幼子(おきなご)のような 雲(くも)ひとつない無我(むが)の青空(あおぞら)こそ己(おのれ)の心(こころ)である

無我

無我(むが)の心(こころ)に照(て)らして自分(じぶん)をみる

八正道(はちじょうどう)の正(ただ)しさは その極点(きょくてん)にいくと 無我(むが)の心(こころ)となる

重荷おもに

人の一生ひと いっしょうは 重荷おもにを背負せおい 坂道さかみちを上のぼるものというが そんなことはない

重荷おもにも坂道さかみちも 我ががつくり出だしたものの

我がを捨すてれば 心こころは軽かろく 人生じんせいの喜よろこびを覚おぼえよう

前進ぜんしん

時ときは前まえに進すすむのみである

人ひとも後うしろへ退さがることはできない

ならば 貴重きちゆうなこの人生じんせいを有意義ゆういぎにすこすべきではないか

公平こうへい

天てんは公平こうへいにして無私むし 人ひともまた平等びやうどうにして差別さべつなき心こころの所有者しよゆうしやである

しかし人ひとの世よは能力のうりよくべつの別べつ 好このみの別べつ 体たうりよくべつ力の別べつ 知ちしき識しきの別べつ 節せつど度の別べつ

喜きど怒ぬらう哀あはれ楽らくにも相さう違いがでてくるのはなぜであろうか

働く者と その義務を怠る者

行動する者と 傍観する者

学ぶ者と 遊樂にふける者

今日に生きる者と 明日をたのむ者

自分に厳しい者と 人を責める者

愛深い者と 薄い者

和合を旨とする者と 争いの種を蒔く者

謙虚な者と 自分を高く見せようとする者

責任を果たす者と 依頼心の強い者

足ることを知る者と 欲深き者

こうした相違が 平等であるべき人間を不平等にしている

しかし 天はけつして不平等には扱っていない

現在のそれぞれの人の姿は 過去 現在を通して

集約された自分自身をつくりだしているからである

灯台の灯

愛とは 寛容である

包容である

許しである

もしこの地上に愛なくば 人の世は水のない砂漠をゆく旅人に似て

飢渴に泣き 他をかえりみるとますら生まれでこないだろう

愛は 助け合い 補い合い かばい合い 許し合えるその中に生きている

義務 責任 勇気 献身——

こうした行為は 愛のなから生まれる

愛は 神の光である

地上の灯である

暗闇にさまよう人々の心にうるおいをもたらし 生きがいを与えてゆくものである

愛とは まさに灯台の灯なのである

だが 愛におぼれてはならない

愛は峻厳である

愛は自分にうち克つ者より向上をめぐす者に与えられるからだ

灯台の灯はそれを求める者に与えられる

しかし灯台の灯は船を動かすことはできない

意志

人は差別なく全真悟ることができる

早いか 遅いかの違いだけである

しかし早く悟ればそれだけ自由が早まり遅ければ苦しみの期間が長くなる

どちらを選ぶかそれは各人の意志が決めよう

苦の種

楽は苦をつくり 苦は修行と考えよ

人は誰しも楽を求め 苦から遠ざかろうとするがそれは間違いだ

苦の種を宿さぬようにしたい

悪あく

悪あくを犯まかさぬ者ものは一人ひとりもいないだろう

悪あくとは自我じが(偽ぎ我が)であり 足たることを知らぬ欲望よくぼうであり 自己じこ保存ほぞんであるからだ

悟さとり

表面意識ひょうめんいしきは悪あくである

潜在意識せんざいしきは善ぜんである

これを知しつた者ものは悟さとりの段階だんかいかいに入はいつたといえよう

先祖供養せんぞくよう

先祖供養せんぞくようとは 過去世かこせで修行しゆぎようした生命せいめいの兄弟けいだいたちに劣おとらぬ自分じぶんを磨みがくことである

それがまた肉体先祖にくたいせんぞの供養くようにもつながらる

時ときの流れながにゆだね 今世こんせの目的もくぎを忘わすれれば 天てんの配剂はいざいを自ら汚みずかすことにならう

眞・善・美

眞・善・美
—

眞はまこと

善は行為

美はその結果である

まことの行為は 神が人間に与えた祝福のはなむけだ

美とは神の光である

人間は 誰しもこの三つを具有し 生きてゆくものである

諸行無常

諸行は無常の中にある

生ある者は滅し 一日は今日しかない

変化変滅の現象界にとらわれず 生き通しの自分を発見する者こそ

安らぎと調和が与えられる

諸行無常の真意を理解せよ

とらわれ

見て見るな 聞いて聞くな 語つて語るな――

心にとらわれがあると 心定まらず 自己を見失う

真の勇者

真の勇者は 過去にとらわれず 未来を望まず 今に生きる者をいう

地位名譽

学識や地位 名譽や優劣の感情に心が揺れるあいだは

人は苦界の淵から抜け出すことは出来ない

解脱

解脱とは 怒り そしり 嫉妬 愚痴 中傷 貧慾 その他さまざまなる自我

欲望よぼう想念そうなんから超こえて 因縁いんげん生起せいぎの原因げんいんを見究みまめ 輪廻りんねの制約せいやくをうけぬことをいう

転生輪廻てんじょうりんね

人の魂ひとたましいは転生輪廻てんじょうりんねという神仏しんぶつの計はからいから 一歩いっぽも外そとに出でることはない

なぜかという人ひとは神仏しんぶつの子こであり 神仏しんぶつ自身じしんであるからだ

神仏しんぶつは無限むげんの進化しんかをめざし 無限むげんの調和ちやうわを目的もくてきとしている

人の転生てんじょうは この目的もくてきのもとに永遠えいゑんに続いてゆくものである

人ひとがもし この意いに反はんし 恣意ししいを求め 自我じがに身みをおけば

その人ひとは その分量ぶんりやうだけ償つぐないの労らうをとらなくてはならない

物質ぶつしつもまた輪廻りんねをくりかえす

集中しゆちゆう 分散ぶんさんという過程かていを通して そのエネルギーは永遠えいゑんの活動かっどうをつづけている

その活動かっどうの目的もくてきは 生命せいめいの転生輪廻てんじょうりんねを助け あるいは媒体ばいたいとしての役割やくわりを果たはしている

生命せいめいも物質ぶつしつも このようにして 転生輪廻てんじょうりんねという神仏しんぶつの法ほうの下もとに

神仏しんぶつの目的もくてきを果たはすために 生いかさされ 生いきている

意識

人が目覚めているときは 肉体が自分だと思つている

しかし 眠つているときの自分は 肉体が自分だとは思つていない

肉体の自分は 何もわからず 無自覚であるはずだ

これは意識が 肉体から離れるからである 親も兄弟も 妻も 子供も 友人も

職場も 何もわからない

目がさめて はじめて肉体の自分を自覚し 妻や子供のあることを知る

ということとは この世のいつさいのモノは 自分という意識がなければ

この大宇宙も 地上界も 自分の肉体も 認知することができない

それほど 己の意識というものは偉大であり

それは 宇宙大のひろがりを持つているものだ

この意識こそ 神の心に通じた己の心である

感謝

私たちは裸で生まれたが、裸のままでは生きられまい

衣食住という自然の恵みを得て、はじめて、生きる希望が湧き生存を可能にしよう

自然の恵みは無駄にしてはならない。

物を大事にするとは、自然の恵みに感謝する行為なのである

自然を生かす

万事は循環の法にしている

心も 肉体も 自然も

人が欲望に翻弄され、自然を欲望の具にすると

自然は循環のバランスを崩し、死に至る

自然の死は人間の死につながる

自然を生かす工夫を怠つてはならない

危機

人類が現状のままに進むと 衣食住の危機に見舞われよう

それもそう遠いことではない

今こそ人類は 自然の環境を整備し 自然と人間の調和を図らなければならない

それにはまず足ることを知った生活をする事だ

己を知れ

神の存在を知りたいと思うなら まず 自分の心を知ることだ

自分の心を知ると そこに神の偉大な英知と 慈悲と

愛の営みを発見することができよう

寛容

生活には妥協が伴う

しかし 心まで妥協し 調和を崩すと 苦惱が生じてこよう

己おのれに厳きびしく 人ひとに寛容かんようこそ 正法しょうぼうの生き方いかたといえよう

集団しゅうだん

人ひとは単独たんどくでは生きられない

これでは一代限りいちだいかぎりである

人ひとは集団しゅうだんで生活せいかうし 助け合あつて生きてきたから 人類じんるいに歴史れきしがある

人ひとは集団しゅうだんの中で生まれ 育またち 成長せいちょうし 魂たましいが向上こうじょうされる

逃避とうひは神かみの意思いしにそむく

才能さいのうと人格じんかく

人ひとの才能さいのうは たゆまざる努力どりよくと工夫くふうとによつて育またち 成長せいちょうする

才能さいのうはその人ひとの宝たからといつてもいい

しかし才能さいのうが その人ひとのすべてを表あらわしているとはいえない

才能さいのうと人格じんかくとを混同こんどうし 才能さいのうを優先ゆうせんすると 現代げんだいのような混乱こんらんした社会しゃかいを招まねく

神かみが求めるものは その人ひとの人格じんかくである

その人の全人格が 神の心に適っているかどうか問題なのだ

貴賤

人の貴賤は生まれではなく その人の生活態度にある

想念

すべての出発は心にある

想念にある

想とは心の上に相（かたち）と書く

念は心の上に今と書く

想念とはそれゆえに 心の中で常（今）に相（かたち）を描くことをいう

発明 発見 善悪 美醜は すべてこうした想念によって生み出され

形となって現われてくるものだ

使命

太陽系は太陽を中心に 九つの惑星と三十二の衛星が 整然と歩調をそろえ 決して気ままな行動をとることをしない

これと同じように 人にはそれぞれ器というものがある

人はその器にしたがって 今世での役目を果たしてゆく

人間の五体が 五体として成立するには 各諸器官の有機的な機能が必要である

それぞれが自己主張し 手足が頭を 頭が腕を望むとすれば どうなるであろう

五体はバラバラとなり 人間は一日として生存することができないではないか

ひとつの悟り

悟りというと宇宙即私の体現のように思われている 事実それにちがいない

しかし 悟りの本来の姿は 自分のひとつひとつの心の歪を修正することであり

これへの精進につきるのである

それゆえ その毎日の日常生活において 自分が気づいた欠点を正し

その正した事柄が 無理なく 自然に行えるようにすべきである
悟りというものは 自分の欠点を修正し その修正した事柄が 無理なく
行じられたときにいえる言葉なのである

そうして ひとつの悟りは 大きな悟りを導くカギを握っている

正しく見ることが出来れば 正しく思うことも 語ることも 自然に整ってくるものである
決して忘れてはならない

身近な 現実の 自分の想念と行為について ひとつでもいい 悟るように心がけよ

自由人

風流に身をまかす人 俗界から超然とする者が 自由人のようにいわれるが
真の自由人とは 社会的な制約の中にあつて それにとらわれず
為すべきことを果たして行く者をいう

無償の行為

天使(如来)は人の中にあつても もまれず 汚されず 人びとの意識を高め 神の祝福が与えら

れるよう 無償の行為をいとわぬ者をいう

天使

天使は人を見て 人にとらわれない

社会を見て 社会に動かされない

常に神の心に住して その心で毎日をすいす

足る者の心

足ることは自己満足 小成に安んずる 欲望を押さえることではない

明るく 積極的に 正道の生活を実践する者をいうのだ

それゆえ 足る者の心は 人生の目的を知り いやしくも欲望に動揺し 現象にとらわれることは

ないものである

真の人間

真の人間は 常に主体性を持ち 心は豊かで自由であり それでいて連帯意識を持ち

社会の義務を果たし 人びとの心を明るく 素直に

そうして その喜びを分かち与えて行く者である

現代

現代にとつてもつとも必要なことは 長い歴史の過程で積み重ねた人々の自己保存をくつがえし
自由と連帯の 本来の人間性を回復させる努力を惜しまないことである

思想・習慣

思想はその人の行動を束縛し 反省のない生活習慣は執着心をつくつてゆく

思想や習慣のズレは 親子の断絶を生み 嫁と姑の争いの種になる

労使の対立 信義の崩壊もまた然り

地上に調和と進歩を願うならば 自己中心の欲望から離れた反省と

それにもとづいた生活行為を為して行く以外にない

それはまず 自分から行ひることが必要だ

悪(あく)の(に)が(さ)

悪(あく)は思(おも)つてはなるまい

しかし悪(あく)を思(おも)わぬ者(もの)はいないだろう

悪(あく)を知らなければ 善(ぜん)の良(よ)さも 愛(あい)の尊(とうと)さも 摺(つ)かむことはできない

私(わたし)たちは悪(あく)の(に)が(さ)を知(し)ることにより より豊(ゆた)かな 愛(あい)の心(こころ)を理(り)解(かい)することができよう

輪廻(りんね)

万生(ばんじやう)万物(ばんぶつ)は一(い)つなる意(い)思(し)から生(う)まれ 一(い)つなる意(い)思(し)のもとに生(う)かされている

一(い)つなる意(い)思(し)から離(はな)れ 偽(ぎ)我(が)を主(しゆ)張(ちやう)すると

人(ひと)は苦(く)悩(のう)といふ試(し)練(れん)をうけ

悪(あく)の輪廻(りんね)をさまようことになる

一(い)つなる意(い)思(し)

躊躇(ちゆうちゆ) 逡巡(しゆんじゆん) 疑惑(ぎわく) 不(ふ)信(しん) 怒(いか)り 恐(おそ)れ 怠惰(たいだ) 優越(ゆうえつ) 劣等(れつとう)

さまざまな悪の想念を心にいだくな

想うことはもののはじめにして すべての原因はここにある

努力 反省 瞑想を通じて 内在する神をおもい 一なる意思に心をととのえよ
至福は頭上に輝き 死のない永遠の生命が与えられよう

花

花は 雨や風や人の足に踏まれようとも その季節がくると 開花する

花の美しさは どんな絵筆も描ききれない

花には自分がないからである

美

地上の榮華は野辺に咲く花よりも劣る 時が経つと朽ちてしまうからだ

しかし 花は いつも 自然と共に生き 自然にさからうことがない

だから その美しさを失うことがない

大自然

大自然は 法と慈悲(愛)の心しかない
報いを求めない

だから大自然は ゆつたりとしており あらゆる生命を生かし得る
安らぎと調和は それゆえに大自然の姿でもある
期待や望みや さまざまな欲求に心がゆれると それだけ安らぎと調和から離れてゆく
忘れてはなるまい

信

信ずるとは行うことだ

信じてなお行えない人は 信じていないことだ

地上界は行為の場である

「汝信仰あり 我行為あり」というイエスの言葉を想起せよ

永遠

愛は男女両性の間から芽生える

愛がなければこの地上は滅びるよりほかはない

愛は 他を生かし 助け合い 補い合う 神の意思にして

地上はその働きによつてのみ榮え

永遠の生命を受け継いで行く

人類愛

愛は男女の愛からはじまつて

親子の愛

兄弟の愛

隣人の愛

社会の愛

人類の愛に

発展して行くものだ

柱

愛は愛憎(執着)の愛ではない

愛は献身と神の義(義務と責任)

を果たすことによつて

光となり

地上社会の柱となる

作用・反作用

陽は東からのぼり 水は低きに流れる

自然はその条理を無言のうちに教えている

人が苦しむ 世上が騒然となるのは 自然の条理に反したが故である

作用といい 反作用というも 神理は常にそこに現われるものだ

悪の芽

未法を呪い 奇跡を願うのは 神を知らぬ身勝手な手がそれをさせる

蒔かぬ種は生えぬことを知るならば 悪の芽を摘み取る工夫こそ大事ではなからうか

法

法を念ひ 法に住し 法とともに歩む者はつよし

法は神の宮にして 仏の加護をうけるものであるからだ

解脱

眼を養い 耳を正し 臭に迷わず 舌を清め 欲を捨て 意をしずめるものは

生死の苦しみから

離れることができる

他力の罪

他力の間違いは人間の本性を行使しないことにある

人間の本性とは 神の子の生活にある 豊かな創造性と 広く大らかな自由な心をいう

他力は この二つの特性を閉ざし 本来の神性を失わしめる

己のカルマを助長し 進歩と調和の道を閉ざすものである

調和の思い

人は思うが故に人なのだ

思うことがその人自身を意味し その人の運命を決めていく

調和の思いが満たされたとき 仏国土が生まれる

子供

子供は自由だ 子供には想念による自己限定がないからだ いつも明るく 今日一日を天衣無縫に生きていく

心をしばるな

神の心とは 子供のよくな自由な心であり 何物にも拘束されぬ広く大きな心という
豊かな心は 現象世界から生ずる諸々の想念に自分の心をしばらぬことだ

試す器

小さな肉体に想念を固定すると苦悩という悲劇が生まれる 私たちの心は 宇宙大のそれであり
肉体はその心を試す器と心得よ

正定

喧噪の中にあつても正定の心が保てるようになったとき、その人は大きく前進したことを意味する。

神の理

宗教的神理は科学によつて法則に変えられつつある。

しかし、法則に変わったからといって、神理の本質が変わつたわけではない。

神の意思がなければ法則(神理)そのものも成り立たないからである。

遠離

知識のある者は、まずその知識を捨てよ。我執にとらわれる者は、一人で生きていると思え。

権利を主張する者は、義務をまず果たせ。

かくして顛倒妄想の自分を発見し、五官六根の執着のおろかさが理解されてこよう。

超越

生死を超えたとはいふのではない　五官六根に振り回される想念の基点をあらためること
なのだ

主義主張

信仰の世界は大抵は主義や主張を帯びてくる　長い歳月を経るにしたがつて　一つの筋道が出来上がり　その筋道に合わないものはこれを排斥しようとする傾向を帯びてくるからだ
この傾向は教理に矛盾が多いほど　強く現われる　教理に矛盾を認めればその信仰の形態は根本から崩れるので　教理に合わないものは排斥するしか方法がないからだ

正法

正法の教理は大自然である　人間の知や意のそれではない　したがって争い　排斥　矛盾というものが
ない

もし　大自然の運行に　矛盾や争いがあるとすれば　地上の生活は成り立たないだろう

交信 こうしん

正法を實踐する者は「忍辱」の二字を忘れてはなるまい。「忍辱」は新たなカルマをつくらぬ最良の処世術であるばかりか、心を平安にし、天上界と交信できる太い絆となるからである。

運命 うんめい

人の運命は大抵予測がつかない。心が五官煩惱にふりまわされているからだ。煩惱の執着を断てば、自己の行手がなんであるか、明らかになるものである。

人間の価値 じんげんの かのち

人間の価値は、最も困難な環境におかれた時、または自己の欲望を自由に満たすことの出来る環境におかれた時に、決まるものである。

習慣 しゅうかん

習慣とはおそろしいものだ。

習慣が執着につながることを知らないがために 人はさまざまなき悩の一生を終えていく
習慣を見なおし 習慣に染まらぬ自分を確立せよ

精進

法をよりどころとして 一切の執着を断つた者は

たしかに 退歩することはないだろう

しかし その法が知識となり 空転して行為が伴わなければ

坂の上から車が転がり落ちるように

アツという間に 下界に落下してしまふだろう

正法は 常に精進であり 一日一秒の精進である

